
女鑑
第十八年 第七號

女鑑第十八年第七號目次

讀者文藝

裝畫

みゞす



木場博士の家庭



法學博士 木場貞長君



令夫人 小百合君 令孃 清子君

閨秀歌才



丹波博士令孃　豐子君



內藤子爵夫人　桂子君

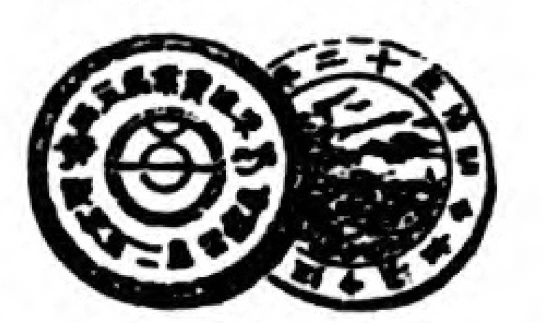
第五回内國勸業博覧會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白さに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ鑵詰 八錢

別製鑵詰 五拾錢

大袋 二錢　小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性ありて◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜るし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHING POWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

河田氏の家庭



河田烋君



夫人りき子君



長男烈君



二男猷君



三男杰君



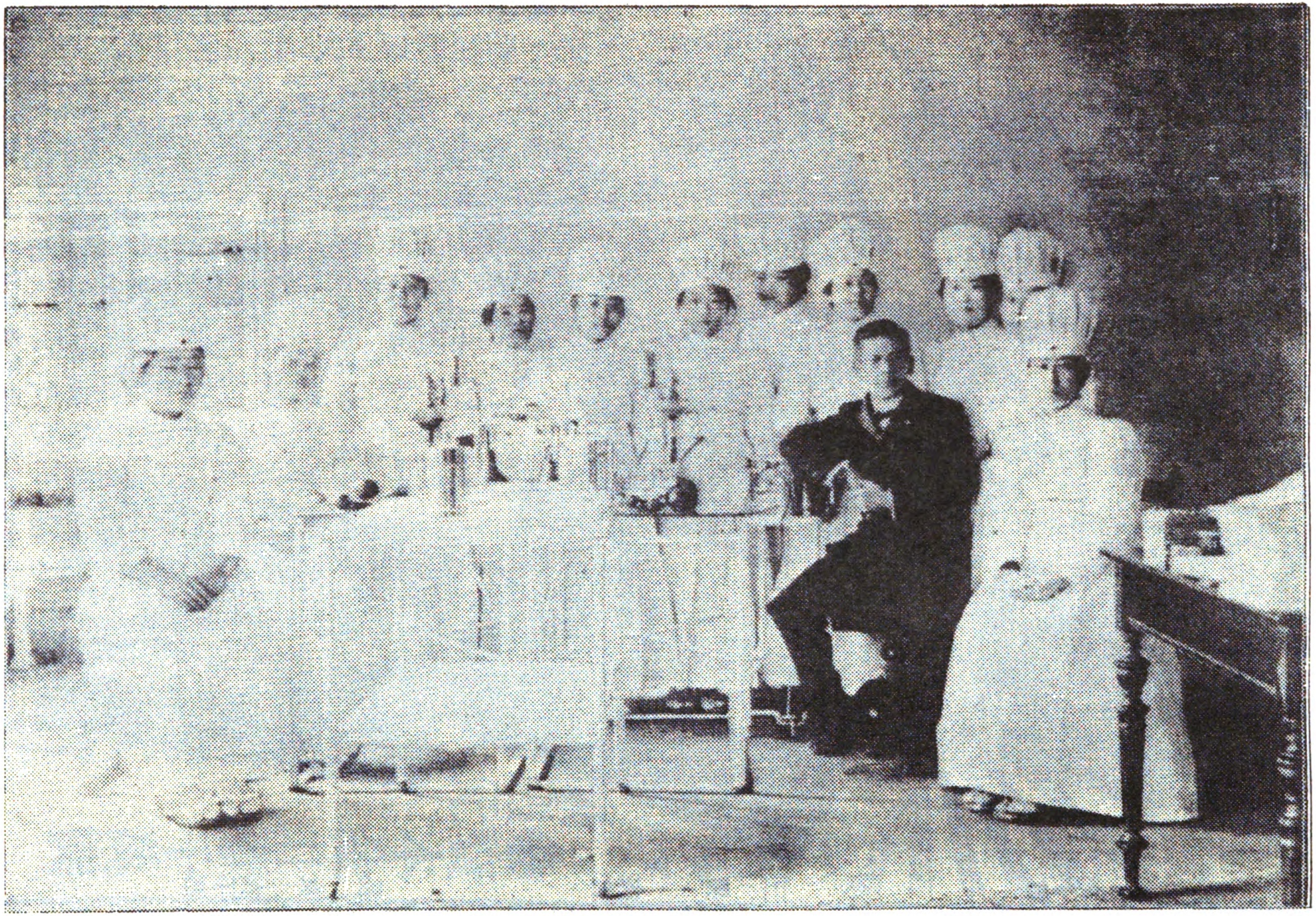
四男煦君

五男黨君



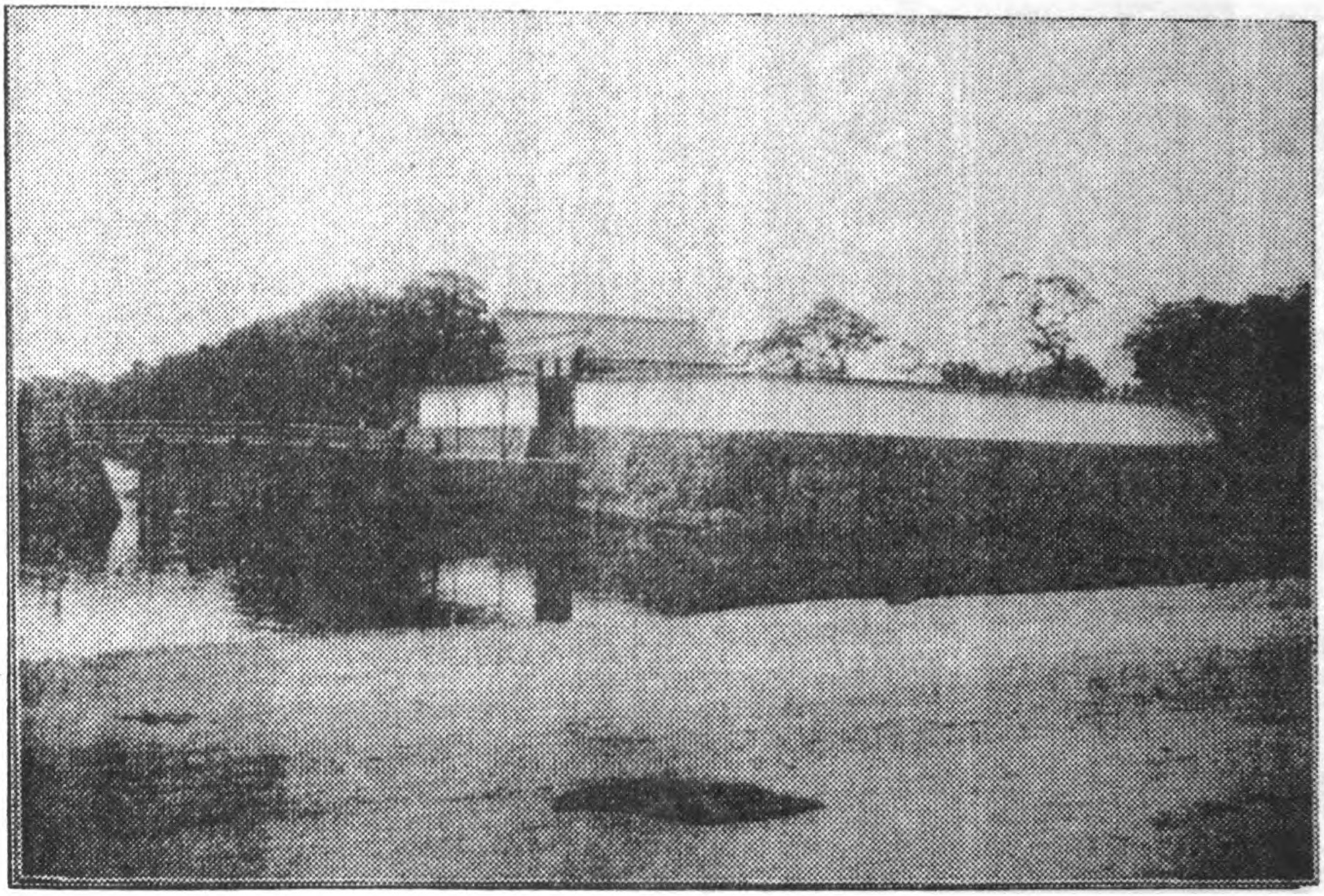
長女衣子君

赤十字の病理研究



看護婦の耳鼻咽喉科研究生

雲井の庭



濱離宮



新宿御苑

毛髪の發生をよくし脱毛を止める毛髪化粧液として歐米に大評判の流行品に佛國「ヒベール」會社製造の「ペトロール、ハーン」です毛髪を大切にせらるゝ淑女紳士の愛用を賜はらんことを願ふ

大壜　貳圓貳拾錢

小壜　壹圓五拾錢



◉舶來束髪用櫛及化粧品一切取揃申候

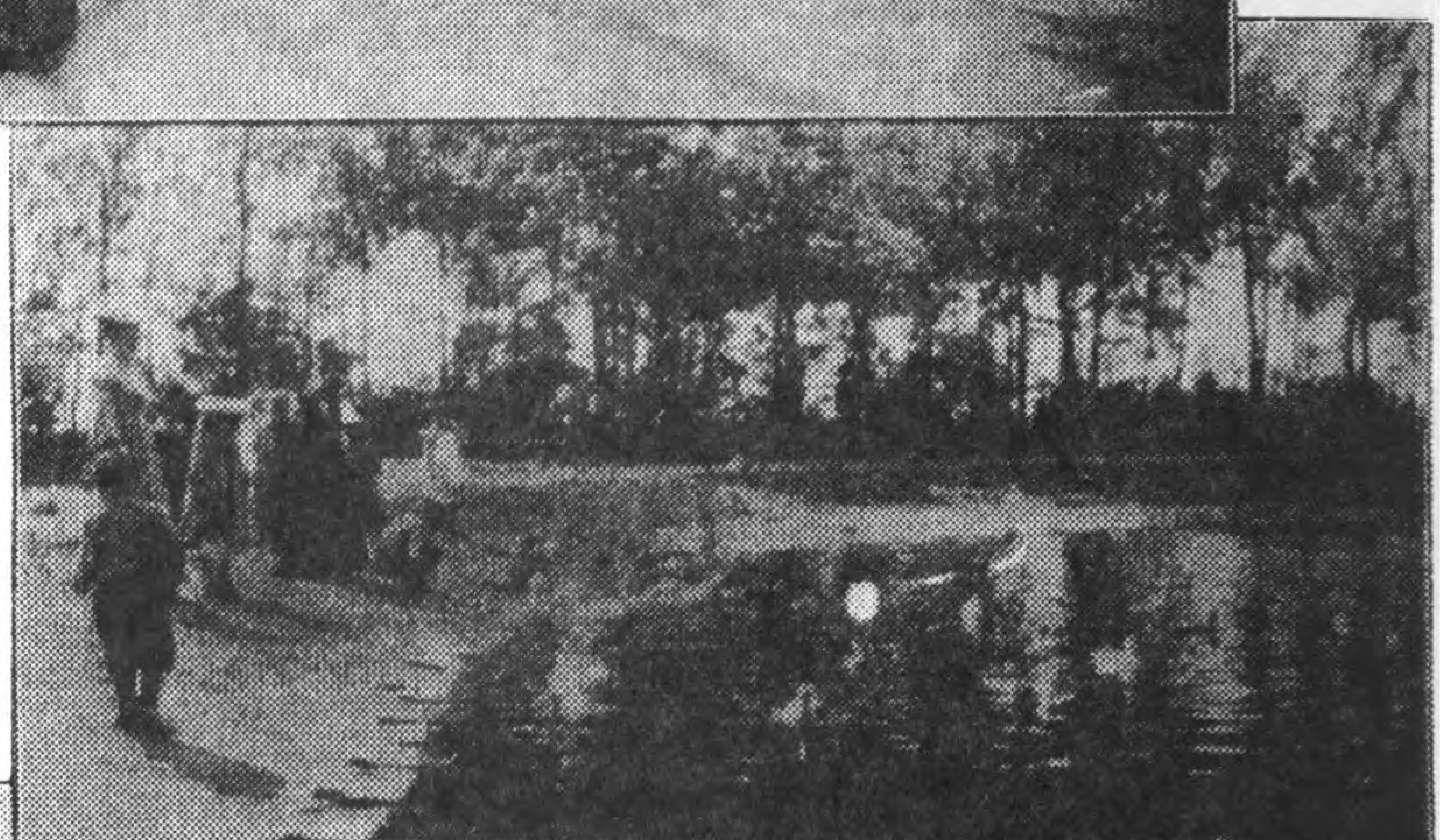
「アクム、フレンチ、マッサージ、クリーム」一手販賣店

京橋區尾張町二丁目二十五番地電話新四三三五

めでたや

獨逸の公園







溪水氏寄

胃病根治劑

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐの制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムネスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

（藥價）一劑四十二錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增

新輸入 美容料 肉體 白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を燒ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥 **專賣元**
東京市神田五軒町十九番地
日新館藥房

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にても必ず立處ろに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉**血塊**流經す且つ月經不通止及び月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**なることを一掃す確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

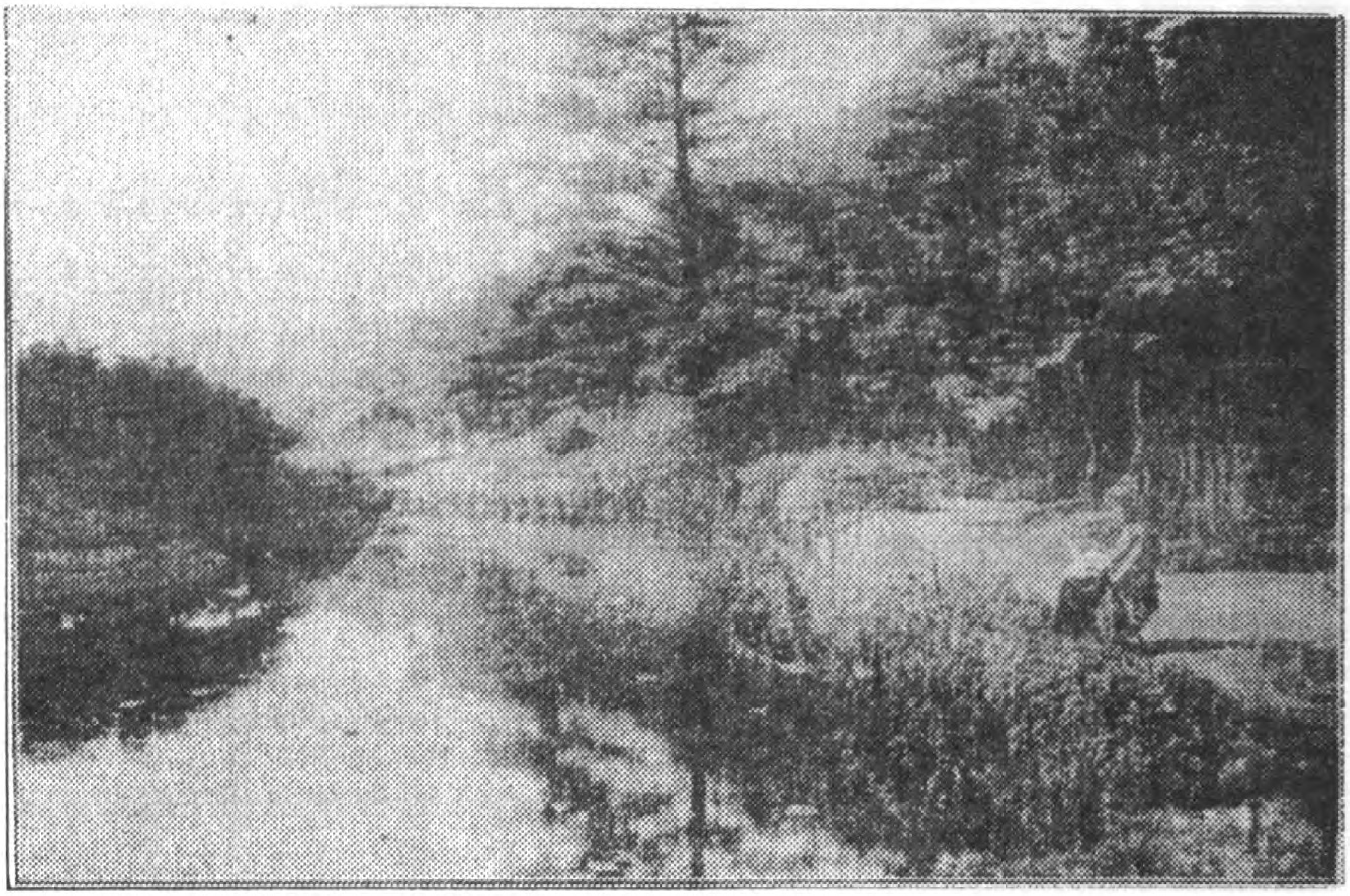


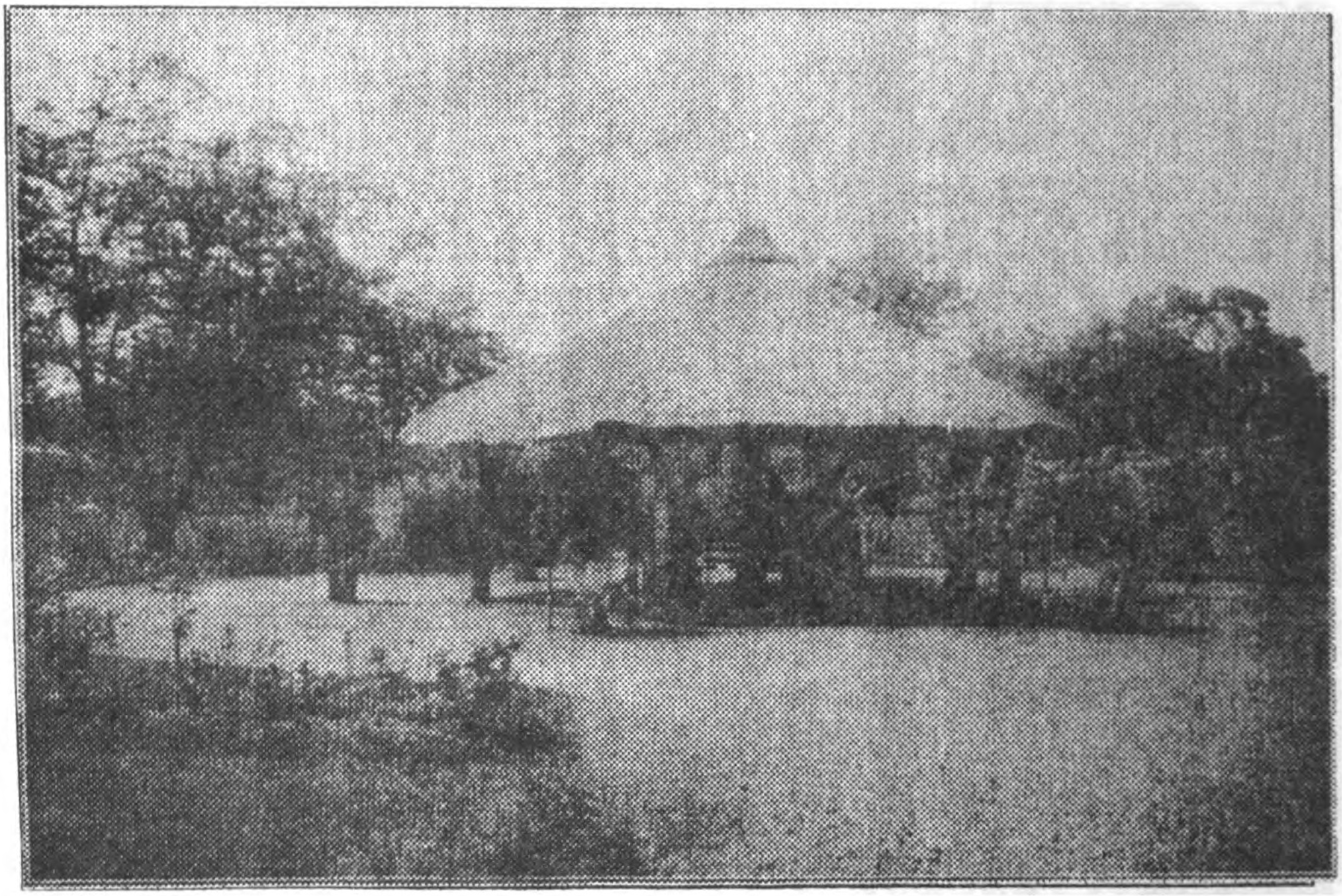
わきが 腋臭 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 **專賣元**
東京市神田五軒町十九番地
日新館藥房（電話下谷五四六）

小石川植物園





世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること無痛保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかすいぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二樣に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特效新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。こつ毒。かんさう。よこね。ようばいそうたいどく。痳毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することを確證す從來醫療賣藥等百方手盡すも全治の效なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ 藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用は必ず貳割增しの事

新 毛の必ずはえる確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に係る世界無比の毛髮發生藥なり即ち腫物の痕はげの痕やけどの痕頭髮及はゑきわの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛のなき人本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生することと確證す本劑は世にありふれたる種々雜多の毛生藥とは其效眞に天地月鼈の大差あるに付玉石混同視すること勿れ藥價は特別製貳圓卅錢並製壹圓廿錢

世界唯一

痳病消渴の根治新藥

痳滅(りんめつ)

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

痳滅は最も進步したる最新の痳病消渴即治模範藥なり本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗ろ峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して**痳病消渴**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は持別製分にて必ず誓て根底より**根治**することを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無效有害の姑息藥と異なり奏效確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

以上四藥 專賣元
東京神田區五軒町拾九番地
日新館藥房

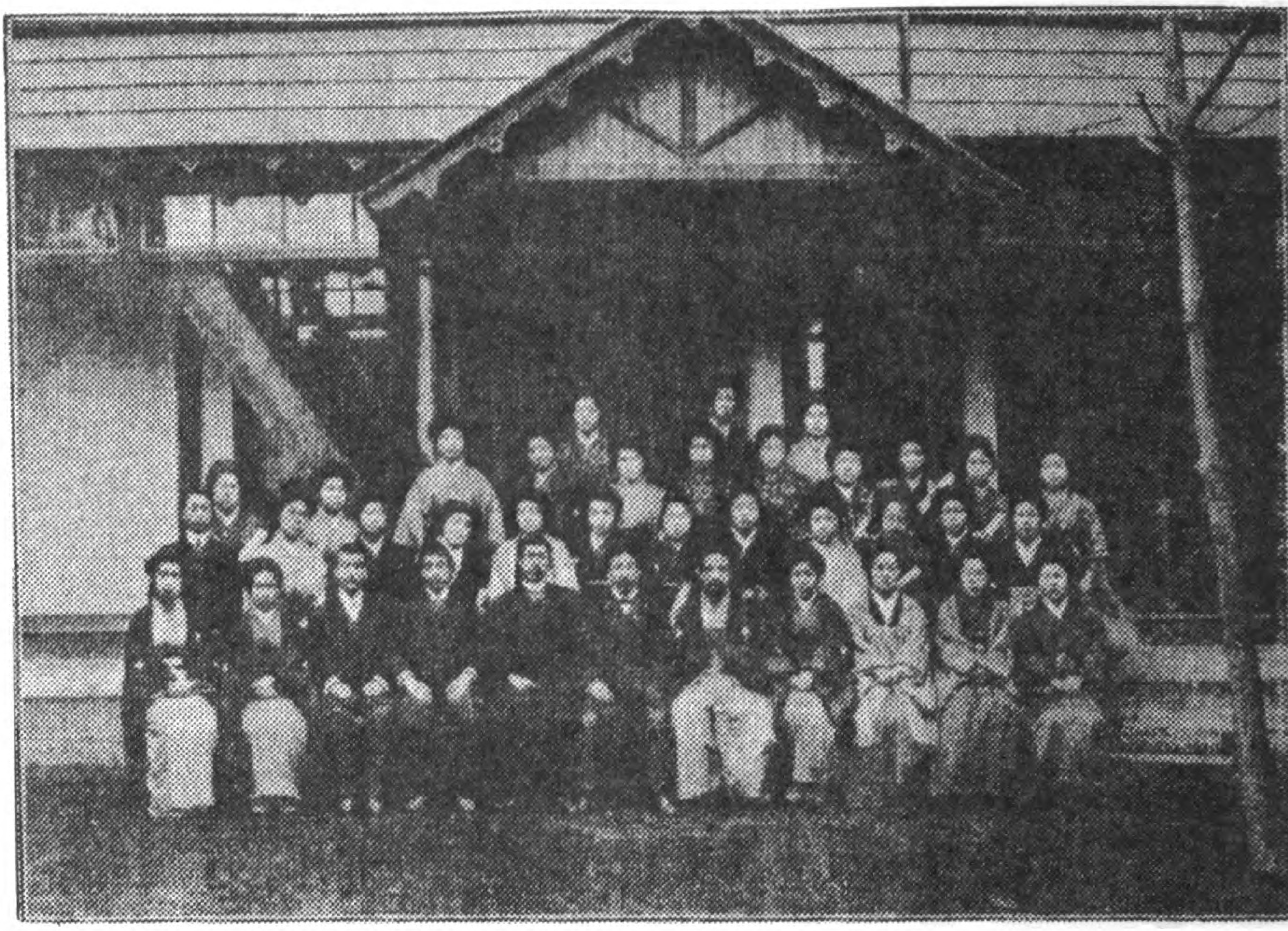
白色特效 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個一函入同上貳圓參拾錢

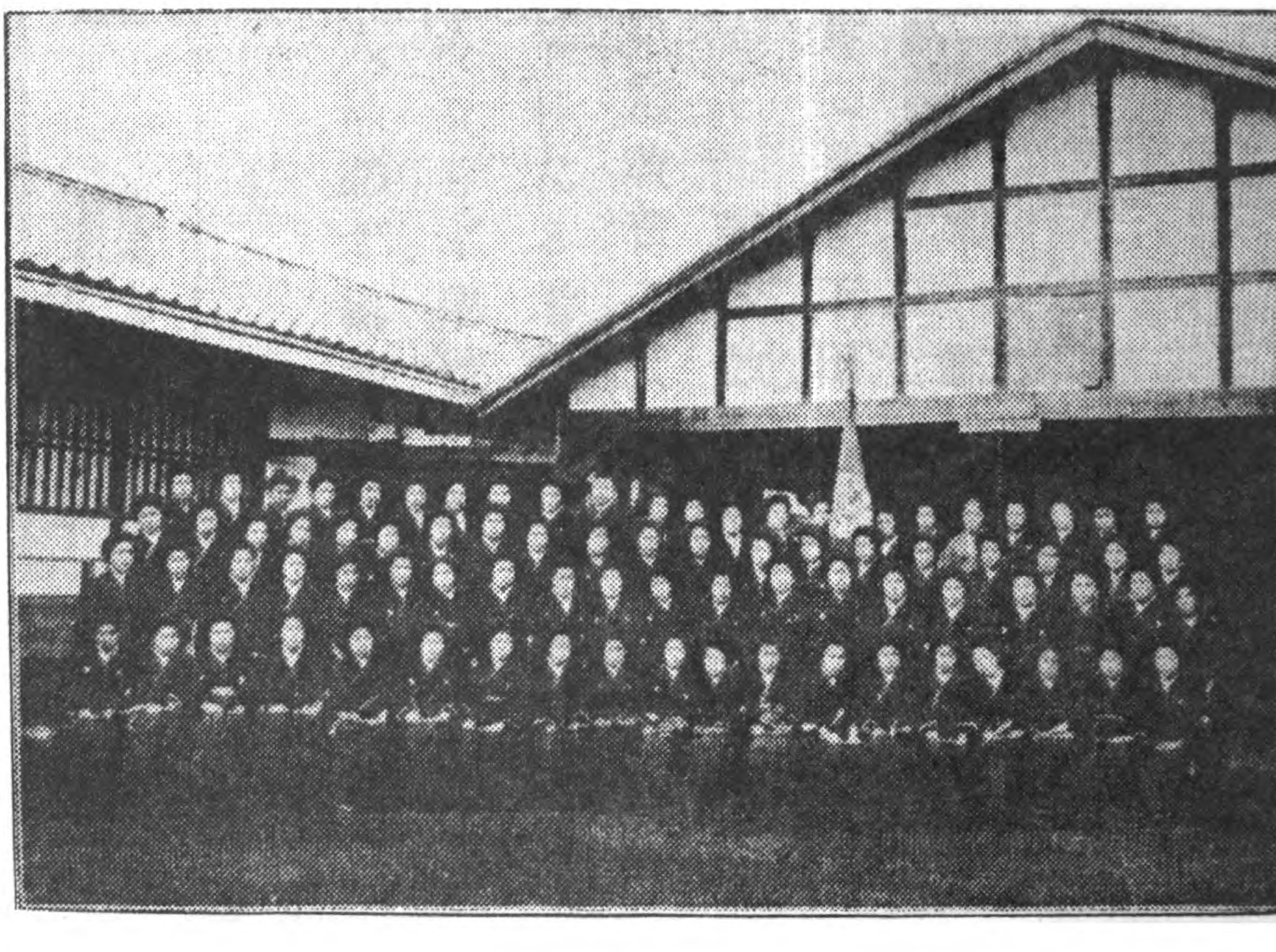
此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは荷も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特效の一二を揭げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くし、**粗糙質**を去するは此石鹸特有の神效なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し蘇るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て他人を瞞着するる內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

一手輸入 專賣元
東京神田五軒町拾九番地
日新館藥房

女學校の卒業生



女藝專修學校



京都淑女高等女學校

中元と御贈答品

最も喜ばるゝ御進物品は何ぞや？

最新流行の内外百貨を取集たる三越呉服店は中元及暑中の御進物用として特に左の品々を澤山に準備致し置候間多少に拘らず御用命奉願候

▲呉服物―白縮緬、白絽、染帯、壁御召、袴地、絽友禪、明石、透綾、上布類

▲木綿物―紅梅中形、友禪青梅、吾妻セル、絞新絹、菖蒲縮、紺絣、白絣類

▲雑貨類―帽子、洋傘、香水、石鹸、手巾、玩具、文房具、履物、旅行用品類

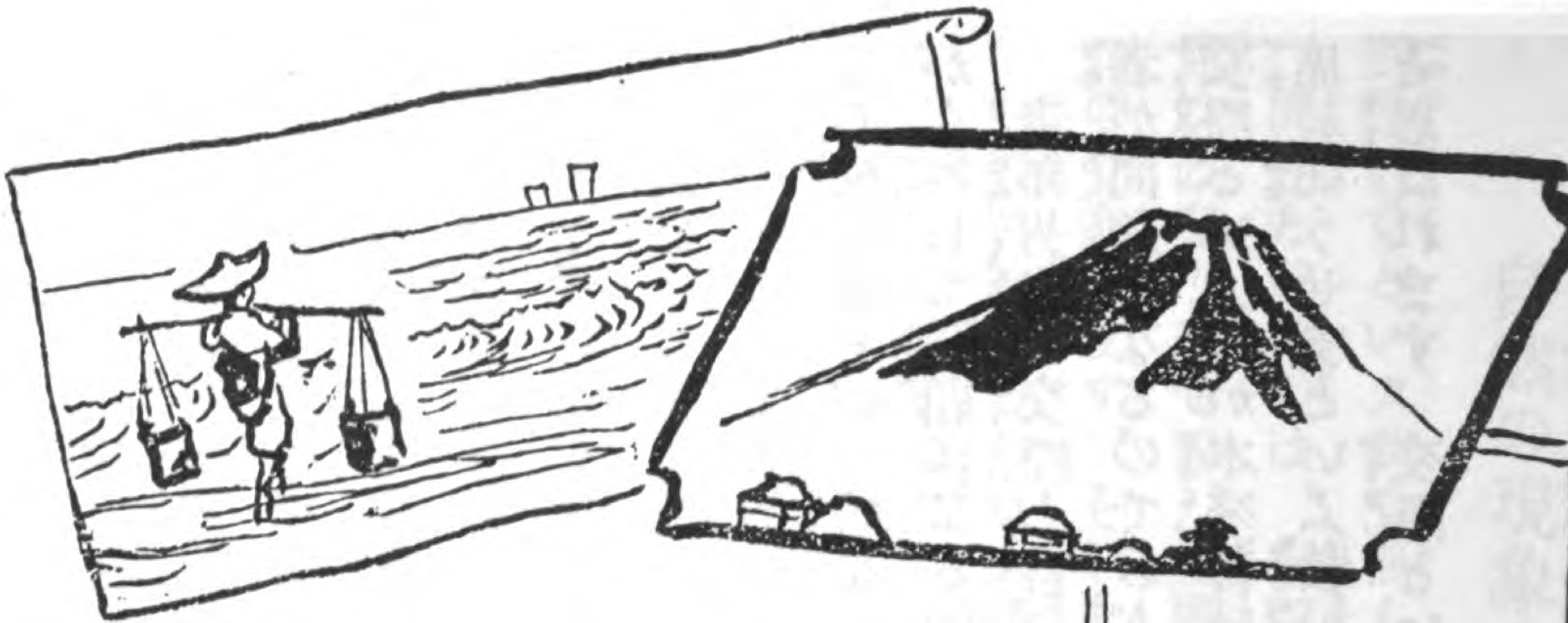
▲美術品―繪畫、陶器、磁器、七寶、漆器、團扇、扇子類

▲商品切手―當店の商品には總て共通にて体裁頗る宜し

デパアトメント、ストーア

三越呉服店

東京日本橋





女鑑
第十八年第七號

青年男女の交際

文學博士　三宅雄次郎

私の今こゝに話さうと思ふのは、男女の交際といふよりは狹く、男女學生の交際といふよりは廣く、そのあたりの思ひ付を申すのでありますが、青年男女の交際と申しまして、村の若い者の交際などを含んで居らぬかと思はれます、村では名主庄屋とか、少し大きな家では色々飾りがありますが、普通一般には、若い者が男女共立合つて話もし、田圃の道連になつても行く、又互に家にも出入りをするといふやうな事でありまして、此邊に別段交際といふことは問題にならぬかと思はれるのであります、其邊では普通に交際が行はれて居ると見て差支ありますまい、所が、村に住む者、日本では全國民の十分の六を占めて居る、過半數は交際の問題にならぬも

のであります、村でなく町に至つても、極く低い所の者、人足のやうな者は勿論でありますが、小さな町の駄菓子屋とか青物屋とかいふ所には、若い者が自由に話をして出入りをする、斯ういふやうな邊りも交際といふとは問題にならぬ、もう少し店を張つて居る者でも、隨分若い者が話合をするといふ樣な事があります、殊に青年男女の交際といふ事が問題になるのは、村の中では極く僅かな部分、それから町でも或位置を占めて居て、自分の子息とか娘に不都合があつたら困る、自分のやうな位置の者若くは其れ以上の者と交はらしむるに困難であらうと心配するのが先づ問題になるのであると思はれます、敎育でもどれ丈け高い所まで受けさす家、資産の有無に拘はらず、自分の子供が普通より以上の敎育を受けさす所、又は敎育を受けさせなくても、資産があつてどれだけか其周圍に立てられて居る者、言はゞ良家の子といふ者が問題になるのであらうと思はれます、

男の子にしても不締で、何だか先きが案じられるといふのは、其家でも心配であり、他から娘を遣るにも心配しますが、娘なら猶更、不都合が出來てはその先き一生の不幸になるのでありまして、其心配を傍から察して問題になるのであると思はれます、

青年男女の交際と言つても、廣い意味に於ては問題にならず、唯だ良家の子若くは良家の子に准ずべき者が問題になるのであります、さうすると、交際が如何であるかといふ事は、初めから心配を含んで居る、交際といふ事が本來善い事であるか惡い事であるかといふので無い、嚴重にするのと別段男女七歳にして席を同うせずといふ敎から來て居らぬ、さういふ敎を記憶したり、又それを守つて居る者は多く無からうと思はれます、交際といふ事は

自然の現象として許されて居る

別段許すといふので無く、以前からの習慣であつて、無意識に許して居るのであるとして善い、問題となるのは、交際を裏町又は村の人と同じくすると、何うも弊があるといふ心配から起つて居ると見ねばなりませぬ、全國民の中の或る特別の部分に對する問題であつて、特別の事情の下に論せねばならぬのであります、それを世の論者は、動もすれば一般に論じやうとする傾きがあるやうに考へられます、一般に論ずるのは大抵二た通りであります、一つは初めから自由といふ事を動かす可からざるものと認めて論じて來る、もう一つは物が總て習慣であるといふ事から論じて來るのであります、

人には自由が大切である

政治上でも善い所は皆自由が充分に得られる、それを制限するのは未開國である、男女の交際の自由はなるほど善い、是までの樣に制限するのは不都合であると見るのがありますが、此自由といふことは、近頃議論を通り過ぎて居つて、其是非を論ずる者もないやうでありますが、初から自由には或道理が伴つて居ると見ての事でありまして、自由が何でも我儘勝手にする事であつて、勝手次第にすることを善いと見たのは、或反動の時を除いてさうは無からうと思はれます、社會に於ける自由は、他から制限するか、又は自ら制限するに極つて居る、全く自由を許して少しも干渉せぬといふのは、各々自ら制するに足るの力を具へて居ると看做すのである、自由意志と道理と始終相伴ふ程に進んで居ると見ての事であらうと思はれます、さうすると自由といふ事を許す上にも、自然に或道理と伴つて行くであらうか何うであらうかを見ねばならぬのでありまして、唯どうでも斯うでも制限を除かねばならぬといふやうな事は聊か考へもので

あります、

それと又政治上の自由と男女の自由とを同じに視ることの出來ぬことがあります、是までも國家と家と同じやうに比論した者もありますが、國家と家とは何處までも同じく視るといふ事は出來ぬのであります、國家で人民の自由を制限するのは、大抵己れの邪魔になる、權力を振ふに邪魔になるといふので制限するのでありまして、眞の親切心を以て人民に對する如くにいふのは、家族に喩へて言ふだけであつて、實際大に違ふのであります、多くは自分の思ふやうにならぬ、自分の氣に障るといふやうな所で、強ひて抑へ付けるに過ぎぬ、所が家族で親が小供に對するとなると、自分の勝手が行はれぬから、小供を制限するといふやうな事は多く無からうと思ひます、良家の親達は眞に小供の爲を思つて自由を制限する、

自分の爲で無く小供の爲

といふ事を全く誠意から思うて居るのが多數であるやうです、政治上の自由及び壓制を以て家族を論じて來るのは、元が間違つて居るのであります、

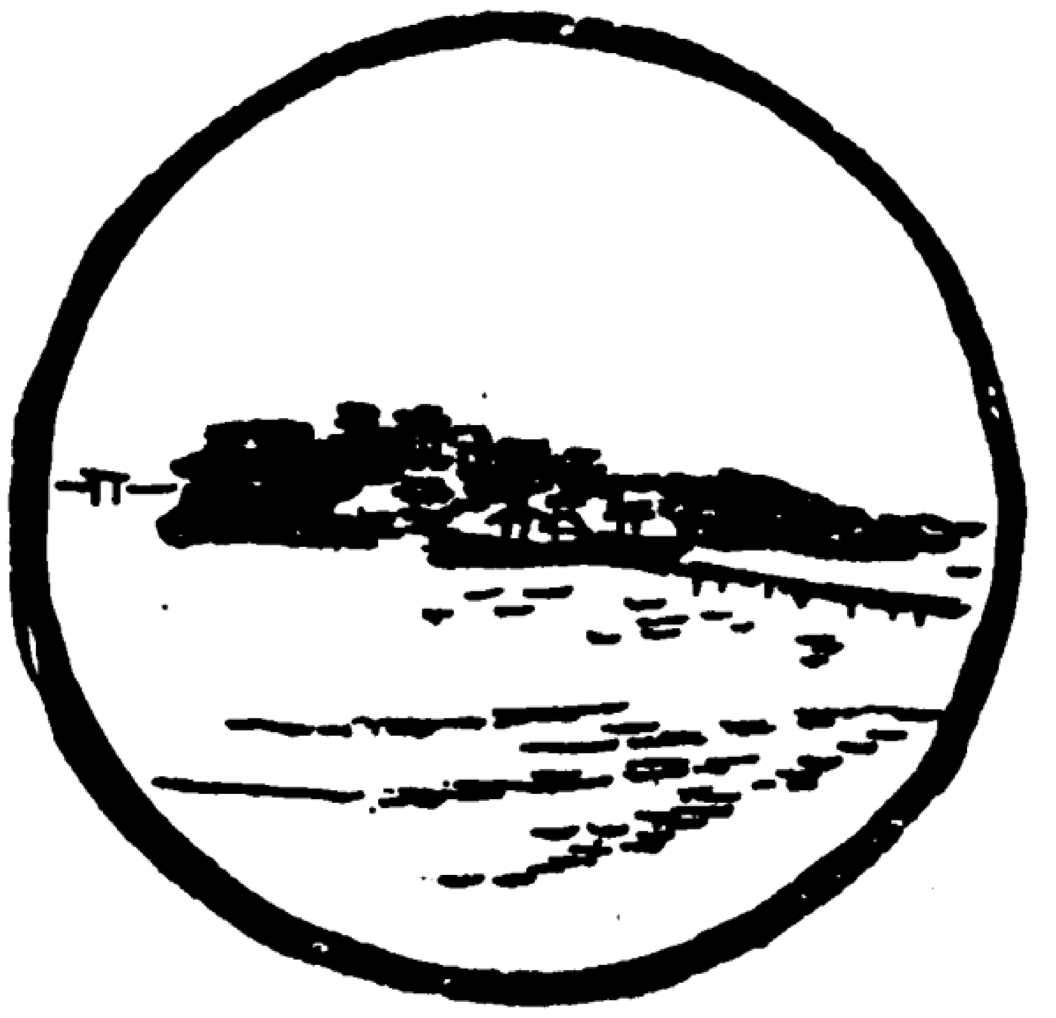
それから物は習慣次第であつて、男女交際をすると弊があるといふのも、

まだ其充分に慣れぬ

からである、何時も相交つて居ると弊のあるやうな事件の起る事は無い、といふやうに云つて居る人もありますが、是はさう一概に云へる事で無く、隨分考へた上にせねばなりませぬ。充分に調べるには統計を擧げねばならぬのでありまして、此統計は當分六づかしいから、幾分か水掛論になりますが、その習慣次第といふ事は、家の兄弟姉妹皆一緒になつて居ても、其間に何も畜生のやうな念が起らぬ、といふのは小

供の時から一緒になつて慣れて居るからであると言ふのでありますが、是は大なる間違であらうと思ふ、兄弟の間の情は色々な事情が附帶して居りまして、矢張親を始め周圍からも色々な事を先づ敎へられ導かれて育てられて居りますから、普通に言ふ、猥りがましいといふやうな事が無いのである、それが眞の兄弟、姉妹でなく、養子女であつたりして後々互に夫婦になるのであるといふやうな事が分つて居たりすると、結婚前に色々な事が起つて來る場合が少なからぬのであります、初から血筋の兄弟姉妹でない事が分つて居る所では、さう安心の出來るもので無く、親に於てもナカ〳〵心配して居るやうに見えます、それで兄弟姉妹の間、何事も無いから慣れさへすれば宜いといふのは間違つて居らうと思はれます、

まだ其他にモット自由にせよといふ說があるかも知れませぬが、さう皆讀んだ事がありませぬから何とも申す事は出來ませぬが、此邊が重な所であるやうであります、其處で此二つとも餘り充分に注意せぬ言葉であつて、其上一般の事を以て或特別の部分を推す事が出來ぬといふ注意をも缺いで居ります、男女交際が業々しく問題となる樣な部類に向ては、自由が何うであるの、何がどうであるのといふよりは、如何にすれば弊が最も少なく、程好くやつて行かれるであらうかといふ事を求めるのが肝腎であります、何も親達が小供を束縛して交際をさせぬといふので無く、唯々その先き過ちがあつては困るといふ心配があるばかりで、



其心配さへ無いやうにならば

幾らでも交際をさせるに相違ない、

絶對的に自由に

するであらうと思ひます、交際が善いとか惡いとか、唯々大體の上で論ずるのは問題を外れて仕舞つて居るのであります、

乃で如何すれば良いかといふ事になりますが、此交際は固より自然の事で、又其弊を心配するだけの事でありますからして、其弊を無いやうにしやうといふのでありますが、此交際を旨くするのがナカ／＼急には出來ないかと思ふ、どれだけか其方へ向けるにしても、又せねばならぬとしましても、旨く交際させやうといふ方法を急に整ふる事は六づかしい、交際は只々青年の間だけでなく、大きな者の中でも旨くやつて居らぬかと思ひます、大人の交際といふものが好く出來て居らぬ、先づ人が澤山集まるといふ事は、多くの家から言つたらば極く僅かな事であります、大抵は二三人位の客がある、用談がある、さうで無ければ碁を打つといふやうな事で、少し交際らしい交際といふものは、チヨッと家で出來惡いやうになつて居る、それから客をするにしても、みんなが腰を掛け居れば誰とでも話を仕易いのでありますが、座敷で坐つて居る所で、向ふと此方で打解けて話するといふ事は、懇意な間柄なら宜うございますが、さうで無いと仕惡い、其中へ大人が小供を連て行つても、若い男と女と話するといふ事は隨分六づかしからうと思はれます、大人が監督すれば宜いといふのでありましても、如何いふ風に監督して若い者を交際させやうかと云ふ事になると、チヨッと手段に困るやうで、自分の家でさう旨く交際する事が出來ぬにしても、それでは他にさういふ好い場所があるかと云ひますと、どうもそんなに調つて居らぬ、倶樂部といふものがあつても、さう家族といふものが落合ふといふ事は、有るか無いか位であります、それから親が小供を伴

れて他の家族と一緒になるとしても、公園へ一緒に散歩して話合をするといふのは、若い者に取つて便利でありますが、さういふ公園といふものも數が少ない、毎時も上野とか日比谷といふ所へ出る譯にもいかぬ、さう面白くも無し、何か餘り極り切つて詰らなく感じられる、種々な公園があつたら、今度は此方へ行くとか彼方へ行くとかいふ事から、自然話合ふといふ事になつて、或は打解ける事も出來ませうが、公園へ行くのもオックウであるといふ所では、話合する事が少し六づかしくはありますまいか、夫から遊び場所へ行くとしても、其遊び場所といふものは數が多くない、芝居へ行つても知れたものである、同じ芝居を何度も見る譯にはいかぬ、芝居へ行くにしても、桝の中に居る間別段話する事も出來ぬ、それかと云つて他に話するやうな席かあるかと言へば、無い、散歩する所も無いといふ事であつては、さういふ遊び場處へ行くにしても、交際といふ程の事は出來ぬ、大人の交際する便利物の缺けて居る所では、自分の子息娘を監督して交際させやうといふのは、どれだけかは出來るに相違はありませぬけれ共、たゞ邈然と大希望を囑するやうな事にはナカ〳〵行くまいと思ひます、青年男女の交際といふ事を言つても、大きな男女の交際が先づ問題になるべきである、只々青年男女が實際學校へ通つたりして居て、其始末に付て問題が起るのでありまして、其



必要が出て來たのでありますが、直接にさういふ必要が見えなくても、大人の交際といふ事は能く解決せねばならぬ、之を解決すると云つても大抵先きは分つて居る、交際する道は開くことは出來ますが、今俄かに之を何うしやうといふことは不可ぬ、だから出來るだけ其道を取つて行くといふだけの事であらうかと思ひます、此邊の所は極く普通な事でありますが、交際を説く上に餘り考へない樣に思はれます、唯々何だか

交際が出來さうに思つて

運動會へ伴れて行くといふやうな事で、運動會でワイ〳〵言つて仕舞つて居る、詰りどれだけの交際になるかといふと、結果は何程も無いやうである、それで問題となるのは或一部分であつて、

親達が非常に心配

して居ることである、其交際するには父兄に於て監督せねばならぬといふ事は先づ許されて居りますが、監督して交際させるといふ場所、順序といふものをモット具體的に考へた上で無ければ、此問題を解くことは出來ますまい、普通に自由といふ事を説くのは青年男女の當人、又親が自分の子を持たぬか、持つてもまだ幼くあるといふ、其際に心配の無いやうな部類で説いて居る樣であります、是は一概に云ふ事は出來ぬ、その調子と先づ言つて宜からうと思ひますが、頻りに自由を説く人も、今後果して何時までも持論を維持するか、此先き自然さういふ調子が鈍つて行きはせぬか、モット先きに行かねば分らぬのであります、今の所、自然どれだけかの道が附きかけて居る、斯くなければならぬといふ方法を執らなくても、大抵その道は開けるのであります、世間全體の交際の上に道が開けて行くといふことが明かであるとすれば、さう酷く喧しく言ふべきものでは無からうかと思ふ。

衣食住の上に應用せられたる意匠

田崎政次

この意匠といふ事は、天地間に在りと有らゆる森羅萬象何一として意匠のないものは無い、先づ遠い所は暫く措き、日常吾人の身邊を圍繞するもの、尙ほ手近く云へば、吾人が日々生活に直接の關係を有する衣食住の上にも皆この意匠が行はれて居る、この意匠といふものは一定動かすべからざるものでは無く、始終推移變轉して行くもので、從つて吾人に感興を與へることも深いので、吾人は毎に女子方に向つて、今日より一層之が工夫を凝して欲しいと思ふと同時に、女子の學校などに於ても之が敎育を盛に、施して貰ひたいといふ希望を有つて居るのである、といふものは、中流以上は縱ひ自ら手を下さゝるにしても、普通の家庭に於て女子が執るべき實務の十中八九までは、皆女子の意匠に成るものである、

まづ其手初めとして衣服の事に就て述べて見やう、凡そ人の身體に纏ふ衣服は、單に寒暑を防ぐばかりの目的のものでは無い

着心地の良いといふ事

は、寒暑の氣候の事によく通じて居つて、肌觸りが佳くしてまた美しくなければならぬ、而して其美しいといふ事の上にも種々の意匠を要すべき問題が起つて來る、之が即ち世間に流行不流行の由つて起つて來る原因である、

元來衣服の美しいといふのは、單に緋だから美しい、紫だから美しいといふのでは無い、

似合つて美しい

といふ事に爲らねばならぬ、例へば、緋縮緬は美しいに相違ない、そこで之に黃や紫よりも、黑繻子を腹合にして、帶に仕立れば、その配合が良くて一層美しい、それから之を十五六の可愛らしい色白な娘に締めさせると更に美しい、その娘の着物も其帶と

照映の良いもの、帶揚も帶も衣服の色と衝突しない色にしなければならぬ、之は私が云ふまでも無く、婦人方は能く知つて居らるゝから、衝突するやうな失策は爲さらない、また折角緋縮緬と黑繻子の帶が出來上つても、之を締る人との配合、即ち年齢が不釣合では何の役にも立たぬ、で、まさか之を年增盛りの婦人や、腰の曲つたお婆さんが締める氣遣ひも無い、婦人方は斯くまで意匠を暗んじて居るのであるから、この上學ぶの必要は無いやうなものゝ、之はホンの帶一本の例を示したのであるが、一家の主婦となれば、家內中の人々の衣服の向不向にも注意しなければならぬので却々容易なものでは無い、即ち色の白い人には白いやう、色の黑い人には黑いやう、皆それ〴〵に衣服の色まで撰ばなければならぬ、而して男は何處までも男らしく、女は何處まで女らしく、子供は何處までも愛らしく似合ふやうにせねばならぬ、併し大抵は能く當箝つて居るやうに見受けるが、何うも現今の意匠には氣品が少ない、それと云ふも標準の取り方が卑いからであらうと思ふ、依つて今日よりも一層品位のある意匠を凝すやうにして貰ひたい

次は飲食であるが、之れは今日まで如何に意匠が應用せられつゝあるかと云ふに、

旨くして食はせろ飲ませろ

といふのが原則で、即ち之は單に飲食物に味を着ける事を云つたものでは無い、固より材料その物は必ず甘いとか酸いとか又は辛いとかいふやうに味を附けべきものと定つて居る、で、其出來上つた飲食物に、更にそれ以上の價値を附するといふ事で、これは多少今日應用せられて居る、即ち

第一は景色で飲食させる

といふと可笑が、同じ飲食物でも、山中の幽雅なる場處や、海邊の曠濶なる眺望に對して飲食すると、同じ酒でも、魚でも、紅塵萬丈の間や、鬱陶たる室內で飲食するのとは餘程相違がある、で、そゞろに園遊會などが思ひ合はされる、

第二は器物で飲食させる

この事は古來より我國に多く行はれて居る事で、しかも大切な事であつて、卓上や膳の上には、成るたけ必要以外な器物は並べぬやうにする事と、並べる程の器物は皆清潔で、配置も一方へ偏せぬやうにせねばならぬ、若しも一つの器物に誤つて不潔物が着いて居るやうな事があると、折角の御馳走も滅茶滅茶になる、それのみならず其周圍の器物も、順序よく配列すると同時に、見ても心地の善いものでなければならぬ、

第三は座敷で飲食させる

この點は更めて説く迄もなく、サッパリとして塵一つなく奇麗になつて居る座敷で飲食する事は、飲食者に取つて何れ程心地が良いか知れない、暗い處よりも明るい處、狹い處より廣い處、空氣の流通の良い處、庭園に面した處といふ樣に撰ばねばならぬ、之は單に來客の時のみでは無い平生でも成るべく其注意が無ければならぬが、何うも平素は此意匠が缺けて居るやうに思はれる、

第四には器物の色の配合

であるが、之に就て或人は食卓の色を標準として撰ぶが宜いといはれたが、これは少し物足りない説であると思はれる、その選擇は尚ほ自由として、飲食物の配色、器物と飲食物との配色、是等は大いに注意を要するので、例へば、鮪の刺身と鯛の刺身とは褄を違はせる、皿の色も鮪には白色を用ゐ、鯛には青色を用ゐると云ふやうにする、乃ち成るべく色の變化を多くする、と云つても餘りゴッチャではならぬ、程よく附け合はせるといふやうにすれば、御馳走が目立つて引立つのである、

次は住居であるが、その根本の意匠は何であるかといふに、約めて云へば

清潔の二字を以つて盡されて居る

ので、如何に立派に室内が裝飾せられてあつても、又その裝飾品が貴重な珍品であらうとも、まるで其床が塵で埋つて居るやうでは古道具屋同然で嫌にな

る、之に反して其所に飾られたるものは、ホンの日常の家材道具であらうとも、秩序よく清潔なる座敷に配列せられてあると、左程の價値の物でなくとも、何處となく氣品が高く見えて、その座敷へ入ると自ら襟を正すやうな心持になるものである、支那の諺に、

　門に入らば先づ額を看よ

といふ事があるが、何處の御家へ參つても玄關又は入口の體裁を拜見すると、

　大抵は妻君の技量

が想察せらるゝもので、その踏脱の邊り近所は、下駄といふ下駄は投り出されて、中には歯の拔けたのもあれば、緒の切れたのもある、而して何れも汚れて居る、其側には紙屑と燐寸の殼と、下駄の歯で持込んで來た泥がゴロ〳〵して居て、甚しいのは芋や果物の皮や實などが散つて居るといふやうなのは、これ必ずしも貧家の入口のみには限らない、隨分中流以上の家庭に見る事が少なくは無い、斯ういふの

に限つて座敷は更に甚しい、押入や戸棚は見なくも察せらるゝのである、

　右は最も極端な例を示したのであるが、主人の居間の掃除までも下婢任せにして顧みない方は、たとひ床の花が枯れて居やうが捨てさせるでも無ければ、掛物の軸に塵埃が積つて居ても拂はせもしない、であるからして、何うして新らしい意匠を以て主人の居間の裝飾を變じて見やうなどゝは思ひ付かぬ、それ所では無い、朝の客に出した珈琲茶碗が夜まで居殘りをして居る、そこで單調な陰欝な家庭に我慢が仕切れなくて、自然主人は外出する、サテ外出すると歸りが思ひになる、遂には家庭の平和が破れるといふやうな結果になる、

　それも是も家庭の主婦たる者の意匠一つで、それを挽回する所か、以前に增して圓滿なる家庭をも形造らるゝのである、一體女子といふものは前來述ぶるが如く、衣服および飲食の意匠には富んで居るが、何ういふものか此住居といふ中でも、日常主人が自

己の身邊を圍繞して居るものに對しては、比較的意匠が乏しい、その意匠が乏しいから、自然家庭に趣味が薄い、趣味が薄いから他に出で、慰藉を求むるといふやうになるのであるから、たとひ机の上を一つ片附けるにせよ、或は書物一冊を整理するにせよ、故に復すべきは回し、新意匠を以て配列すべきは配置するといふやうに機轉を働かさねばならぬ、



離婚の種々なる原因

法學士 井上桂輔

離婚といふ事は男女に關はらず人生の最も悲しむべく最も嘆ずべき慘事の一であるとは云ひながら、男子は左までゞも無いが殊に女子は一割の損がある、尤も離婚の原因に就ては千差萬別である、

それは後に述べるとして、その離婚したる男子が後添へを娶るに於て、寧ろ世間では同情を以て之を歡迎するの傾きがあるに反して、女子が再婚するに方りては、寧ろ一種の輕侮を以て之に擬するの風がある、云ふ迄も無く是は貞女兩夫に見えずといふ舊思想に支配せらるゝからであらうと思はれる、忌憚なく云へば、貞女兩夫に見えずといふ其向ふ側には

貞男兩婦を娶らず

といふ對照が無ければなるまいと考へるが、しかし其は無いそれでは、片手落しの言ひ草と云はなければならぬ、故に先年議會に向つて女子の或一部から男子の其に對し、制裁を加ふべき法文の制定を請願せらるゝまでに至つたが、それは至當の事である、

或人は民法が我國に布かれて以來、大層離婚の數が減少した、悅ぶべきの現象であると謳歌せらるゝけれども、それはホンの上部の皮想で、實際は左まで民法發布以前と異りは無い所か、動もすれば其數は倍蓰して居るのであるが、民法發布以來といふものは、結婚離婚共に兎角手數を要するので、たとひ正式の結婚したりとも、その屆出を怠つて居るものもあり、又事實離婚したものでも、未だ其手續を履まない者も澤山にあるので、その他の自由結婚や勝手離婚は幾らあるか、それは却々精細に解るものでは無い、依つて是等の事を詳細に知らうとするには、迚も統計表だけでは事實の眞相を窺ふことが出來るものでは無いから、更に進んで其實際を究めなければならぬが、今は其研究法を云ふのでは無いが、活きた社會を研究するには、活きた方法を採らねばならぬ事だけは斷言して置く、それで單に統計表にのみ依賴して居る或一部の人は、大部近年は我國も離婚の件數が減じた、けれどもまだ却々歐米には敵はないなどゝ云ひ、且つ其原因は、彼の歐米では宗教上の關係から、神の前で堅く新郎新婦が誓つて結婚するので、容易に離婚といふ事はしない、けれども我國には爾ういふ風習が無いのと、干渉結婚の餘弊との爲に離婚の數が多いといふが、歐米だからとて、

程度こそ差へ、矢張干渉結婚の風はある、そして縱ひ神の前に誓つても、離婚の數は我國に比して數十倍して居る、我國でも維新前までは、僧侶は結婚の席にてこそ臨まないが、戸籍簿の上には寺判といふものを捺して夫婦たる事を證明したもので、離婚の時も亦與つたものであるが、現今のやうに離婚の數は夥しく無かつたのである、然るに最近に至るに從ひ、殊に女子教育の進むに伴れて離婚の數が增して來たといふは、實に不思議の現象と云はねばならぬ、尤も之には社會が進歩して、漸々生活の度が高まるといふ事も一つの原因であらうが、手近く云へば、昔からの諺の如く

　馬には乘つて見ろ
　人には添ふて見よ

といふが如く、理想のホーム、理想の良人、理想の妻、理想の生活などゝ口には云へど、その實多くは斯俚諺主義で、若しも外れた時は其時で、馬を牛に乘り換へるのみの事よと、男女共に大概高を括つて、輕卒に結婚を爲るから、互ひに結婚當時は少く遠慮があるから何事も無いが、二月三月乃至一年となると、互ひに狎れて流れて了ひ、少し氣に入らぬ事でもあると、合せものは離れものと斯う云ふ調子になる、であるからして離婚沙汰が頻出するのも當り前と云はねばならぬ、乃ち斯く頻出する離婚沙汰の重なる原因はと云へば、何れも先後は無いやうなものの、その中で

　第一に位するものは金錢問題

である、之は男子の側から云へば、少々所では無い、頗る附きの醜婦でも、時としては不具者でも、その持參金の多いといふので、云はゞ女子よりも其持參金を娶り、果ては良人の器量を惡くするのみならず、殆んど手を燒かるゝ實例は、上下共に尠なくない、又月給が少ないと云つては飛出し、身上持が惡いと云つては去り、甚しきは世帶が左り前になつたの、貧乏したの、良人に先の見込が無いのと云つて離婚を女子の側から持出すのもある、畢竟是等は初めよ

り愛と愛とを以て神聖に結合したもので無くして、財産と云へる神の前に相互に一時苟合したのであるから、黄金重からざれば交り淺しといふやうに忽ち離婚が斷行さるゝのである、それといふも相互に分外の野心とか、又は虚榮心とかいふものさへ出さなければ、決して左樣いふ結局を告げるといふ事はあるべき筈のものでは無い、それから

第二に位するものは舅姑と嫁との問題

である、尤も夫婦差向ひの家庭では無い事であるが、先づ普通の家庭では舅姑のあるものとして、その舅姑は昔から嫁苛りといふ諺もあるが、舅姑とても強ち嫁を苛めるに極つたものでは無からうと思ふ、舅姑とて鬼でも蛇でも無く、昔は矢張り一度は花の顏で嫁となつた事も、或は婿となつた事もあるもので、謂ゆる世の中の酸いも甘いも能く知り抜いて居るものであれば、自分の子息に娶はせて世間に自慢をせうと思つて尋ねた嫁を、今更何も左樣惡む筈は無い、しかも其間に衝突を起すのは、曲直何れかに無くて

はならぬ、固より多數の事であるから、或は鬼の如き舅姑が無いとも限るまいが、今のお若い方々の多くは、結婚しやうといふ前に、先づ舅姑の有無を確め、然る後取捨を判斷せらるゝ程であるから、這麼人に舅姑を大切にせよなどゝ云ふのは、寧ろ無理な注文かも知れないが、一體まだ家事の實務に馴れない若い者を、何十年となくその實務を處理し來つた老功な舅姑の眼から見たら、餘りにモドカシイ事もあらう、又餘りに不經濟的な事もあらう、若くば氣が付かなさ過ぎる事もあらう、そこで遂には其を見兼て注意を與へらるゝ事が屢次に及ぶと、片方はヘン老人が何を知つて、是でも妾は何々學校の卒業生で、且つ何處其所の講習會にも出て免狀を有つて居る、腕に覺えのある者を、去りとはおせッかいなと云はぬばかりの顏面をせらるゝのみか、それだから老人は愚痴ッぽくて嫌ひだ、口喧しいから厭だといふ風をする、その一方には良人に向つて親子別居などを迫る、それこれが度重なると、舅姑の方でも初めの

やうに優しい言葉もかけぬ、嫁の方でも面白くないといふので碌な返事もしない、といふやうな塩梅で、云はゞ新舊思想の衝突ともいふべきものを來すのであるが、これは若い方は何うしても經驗が少ないから、多くの場合に於ては

一目を置かねばならぬ

ことゝ思はれるが、輙もすれば其辛抱が出來ないといふので離婚を要求する者もある、併し私は老人の側を完全無缺なものと認めるのでは無いが、この場合に於ては若い方が一歩を讓らねばならぬものと考へる、

第三に位するものは夫妻間の問題

で、この中には良人の不品行から來るものもあり、或は妻の不貞操から生ずるものもあり、若くば相互の疑心から暗鬼を生ずる事等もある、この中良人の不品行は最も多く離婚の原因の大部分を占めて居る併しこの良人の不品行といふに就ても、自ら二様に分れるであらうと思ふ、即ち一は良人が金錢の自由なるが爲と、多情に基くものと、一は妻たる者が良人に愛情を捧ぐるの薄きとに原因するものとがある、固より多情なる者は、男女を問はず如何とも度すべき途は無いのであるが、單に金錢の自由になるが爲良人が不品行に陥るのは、畢竟妻たる者が愛情を捧ぐる事薄く、或は全く零のため、乾燥無味の家庭を出でゝ、寧ろ他に於て之が慰安を求めやうとするに原因するものゝやうに思はれる、しかも其醸せし原因を思はないで、無暗に事の末に趨りて離婚を斷行するものが少なく無いが、是等は大いに自ら反省すべき餘地があるやうに考へる、その他尙ほ前に掲げし原因の數々は、最早私に於て筆を運ぶの勇氣がないから、一に賢明なる讀者の判斷に任すとして措いて、私は此所に繰返さうと思ふ、離婚といふことは男女に取りて最も悲しむべく嘆ずべき慘事で、殊に女子は後妻に嫁ぐにしても、

彼女は再縁だから

といふやうに、二割も三割も損であるから、初婚の

時に於て財産や姿色や、地位や權勢などいふものに嫁がないやう、嫁いだ後は其家の閾を再び出ぬといふ臍を確めてかゝらねばならぬのである、

妾が新婦たりし時

大島傳子

世の中がだん〱進歩すると共に複雜になつて來まするので、自然男女に關はらず務むべき事柄も多くなつて來るもので、それに就ては私共もまた之に應ずるだけの覺悟が無くてはならぬのでありますが、廣い世間萬般の事は暫らく措くと致して、是まで私が、自分も一度　其衝に當り、また其より及ばずながらチヨイ〱之に就て世間の振合を見聞しまするに、女子といふ者が他家へ片付いて主婦となる、この主婦となる事は、女子の身に取りまして

　一の新紀元を劃する

ものであります、即ち處世の上にも、將又生活の上

にも一大變化を來すからであります、試みに處女時代と結婚して後の生活を比較して見ますれば、曾て處女時代即ち父母の膝下に居ります間は、たとひ女子の務めとして家事の手助けを致した所が、それはホンの一部分だけの仕事で、それに左程責任は無いのでありますけれども、最早一たび親の家を出て他家の人となつた以上は、俄かに家事一切の重荷が其双肩の上に落ち來つたのであるから、如何なる瘦腕でも、一々それを處辦しなければならぬ、即ち責任が重いので、この場合になりますと、これまで知らない、敎科書にも書いて無かつた、

　苦心と勞力とを要する

やうに爲るのであります、尤も此場合に、學校で學んだ事や、又は兩親などから見習つた所は、益になるには相違ないが、サテいよ〱實地に當つて見ると、何うも其が左程に思はれないのであります、例へば、良人の出入の世話は云ふまでもなく、朝夕の拭掃除から煮炊のこと、應接のこと、經濟上のこと、

さては下婢の使方、其他まだ／＼澤山の事が吾身一つを取圍んで來るのでありますから、なか／＼大抵の事ではない、しかも其を一々巧みに取捌いて行かなければならないので、その困難といふものは、迚も一々書き立ての出來るものでも無ければ、又話し盡せるものでもありません、殊に嫁入り間際の事に馴れない中は、何から手を着けて宜いかと、心も體もソハ／＼として落付かないもので、それからそれと氣を配り、漸く一方を完全に成し畢へ、まづ是で安心と思つて居ると、片々では大きな落度が出來てまゐつて、幾ら氣を注けるやうにしても、何處かに手落が出來勝のものであります、

約めて云へば事に馴ると否との境目で違ふので、喩へば、寄席へ參つて義太夫や淨瑠璃などを聴くに、初め前座すなはち露拂ひに出演するものは、その聲の苦しさ加減から、節の廻しやうの下手さ加減と云つたら無いのでありますが、だん／＼後から後と出演し、最後に出る所謂眞打となりますと、それは／＼藝がシンミリとして居る上に、場數をこなしただけあつて、總てに餘裕があるから、從つて聴き心地も好く、客にも受けさせるやうになるのであります、新婦も其と同じで、當初は何うか過失の無いやうにと、實は小心翼々として事を處しながらも、尚ほ幾多の不手際があるのであります、それ故に嫁入當時は自分が事を處するのではなくて、自分が事に支配さるゝのであります、それが二ケ月三ケ月乃至半年一年と經驗を積んで家事に馴れて來ますと、仕事を爲るにしても、それに掛る前に手順を胸の中に極めて置きますから、決して無駄な手數や時間を費すといふ事が無くして濟むのみならず、また萬事に行屆いて來るし、下婢の使ひやうも上手になつて來るから、命令もよく守るといふ事になりますから、仕事も早く片が付く、それで以前のやうに忙しいかといふに、左樣でない、それは畢竟家事に馴れて來たからであります、實際此所まで來なければ

主婦學の卒業生として、十分その資格を備へたものとは云はれないのであります、

當初私が若き經驗即ち新婦として主婦の實地學へ入門した時の手近な例を申しますれば、來客のたびに狼狽したり、又は應待の言葉が旨く言へないのみならず、茶菓子を出すにも下婢を魔誤つかせたりしたものであります、これも側から



見たならば初々しいと云へば誠に可愛らしいけれども、さう何時までも初々しくして居らるゝものではありません、一日も早く實務に馴るゝやうにして、不時に客來があつてもまごつく事なく、作法通りに應對をして、談話を面白く仕かけ、チョット次の間へ引込んで、何々を出してお吳れと下婢に吩附置いて、直ちに座敷へ取つて返し、さうして以前の話を

續け、客を滿足させるやうに爲なければなりませぬが、それが初めの中は、來客があると先づ話を始める、ツイ話に身が入つてお茶さへも出す事を忘れ、或はソレ來客といふので、茶よ菓子よと騷いで、大切な賓客を一人座敷へ打つちやつて置くなどといふ事は決して珍らしく無いのでありますが、それが馴れて來ると、兎に角一先づ客を座敷へ請じて、一通り寒暄等の挨拶も終り、何か少しく話の小口を開き、チョット失禮をと云ふ工合に座を外し、下婢にコレ〳〵といふ風に吩附て直ぐに座に返れば、客も手持無沙汰でなく、當方でも失禮にならず、それより先方が何か用談のありさうなれば、自分の話は大抵にして切り上げるといふ風に氣を配らねばならぬものであります、

それから客來の時に、若しも自分が何か仕事をして居て、その仕事は非常に急ぎのものであらうとも、それは忘れたやうに打捨てゝ、一心に客を欵待しなければ不可ません、苟めにも其仕事のことを思ひ浮

べますると、知らず〱客の欵待が粗末になる、と云ふものは、自然談話に興が乘らないので、客に不快の念を起させるやうになるから、之は尤も愼しまねばなりません、曾て私の教を受けた或奥樣は、今や他家へ行かうといふので、玄關先へ車まで待たせて置きながらも、來客のある時は快く迎へて、決して一度も惡い顏色を爲された事は無いのみならず、ある時などは夫が爲に終日足をお止めになつた事も度度でありましたが、これは訪ねる方で氣を附けねばならぬ事と存じます、

家事經濟の事に就て、世間では種々の說をなされますが、

諺に入增せば水增す

といふ如く、大體は收入から割出すのではありますが、それよりも人數の多少、自家の社會に對する位置、其他種々の事情の上からも割出して



行かなければならないので、迚も之を一律の下に定める事は出來ません、まづ普通社會では、主婦たる者が襷掛けで遣るとして、其上で物品、保存、利用時間等といふやうな各方面に就て、細かに利害得失を考へた上で、或は小買にするも宜し、又は纏めて買はなければならぬものもありませう、それは實際自分が手を下して見なければ、迚も胸算用では標準の立てられるものではありません、之に就て最も肝要な事は、

六づかしく云へば家計簿記

平たく云へば小使帳

といふものを日々面倒でも記して行くやうにしなければ、何うしても家事經濟の標準といふものを定める事も出來なければ、その根本といふものを確立すること

が出來ないのであります、是が有れば夫に依つて何が餘計の臨時支出であるとか、又は止むを得ざる支出であつたとかいふ事が明かに示されるので、財布口を締めるも締めないも、能く標準が取れるのであります、斯ういふ事は後になると億劫になるものでありますから、別段面倒な家計簿記などゝ云ふ形式に依らなくとも好い、普通の附け方で關ひませんから、嫁入り當時から實行して欲しいのであります、これも爲つければ造作なく行はるゝものです、

昔は左程では有りませんが、兎角當今はお嫁に行く人が、先方に舅姑や小舅姑のあるのを嫌ひますが、小姑は暫らく措くと致しましても、舅姑のあるのを嫌ふといふのは何うも解らぬ事と存じます、自分とても木の股や石の間から産れたものでは無く、先方の舅姑だからとて天から降り地から湧いた譯のものでは無い、即ちその祖父母から生じたもので、今自分が嫁がうとする未來の良人は、是またその舅姑たらんとする父母より生じたもので、猶ほ自分の生みの兩親に於ける關係の如きものであります、左すればその老人は、既に我等の前時代に於て幾多の艱難と鬪つた所の

その家の勤功者である

ので、我等は今や其後繼者とならんとするのであるから、之を嫌ふといふのは甚だ人情に悖つた考と云はなければなりません、出來得る限り尊敬して事へなければならぬのであります、併し尊敬すると云つても、無暗に左樣然らばといふやうに他人行儀にしてはなりません、老人といふものは兎角平生物淋しく感ずるものであるから、成るだけ若い者が賑はしく、樂しく、面白く暮らさせるやうに仕向けなければなりませぬ、當時の家庭を見ますると、往々若い人達ばかり寄集つて面白さうに話して居るに、老人は何うかといふに、次の間に獨りポッチでツクネンとさせて置くといふやうな調子であるから、從つて老人も面白くない感じを引起すやうになります、斯んな事から感情の不和が次第〳〵に嵩じて來るも

のであるから、新嫁たるものは此邊によく意を注がなければならぬのであります、
以上を約めて申せば、女子は嫁に行くと同時に、スッカリ何事も是までとは變つて、その變つた事が一々自分に責任を負はねばならぬ事となり、それが而かも學校の教科のやうに口頭のみで無くしく實務であるから、それを仕遂げるに就ては、たとひ取捨は自分に在るにもせよ、老功の人の指導を仰ぐやうに致さねばなりませぬ、

大人と小兒

米國哲學士　山田銀造

大人とは素小兒の成長したもので、別に奇談も珍說もある譯のものでは無いが、併し小兒が大人となるまでには幾多の歲月を經る間に幾多の實驗、經驗、試驗等を積んで居るから、滅多に社會の物に對して注意を惹くものでない、けれども小兒の眼には、大人が見て陳腐とする所の物も非常に感興を惹くのである、例へば、一個の帽子でも、又は一足の鞋でも、大人は之を買つたからとて、さまで嬉しいとも悅ばしいとも思はないが、小兒の心には夫が何とも云へない嬉しみがあつて、それを手に取つて只見斯う見て、直ちに座敷の眞中で其を被つたり穿いたりして悅ぶ、すべて此の世界は、小兒に取りては新らしき世界であるから、見るもの聞くものとして一も珍らしからぬものは無いのである、故に他の半面から云ふときは、常にその
小さき胸は疑問にて充され
つゝあると共に、その活潑なる腦髓は其答を求むるに忙しいのであるから、その銳利なる眼は何物をか探し出さうとするので四方に注がれ、その聰き耳は何事をか聞きつけやうとして絕えず欹てられて居る、而して其奇を好む所の心は外界より智識を得るの善き媒介となるものであるから、世の母親たるものは、大いに之に向つて周到なる注意を要するので

ある、名高き獨逸の大詩人ゲーテの母は、その小兒が種々なる疑問を發する時は、殊更に忙しき仕事の時間を省いてまでも、一々丁寧なる説明の勞を取られたといふが、その小兒の利益および幸福を希ふものは此ゲーテの母の心得が無ければならぬのである、然るに世には其小兒が好奇心強くして多くの質問を發するにも關はらず、オー煩さいといふやうな調子で叱りつけるものがある、これは實に奇怪至極な事で、常に其兒の利益および幸福を念とするといふ者が、事實は之に反して此貴重なる天性を抑壓するのである、尤も質問の種類に由りては、必ず盡く之に答ふべき限りのものでは無いが、差支のない限りは之が解決を與へて其天性を助長する事を忘れてはならぬ、

また小兒が家具などに就て、彼方の机を取り出し、此所の椅子を持出し、之を仰向け又は横となし、稱して汽車となし電車と呼び、或は箒を取出して鐵砲なりとし、塵拂を洋劍とし、金盥を打ちては樂隊と

唱へ、其他種々の惡戯をして、それは〳〵寸時も眼の離されぬものであるが、かゝる時親々は何れも一口に惡戯者よと叱るのが常であるけれども、元來彼等が斯樣な行爲をして貴重なる器物を破壞し、又は新聞や雜誌を破り、甚だしきは大切なる書籍までも毀つが、その時彼等の心には

別に何等の邪念も無い

ので、たゞ一向に何物をか見出し、何事をか學ばんことを願ふのみで、また他を思ふの暇が無いのであるから、もとより自分は他人の迷惑となる事を爲し居るとか、斯うしては氣の毒であるとか、又は叱られやうなどゝいふ事は毛頭も氣付かないのである。

別言すれば、

小兒は大いなる野心家

である、それと同時に

小兒は大いなる勤勉家

である、何故なれば、彼等は常に何事をか爲して居らなければ自ら愉快なる能はざる者なれば、何うし

ても何なりとも其弄ぶべき物を與へないで置く譯には行かないのである、然るに其物を與へずして、彼等自身に探し出したる時、無暗に頭から之を叱りつけて取り上げるといふ事は無法と謂はなければならぬ、素より彼等の眼に觸るゝものは何物にもあれ、忽ち取りて之を破壞し、その內面を見極めんとするものである、西洋の諺にも破壞は建設の始めなりといふ如く、彼等は先天的に此性を賦與せられて居るのであるから、一つの玩具を與へると、忽ち之を破壞する、すると世間の多くは、誠に能事が無いと云て溢すのみならず、輙もすれば其處罰として鞭韃する人さへある、ツマリ小兒の心の有樣を知らないからではあるが、それでは親たるの甲斐が無いと云はなければならぬ、故に當時到る處の幼稚園では、何れも此兒童の先天的の心理を土臺として、立方體の物やら、長方形のものやら、種々樣々な形をした物を小兒に弄ばせて、思ひのまゝなる形狀を組立てさせ、而して其好奇心と想像とを滿足させるやうに努めて居る、依つて皆が皆左樣も行かないが、小兒に玩具を買つて充がふにも、成るべくは之を片々に取り毀し、再び之を構造し得るやうな物を與へるやうにすれば、知らず〳〵の中に構造力を養成する事が出來るといふものである、

それから小兒といふものは大人と同じく、一事を爲し、一物を動かしつゝ、大いに滿足を覺え居る間に、他の多くの事を學ぶものであるから、成るべく小兒をして、事物を精密に且つ正確に觀察させるやうに導くといふ事は、是また大層有益な事で、例へば、彼等の一個の玩具を新たに與へたる時、母親は其玩具の特性を說き示し、或はそれを云ひ顯はす言語を敎ゆるやうにするので、假りに玩具が馬であつたならば、その毛は白くして丈は高く、首の上に鬣があつて尾は長く、足は四本であるといふ事を知らしめ、次に相似たる犬とか羊とかいふものと比較させて、その似よりの點と異つた部分とを說き聞かせるといふやうにすれば、彼等は追々に自から一物を視察し

ず、之を他の物と比較し得るやうになるのみならず、遂には其が習慣となつて、見る物ごとに正確なる觀察をするやうになる、これやがて物に分別を立て、事に差別を爲すに至るの階梯となるのである、

小兒の心といふものは、譬へば白糸のやうなもので、染めやう次第で赤にもなれば紫にもなり、又は靑でも淺黄でも、好みの色に染め上げらるゝのである、尤も糸や反物のやうにハッキリ形の上に見る事は出來ないが、併し我々の眼には確かに其色工合の見分けが出來るので、その藍瓶ともいふべきものは

家庭日常の風儀

と染料で、その職人は云ふまでもなく兩親その他家庭内の人々である、この家庭内に於ける風儀を初め、周圍の感化力といふものは、小兒に向つて虚言を吐くなよ、柔和にせよ、行儀を善くせよ、惡口を言ふなよ、誠實であれよと千萬遍繰返したよりも偉大なる力を有つて居るもので、たとひ夫等の敎訓を繰返されなくとも、日常の家庭の總てが左樣でありさへすれば、その小兒の品性は自然に夫に陶冶せられて高潔なる者になるが、苟くも家庭内の日常が其等に反したる實例を以て充たさるゝ時は、何時も小兒の徳性は惡化されて了ふので、私も數次是まで實驗もし、又人よりも聞いた事があるが、子供が親に不孝を爲ると云つて嘆く者があるが、畢竟それは其親たる者が祖父母に對して行て見せた結果に外ならぬのである、殊に愼しむべきは、所謂一時の方便といふやうな事から親たる者が虚言を吐く、例へば、一寸親が其所らへ他出するに方り、小兒が尾いて來るのを煩さがり、お土産を買つて來るから大人しくしてお出でと言ひながら、歸つて來ても何一つ土産を與へないなどゝいふ事は、隨分世間に有勝ちの事ですが、それも一度や二度は何とか言ひ瞞めもしやうが、度重なれば小兒とても承知をしない、のみならず遂に虚言を吐いても好いものであるといふやうな心を堅めさせるのであるから、是等は親たる者が最も注意に注意を要するのである、

一體小兒を導くには、餘り嚴しきに過ぐれば其性質が偏屈にして了ふので、後來世に處するに當りて最も肝要なる獨立心を失ふこと丶なり、さればとて餘り寬きに失すれば、是また將來社會に出で丶ま我のみ強くして他と合はざるやうになる、單に權勢のみを以て盲從せしむるのは、毫も是非正邪の辨別なき獸類を養ふには利益があるかも知れないか、苟くも人類といふ道理力を有する者を敎養するには適當の手段といふ事は出來ない、それ故にたとひ小兒に向つて、其は爲すべからずと命令するのは、彼等が多少是非正邪等を辨別する事の腦力が發達したる年齡の頃より初めなければ不可ぬ、併し其命令の言を發するにも、單に頭より一口に爲すべからず、止めよといふやうに制裁を下してはならぬ、必ず小兒の合點が行く程度に於て其理由を說き聞かせるが可い、小兒とて成育するに從ひ、智能もまた漸次發達するものであれば、その程度に依り、言語を卑近簡單にして言ひ聞かすれば、必ず承知せぬものでは無い、例へば、小兒が小刀を持ちたりとせよ、之を禁ずるに汝は創傷を帶ぶべしとか、又は單に速に手を放つべしと制するよりも、お前はそれで創傷をすると、其所から赤い血が出ますよ、早く母さんに下さいといふやうに優しく言へば、小兒は必ず手放すものである、若しもそれで手放さぬ時は、他の方法を講じて之を放たしめ、或は他の小刀を以て、徐かに小兒の皮膚を刺戟して



見せれば、大抵の小兒は放すものである。輙もすれば世間の親達は、この兒は誰に似てサウ强情であるかなどと罵る者もあるが、これは裏面から云へば自分達の强情であるといふ事を自白するに過ぎない、といふものは、

小兒は自己の反射鏡で、その父母の行爲の總てが現はれて來るものであるからである、併し左樣は云ふもの丶、時としては其父母達が、何か忙しい仕事に手ヅ觸つて居るとか、又は何か自己に面白くない感情を懷いて居るやうな塲合に、ツイ知らず〳〵小兒の要求を峻拒するか、但しは知つて故らに知らざる眞似をして居る等の仕打に基くものであるから、何處までも大人たるものは、古人の謂はる丶如く、たとひ大人なりとても、能く小兒の心を失はぬやうにして之を誘掖して行かなければならぬのである、

二十八

教師としての女子

高橋水華

職に賤業なしと申しますが、今暫らく通俗に從つて之に貴賤高下のあるものとしたならば、教師の如きは誠に美しい高尙な職業であらうと思はれます、尤も同じ教師といふ中にも、大學には無いが、その他の中小學には澤山な女子が奉職せられて居ります、左すれば之を引括めてお話する事が出來るかといふに、して出來ない事もありませんが、それでは差別の程が分らないから、且らく此所には小學校に於ける女教師方といふ事に土臺を置いてお話を試みやうと思ふのであります、

そこで小學校の教師になるには、ツマリ之は男女ともに同じでありますが、まづ府縣の師範學校を出るか、又は檢定試驗を受けねばならぬので、東京の女子師範學校は、日本國中何處の方でも入學が出來るけれども、各地方のものは其縣內の人に限られて

居つて、是へ入學するには年齢が十七歳以上で、高等女學校の第二學年位の學力を要するのであります、入學さへ濟めば、衣食住は勿論のこと、尤も僅かではありますが、小遣も出ます、で三年間勉强して卒業すると、その府縣内の小學校へ赴任するので、二年間は何うしても義務として、その職を捨てる事は出來ないのであります、

初めて其職に就きました時は、月俸僅か十圓以外にしか過ぎませんが、或程度までの昇給は可なり早い方で、十五圓となり二十圓となるが、三十圓を越した方は澤山無い、それは男子の敎師にした處で、百圓といふ額を取つて居る小學校長が東京でも五本の指に充たないのでありますから、女子として三十圓を越すといふ事は異數なのであります、併し追々と小學校の敎師といふ職業は、或は女子專有のものに爲るだらうと思はれる位ですから、女子で獨立して世渡りをして見たいといふ人達に取りては、此上も無い善い職業であらうと思はれます、

大抵師範校を卒業したとか、府縣廳の檢定試驗に及第したとか、資格を有つて居る者は、直に各科を通じて一學年の生徒を擔當するので、この府縣廳の檢定試驗といふのは毎年五月に施行せらるゝが、程度は丁度女子師範の卒業生と同じで、まだ資格を有つて居ない助敎師とか、又は師範校へ入學の便を得なかつた人、若くば中途で希望を轉じた人や、種々なる人達があつて、隨分時としては三十四十になつた方で試驗を受ける方もあります、それは決して珍らしく無いのであります、

この敎師といふ職業は、彼の產婆とか又は看護婦若くは女醫者などゝは違ひまして、苟めにも人の子を預りて敎育しやうといふのでありますから、華美なワッと云はせるやうな仕事の出來るものでは無い、何處までも質素に行くものでありますから、假りにも通だとか粹だとかいふ、兎角心弱い女が多く力を籠めたがる方面に遠かり、口には朝の日の東に上りてより、夕

べの西に黃金の色をさすまで、道德が如何の、作文が如何の、算術が如何のと、若き身空のツイ外れ勝な身體をジッと愼んで、明けても暮れても、

兒童教育といふ名譽の旗

を本尊として居る境遇、まことに懷かしいやうな貴いやうな、さては氣の毒のやうな一種の感が起るのであります、そして若しも少したりとも浮いた擧動があれば、世間一般の女子方ならば何でもない事まで、何の彼のと蔭口を云はれるのであります、

煩さい誠に煩さい事で、生徒の喧嘩口論から、泣いた子の涙まで拭いてやらねばならず、打合つて居るものは引分けねばならず、ヤレ誰さんが如何したの、イヤ彼さんが不可ませんのと、右からも左からも訴へられる小言を受流して、お前が惡い、其方が不可ませんと、叱りもし慰めもし、忙しい勤めを了へて歸れば、彼女は嫁入口が無いので、あんな勤めをして獨身で居るのだなど〻惡口を言はれる、何と割に合はない話ではありますまいか、とは云ふものの、又其處には其處で、

嬉しい情も味もある

もので、早い話が子を持たねば子に對する愛情が分らないと云ふやうなもので、生徒を扱はねば生徒に對する情愛が解らないものであつて、最初の內こそ師弟ともに多少遠慮といふものがありますけれども、日を經るに從つて、師弟の間には薄紙一重の隔も無くなつて、先生誰さんは鼻を垂して居て拭みませんと、マア極端な話ですけれども、何でも彼でも先生〱と皆先生の所へ訴へて來る、教師とてもサウで、お前は不可ない惡いと頭から小言もいふ、親子以外に斯くまで親密に訴へもすれば、又小言を云ふものは無いのであります、

親子以外の親子

これが教師と生徒との間柄で、小學教員の趣味は此所にあるのみならず、チヨッと往來で逢つても爾うです、遠い向ふの方からバラ〱と驅けて來てチヨコンとお辭儀をされて御覽なさい、實に可愛らしい

もので、情味の深いものであります、故に

職業の趣味

といふのは此所で、勿論女だからとて子供の嫌ひな方もありますが、マア惣じて女子は男子の方よりも子供が懐くもので、小學教師の要件が子供を懐かせるといふ一つを含んで居る以上は、それは急速には行きますまいが、せめて尋常科三學年だけでも女子專門の職業としたら宜からうかと竊かに想ふのであります、

兎に角一個の教室内に机をならべた三十人なり四十人なりの生徒が、師とも第二の親とも仰ぐ、その多くの子供の前に立つた時、誠に自分が其小國民の王になつたかのやう、又は子福者になつたかのやうな感情が起るもので、對手が無邪氣なる子供でありますから、ツイ惹かされて我ながら笑つて勤務をするやうになるので、ある心易い女の先生は、自宅で氣の鬱いだ時でも、學校へ出勤して多くの生徒に先生〳〵と附纏はれると、一時に胸の透く想がすると話されたが、それは爾うあらうと思はれる、

右は教師としての女子が學校に對する點を擧げたものであるが、女教師その者が家庭の生活如何といふに、固より多數の事であるから一定して居る筈も無いので、獨身で知己等の家に假寓して居る方もあらうし、又は母親や姉妹などゝ一所に居らるゝ方もあらうし、中には良人を持つて居る方も無いではありませんでせうから、其各々の境遇に依つて生活の狀態も違ふので、迚も一概に極めて了ふ譯には行きません、其處で先づ獨身で知邊なり或は確實な家に同居して居るものを見るのに、前に述べた如き薄給ながらも、その中から座敷代も拂へば、食料も辨じて行くのみならず、湯錢頭髪結から折々の衣服履物から小使までも支出して、尚ほ僅に一圓乃至一圓五十錢位づゝの貯蓄をして居る、尤も良人を持ち且つ小兒のある方などは別としまして、ホンの獨身でも心の締つた者は斯ういふ風であります、

世間では女の教師を見て、一概に彼女は嫁入口が

ないからである抔と云はれる向もあるが、それは耳を假すだけの價値のあるものではありません、世には收入の多い產婆や看護婦や女醫師とならず、去とて給料萬能主義の女工ともならずして、云はゞ却々氣の詰る、比較的給料の薄い、割の惡い教師といふ職業を撰ぶのであらうかとは一般の疑問でありますが、最初は

他より尊敬を拂はれて高尙らしき職業は何かといふ、實は一種の虛榮心に驅られて志望した者が多いので、それが此職を奉じてから兒童教育の趣味を稍解して來んのであるが、尙ほ今日の女教師間には幾分その餘燼が殘留せるものから、輙もすれば教育が形式に流れ易いかのやうに見受けるのでありますが、教師としての女子たるものは、國民の乳である事を三思して貰ひたい、

歐米婦人の遊戯

ドクトル　多田謙吉

我邦にも古來より種々の遊戯はありますが、併し婦人方の遊戯といへば、先づ茶を立てるとか花を挿すとか、或は歌留多取り双六乃至は投扇興といふ位なもので、何れも其は上品であらうが、之を眞誠の遊戯なりとして今日に誇る事の出來るものでは無からうかと思ふ、假りに茶を立てるにしても、或は花を生けるにしても、先生に就て十分稽古をしてからで無くては出來ないのであります、又歌留多取りも隨分面白いやうではあるが、これ亦小さな文字を一生懸命に睨で居るのですから、眼と腦とを遣ふことが尋常一樣ではありませぬ、双六の遊びも是また非常に感心する程な趣味のある、高尙にして運動になる遊戯とは云ひ難いやうに思はれます、斯く詮議して見ると、一つとして古來より我國に傳はつて來た婦人の遊戯は、誠に價値の無いものになつて了ふが、

併し室内の遊戯としては尙は多少の生命はあるのでありますが、廣い意味に於ける遊戯といふ點からは、餘り賞美せられない、そこで是とて一から十まで我國に移すといふ事は出來ますまいが、中には直ちに取るべきものが無いばかりでも無く、その他のものとても諸姉の工夫に因つては、之を改善して我物に爲る事が出來ないとも限らないから、左に歐米婦人の遊戯の二三を御紹介致しませう。

◎ホイスパー

この遊戯は三人でも四人でも乃至十人でも二十人でも出來るので、成るべくは人數の多い方が興味が澤山なのであります、併し少ないからとて出來ないのではありません、ホイスパーとは英語で、私語と云ふ事でありますから、假りに人數を十人と定めますれば、その十人の者が輪を造つて並んで居るのです、そして其内誰でも宜いから、最初その右隣りの人に、小さな聲で人に聞えぬやうに、今日は大層よい天氣ですとか何とか云ふのです、さうすると之を聞きました二番の人は、之を第三の人に其通り話し、それから第四第五第六といふ風に順々に話し次て、第十番の人は大きな聲で、自分が第九番目の人から聞き取つた事を云ふのですが、是では何の面白味も無いのであるが、其所に興味があるといふのは、假へば、第一番の人が、今日は大層よい天氣ですと云つたものを、第二の人は之を、京は大層よい所ですと聞き誤まり、第三の者は更に、今日の大將はよい御方ですといふやうに、それからそれと聞き誤まりて、最後になると全く第一の人の云つた事とは無關係の事を云ふ事がある、そこが腹を抱える所であるから、成るべくは低い聲で喋言らなくてはならぬ、

◎ラッフキング

ラッフキングとは笑ふと云ふ事で、この遊戯は笑つて勝利を得るのであります、世の中に笑つて勝利を占るほど面白くして且つ愉快な事はありますまい即ちこの遊戯は五人でも八人でも乃至十人でも何人でも關はないのでありますが、茲には便宜の爲に九

人として、その内の一人は審判官となつて、双方四人づゝ二組に別けます、そして一方を右組とし、一方を左組と假定して置き、次に審判官は一枚の寫眞(寫眞でなくとも木片でも又は紙片でも宜い)を取り出し、その寫眞を左右兩列の中間に抛るのです、若しこの時寫眞の表が上に向ひたらば右組が笑ひ、寫眞の裏が上向であつたならば左組が一同に笑ふのであります、今審判官が抛げた寫眞が表向になつたとする、此時は右組が一生懸命にいろ〳〵の顔をして笑うです、そして此時一人でも左組のものが笑つたならば、その人は早速審判官が右組に廻すのであります、これに反して若しも寫眞が裏向になつて左組が笑ふ時、右組のものが一人でも笑へば、是また直ちに審判官は其者を左組に組み入れるのであります、斯くて人數の減少し、或は全く無くなつた方は敗軍となるのであります、

◎イミテーシヤン

イミテーシヤンとは人眞似といふ事で、その人眞似が上手の方は急度勝つのであります、之も人數の多少は選ばないので、假りに五人で遊ぶとすれば、合圖があると同時に五人の者は、何れも自分の爲やうと思つて居る手眞似をする、例へば、甲は狐の眞似をする、乙は庄屋の眞似をする、丙は獵師の眞似をする、丁は摑む眞似をする、戊は鼻端を押へるといふやうに豫め定めて置き、そこで一二三ッの懸聲を合圖に各自自分の思ふ通り眞似をする、次の懸聲と同時に、自分の右隣りの人がして居た眞似をする、第三の懸聲に應じて又自分の右隣りの人がして居た手眞似をする、斯くしてグル〳〵順廻りに手眞似を換へて行くときは、六たび目には最初自分が定めた通りの手眞似をする事になるのであります、之が却々可笑いので、懸聲が掛ると同時に、その手眞似が出來ないでウロ〳〵奇妙な手附をしてマゴツクのであります、そして若し三度間違つた時は、罰として種々な藝を行らせるのであります、隨分面白いから行つて御覽なさい、

◎ホー

ホーとは歐米婦人の一種の掛聲であるから、我國でも此儘用ゐても宜し、又はオーと換へて用ゐても差支はない、そして人數に定まりは無いこの遊戯をするのは、皆の者が輪のやうに圓く居並んで、そして第一の者がホーと聲を掛けると、第二の人はパチと掌を合せるのです、次に第三の者がホーと聲を掛けると、第四の人は矢張前のやうにパチと兩手を合するのであ



ります、併し之では少しもインテレストが無いやうであるが、其實左樣で無いので右隣りの人がホーと云ふや否や透かさず左りのものはパチと掌を打つべきを、程經てから叩いて見たり、又は自分でホーと言ひながら自分の掌を鳴らして見たり爲る者も出て來て、中々ホー、パチ、ホー、パチといふやうに、順序正しく規則亂さず行れるものではない、論より證據試して見玉へ、

◎カマンドシー

委しくはカム、エンド、シーといふべきを、カマンドシーと約めたので、來て御覽といふ事だが、この遊戯は重に歐米の婦人が基督降誕の日に、澤山の子供や友達などを集めて遊ぶ所の無邪氣な戯で、是も人數には制限が無い、尤も此遊戯をするには人數の多少にも依るが、幹事が二三人入用なのであります、先づ幹事は大きな革鞄に一ぱい鏡を容れて、重さうにして其を二三人で持つて出るのです、そして幹事の外は誰にも其革鞄に觸らせないやうにするのです、斯くて部屋へ革鞄を持つて來て、三枚折りの屛風か何かを立て置き、サテ幹事は客に向つて此革鞄の中には貴君の好な人が隱れてお出ですから、そのお好きな人の名を少しも隱すことなくお明しなさい、男の方でも女の方でも、或は小供でも年老でも聊か差支はありませぬ、その代りアナタが一番可愛い一番好きと思つてる人の名を明しなさらないと、その人は出て來ませぬ、と云つて、一人づゝ客を伴

れて屛風の內に入るのです、皆のものは大きな革鞄の中には、大きな世界中の人の寫眞か何かを入れてあるので、誰が一番好きだと云つたならば、その人の寫眞を搜し出して見せるのであらうか、又どのやうな仕掛けがしてあつて、自分の大すきな人の顏を見せるのだかと、いろ〳〵心で心をなやませて、サテ屛風の中に伴れて行かれるのです、幹事は此くして屛風の中に伴れて來て置いて、その人の前に一個の鏡を出すのです、そして客に向つて、サア貴君が大すきの人の名を云つて御覽、その人は直ぐ此鏡に其顏を映すのですと曰ふのであるから、何だか心持が惡いやうになつて來て、誰が好きだとか何んとか云ふ事も云へなくなる、併し客の中には誰が好きだとか、アノ人が好きだとか曰ふ方もありますが、兎に角幹事は、本當にアナタのお好な方をお目にかけますと云つて、その鏡を客に渡し、客をして其鏡に向はせます、客は鏡に誰の顏が映るかと、いろ〳〵考へてサテ鏡をのぞひて見ると、相も變らず自分の

顔が寫つて居るのです、客は何れも驚くでせう、そこで幹事は、之は一番アナタの好な人でせう、この人ほどアナタが大切にする人は無いでせう、と云つて落を着けるのであります、之をカマンドシーの遊戯といふのでありますが、茲に注意して置く事は、一度屏風の中へ入つた者には、外へ出ても決して誰にも屏風の中の秘密を明かさないやうに口止めをして置かなければならぬ事であります、

◎エキザミネーシヤン

エキザミネーシヤンとは試驗といふ事で、是も中中興味のあるのです、これにも審判官が入ります、まづ先づテーブルか低い机を四つ五つ並べ置いて、其に一人づゝの審判官が附いて居て、第一の机には大鉢に水を一杯入れ、その水に澤山の小豆粒を浮べおき、第二の机上には、米と豆とを混じて入れたる大箱を置き、第三の机上には南京豆を入れたる籠を置き、第四の机上には種々の模型を描きたる紙と鋏とを置き、第五の机上には反古と鋏とを置き、準備了らば遊戯者は先づ第一の机前に至り、鉢の中の小豆粒を箸で一粒づゝ挾んでコップに入れ、審判官の合圖にて之を止め、次は第二机の前に來り、巾二寸許りの板片二枚にて箱中の物を別々に取りて傍のコップの中に入れるのであるが、若し誤つて仕損ずる時は、再び遣返し、合圖と共に止め、次は南京豆の皮を切麗に剝ぎ、次は模型を取拔き、最後には反古を切つて紙捻を拵らへるのである、併し何れも審判官の合圖によつて始めもし、又仕舞ひもしなければならぬのであつて、勝手自由に伸縮する事は出來ないのであります、そして第一の人が第二の机に移る時、審判官は第二の人に第一の机の位置につかしめて仕事を初めさせるので、其他は順次斯樣にして遊戯を作さしめ、審判官は一々之を手帳に控へて置いて、全體の人が其を爲し了つたならば、審判官は一々詳細に之を比較對照して、優等者より漸次に何か賞與を授けるのでありますが、是は餘り小さな小供などには出來ないのであります、

新刊紹介

小品十種

幸田露伴氏著　成功雜誌社發行

本書は著者が近作小說十種を集めたるものにして、之に添ふるに數篇の散文笑話等を以てす、文章雅麗にして、小說として別に面白き趣向といふほどのものはあらざるも、而も氏にして始めて撰ばるゝ上品なる材料といふべきもののみなり、其題名の如く小說とせずして小品文の模範とせば、實に他に類稀なるものなるべし、その十種は、緣不緣、利久箸、續ぎ墨、雜記帳、油障子、輕井澤、初よろこび、鹹加減水の味、齡等にして、讀者諸君は本誌にて一讀せられたるもあらん、更に再讀して其文の流暢なる所を味はるべし(定價一圓)

ちゝ屋の娘

遲塚麗水氏作　耳明堂發行

氏の筆を下せしこととて、厭氣のさす所一もなし、趣向を紹介せんより、作者筆致をたどるべく、その序文を左に記すべし(定價七十錢)

小づくりなる女の眼を病める心地ぞするよ、許六が言ひし、あやめの咲く頃、乳屋の娘のくらかりし瞳ふたゝび明かに、粧凝らす富士額、筑波の山の姿をうつす柴根染、摺の袂に風薫らせて、晴れがましくも世に出でたり、棔散る月の窓、杜鵑なける雨の燈、つれづれなこの可憐なる乙女の物語にし玉へとこそ、

女子の新職業

手島益雄氏編　新婦人社發行

本書は女子の新職業に就て、澤柳文部次官はじめ五氏、女子就業の方法に就て、赤川音樂學校教授外十四氏の所說を集め、及び女子に職業を授くる東京諸女學校を紹介したるものなり(定價廿五錢)

女禮式畫報

東京社發行

東洋婦人畫報の增刊として出でたるものなり、欄を畫報、讀物の二に分ち、女子の禮式に就て親切なる說明あり、但し小笠原淸務氏本位の禮式にして、一般には如何あるべき、弓馬禮式本家などあるに、至つては、伯爵家よりの苦情は免れざるべし(定價三十錢)

魚の出産

農學士　新野良吉

我々人類や他の動物は、母の胎内から其形を具へて生れるのであるが、同じ動物の中でも鳥や魚の類は卵から産れるのである、尤も卵から産れるものは此二類に限つた譯では無いが、そこで魚の出産といふのは、云ふまでも無く、普通卵を産むことで、その分娩の期節に就ては數多の魚族の事であるから、因より一定しては居らぬが、先づ大別して、春と夏との二候に産卵するものを夏期産卵魚と稱し、秋と冬にするものを冬期産卵魚と名けられてあるが、實際は同じ魚でも、場處と氣候と年齡とによつて遲速があるから、一年中魚の出産しない日は無いと云つても好いのである、

魚には吾人々類の如く雌雄即ち男女がある、けれども其生殖器は餘り異りは無い、で、分娩の期節に向へば輸精管または輸卵管を通じて、之を生殖器孔から輸送するので、この生殖器孔は輸尿管と並んで肛門の後ろに開いて居る、之は金魚や鮒の類を見れば直ぐに素人でも分かる、之はチヨツト肉眼では分らないが、顯微鏡で見ると、

卵には無數の穴がある

この穴は魚の種類によつて大小の差がある、而して卵膜は通常二重で、中のものは黄身であるが、間々赤、綠、藍等の色を帶びたものもある、その質は粘質で、脂肪の小粒が混じて居る、凡て卵は水よりも重いものであるから、海水の鹽分の薄い處では沈むけれども、濃い處では浮び出る、それゆゑ太平洋で産卵するものは大抵浮て居るけれども、磯邊のものは其粘液で、水草又は藻の類などに附着して居る、魚が分娩するのには、各自勝手な處に産卵するものでは無い、多くは群をなして、深い海から淺い處に移り、または海から河へ泝り、或は河から海へ下つて産卵するといふ工合に、その魚々の性質に依つて異なるのである、

魚が分娩する前になると、多くは平素より肥滿して、其體の色が艶麗になり、また魚族によりては頭部とか皮膚とか、若くは鰭の部分等に小さな結節が出來て、その姿は美事になるもので、之を動物學の上からは

魚の婚姻服と名けてある

かの卵は如何して受精するかといふに、初め雄魚の精虫が、卵門または卵膜の細孔から中に入り、そして發生力を生ずるのである、この卵がまだ受精しない前は、少しも光澤の無いものであるが、受精するや否や、卵門や細孔は、頓と膜のやうなもので小丘狀をなして閉ぢられ、やがて卵は膨れて光澤を發しまるで樣子の變つたものになる、

それから此卵が發生するには、普通他の動物のものと同じく分裂作用で、二分、四分、八分、十六分、乃至三十二分といふやうに分裂して、その黄身の一部が魚の體となるのである、其他は營養に供せらるゝので、それがまだ半分消費せらるゝか爲ない中に

魚兒の體を認むることが出來る、それから卵が全く孵化つて其殼を脱するまでには何日位を要するかといふに、それは

氣候の寒暖と水質の冷温

とに依つて一樣ではない、皆それ〴〵に差がある、即ち鯉や金魚などは約六七日位であるが、鱒などは七八週間も要る、概して夏期産卵魚は早いが、之に反して冬期産卵魚は遲い、そして幼い間、腹の所に附いて居る臍嚢（人間でいへは臍の緒）も、夏期のものは二三日間で脱れるが、冬期のものは四週間乃至六週間も附いて居る、

造化はよくしたもので、その臍嚢が存して居る間は、必ず凡ての養分は此所から供給せらるゝので、恰かも人類の胎内で嬰兒が養分を取るのと同樣であるから、魚兒等は別に食餌を求むるといふ事はなく必ず一つ處に群棲して居る、最早臍嚢が離れて食餌を求むるやうになると漸次に離散するのである、

常に遠洋の裡を徊游して居る魚でも、多くは岸近

くへ來て產卵するもので、例へば、かの鰊などは、北太平洋に產して種類も多いが分娩の期節になると岸邊近くへ來る、我邦の沿岸中では、多く北海道の近海へ來て分娩する、その時にあのやうに捕獲せらるゝのである、一體魚といふものは妙な性質で、平生は非常に臆病で且つ注意深いものであるが、それが產卵期になると殆んど夫等の特性を失ひしが如く、無暗に磯邊へ近寄つて來るから、網等で取圍むにも至極容易なのである、

全體產卵期になつて魚が寄せて來た時には、實に一種の奇觀で、濱邊に立つて向ふを眺めると、海面數里の間は水が濁りて色を變し、且つ沖合から吹き來る風に連れて一種の臭氣が鼻を襲ふて來る、そこで漁師は直ちに網を以て取圍むのであるが、こんな時には網でも何でも關はず卵を產み附けるので、これには漁者も大いに閉口するとの事である、且つ少し大漁の時は、網を引上げる事が出來ないのみならず、魚の爲に網を破らるゝ恐れがあるので、據ろなく網の一部を切つて魚を多少逃がす事がある、この魚の卵の色は透明無色で、その一孕の數は四萬乃至十萬粒を含んで居るのである、



鮭や鱒は沿海へ來て、それから河川へ分娩の爲に泝るが、初め來たてには非常の恐怖と注意とを以て少しの音響や人影にも驚き、夜間に泝つて、翌朝は未明に下つて深い處に潜んで居るが、最早如何しても產卵しなければならぬ時日が迫つて來ると、その產所を定めるに方りても、多少の障碍物は勿論、河の中に堰柵などがあつて、容易に泝ることの出來ない場合でも、その勇氣は驚くべきもので、數尺の高さある障碍物でも跳ね超えて、そして自分の產所を經營する、その時は頭や鰭、尾等を以て、砂礫を五寸乃至一尺五寸位の深さに堀り、此所に一孕約三十粒の卵を產み下し、後また其上に砂を掩ひて卵を隱すのである、魚類がこの產所を經營する事は、殆んど他の獸類と同樣である、而して是等の魚は、初め河川に泝る頃は、

銀色を帶びたる婚姻服

を着けて居て、身體もまる〳〵と肥滿して頗る美麗なものであるが、妙な事には分娩を終るまでは決し

て一も食餌を取らない、身體はやゝ赤色を帶び、次で暗色の雲影が現はれ、それから漸次に黑色となり所々に斑點を生ずる、殊に魚類には限らないが、分娩の時は頗る劇甚な爭鬪をするもので、一の雄が、一度雌に接すれば、その雌は他の雄が來て接しやうとするのを防がうとして、死を決して鬪ふのである斯く分娩の爲に非常に苦辛するから、分娩が終つた後は、尾や鰭の部分は毀損し、剰へ身體は衰弱するので全で呆然として、殆んど游ぐことさへも出來ない位である、それ故に、老年に及びて幾回もこの大役を務めた魚は、遂に斃れて流れて來るといふ事である、鮭や鱒は海から河へ泝るのであるが、

鰻などは其と反對で

殊に鰻の雄魚は、常に海水か又は河口に近い淡鹹水の混交する處に棲息して居る、決して淡水中には上らないで、分娩の期になると、

雌魚は河川を下つて雄魚に會ひ

此所に生殖作用を營むのである、鰻の交尾期は夏秋

の間であるが、分娩は秋冬の交で、泥中にて產卵する、それ故に淡水中に止つて海に下らないものは其卵が熟しない、この魚の卵は極めて小さくして一寸肉眼では分らない、そして一孕の數は五六萬粒あるとの事である、

世間では丸い卵も切り樣で四角とか、四角な卵は無いと云はれて居るが、古女といふ魚族の或者は長方形な卵を產むのである、此には是だけとして置いて、委しい事は他日に讓らう、

處女時代と主婦時代

中島恒政

十人寄れば十色といふやうに、十人が十人、百人は百人といふ風に各自の思想は異なるものであるから、男女に限らず之を一律の下に置かうとするのは固より穩かな仕打でない事は知つて居る、けれどもその中には又自ら普通の理法のあるものであるから現今我國に於ける一般女子の思想界に於ける、處女即ち未婚時代に於ける理想と、やがて其者が結婚して主婦と爲つた曉に於ける實際の塲合とは、如何に之が調和せられつゝあるか、將又乖離しつゝあるかといふ事を檢べて見るのも實に趣味ある人生の問題であらうと考へる、決して之は一片の理屈としてでは無く、旣に一家の主婦たる者は勿論、是より家婦とならんとする者は大に眼を注がねばならぬ直接の問題である、

世の女子が未婚時代に描ける理想の中で、如何なる事が最も第一に浮ぶかといふに、理想のホームなどゝいふ事よりも、まづ理想の良人といふものを描かれて居るとは爭ふべからざる事實で、其理想の良人といふ事に就ても、特に位置とか身分とか、又は職業若くは資產の多寡といふやうな塲合を除いて、普通の家庭で育つた處女たるものが、別段特殊の注文もなく、自分の顏もまづ十人並であるとした所で、

如何なる理想の良人を描いて居るだらうかといふに大同小異で、舅姑や小舅姑が無くして、下女の一人も使つて、自分は成るべく水仕事に手づ觸はらず、良人の性質は何處までも男らしく、その中に妻を愛するは勿論、よく規律を守り、曾て不品行の噂もなく、加之のみならず將來大いに發達の見込みある人物といふのが普通である、特殊の注文のあるものから見る時は實に淺薄でお話には成らないのであるけれども、それさへも中々注文通りに行くものでは無い、况して特別の注文あるものは、云はば生涯その理想通りのものを得らるゝものでは無い、

一體理想といふものは無缺で完全なものであらねばならぬのであるが、同じ理想の中でも、男女共に他の理想に於ては頗る完美なものを有して居るにも拘はらず、この男女間の事となると、男子も左樣であるが、殊に女子の理想とする所には間隙が多いやうに思はれる、といふものは、元來理想なるものは理性の導く所に從つて行かなければならぬのである

に、青春の時代に於ける處女の理想なるものは、よく〱詮議して見ると大抵は感情が八九分を占て居るのであるから、迚も理想などといふ結構な名稱は下されないのである、謂はゞ根なし草の理想である、そこで之に就てはよく世の中の辛酸を嘗め來つた人は斯ういふ事を言はれた、まづ處女が未來に於ける理想の良人を撰ぶの標準として、その良人の容色も左ることながら、そのやうな容色の美醜などといふ事よりは、先づ其健康の如何といふ事とその遺傳に特殊の病症が有りや否といふ事を注意しなければならぬ、容貌の美醜などといふ事は、ホンの若い當座の事である、第二その良人となるべき人は如何なる品性のもので、假りに執る所の職業は餘り高くないにもせよ、その人格に於て取るべき特殊の點があるか如何か、よく世間では靈位の勢望とか又は浮雲の如き財産に嫁するものがあるが、それは實に危險千萬と云はなければならぬ、それよりは其

夫たるべき人は、少なくとも自分より四五歳位は年上で、單に自分の容色等にのみよりて娶るものでは無くして、所謂神聖なる愛を以て迎ふるものであるか何うか、而して耐忍に富むと同時に、事に勵精で多少他に何等かの趣味を有つて居るか如何か、といふ是等の諸件は最も理想とする良人に對する要素である、繰返すまでも無いが、もし婚後連れ添ふ夫が病身であつたとすれば、家庭に於ける幸福の根本は打壞せられて了ふからである、

それから其品性や人格であるが、此は自分を處すると共に、社會に對して大層必要なもので、之あれば自分を處するにも自然と靜肅にも行くものであるのみならず、子女を敎養するにも、社會の多くと交際するに於ても、必ず他の侮蔑を買つたり、或は爭端を醸すなどいふ事のあるものでは無い、

次に之は私が始終自分の娘達にも云ひ聞かせ、又は折々に說く事であるが、女子たる者が財產に結婚するといふ事は、初めより婚姻の本義に外れて居ると云はなければならぬ、併し之は大部當時の流行物ではあるが、之は實に危險と云はねばならぬ、尤もお嫁に行き匆々、米鹽の資に苦しむといふやうでも困るが、昔から稼ぐに追付く貧乏なしといふ諺の如く、その夫たる人にして、心が締つて器量のある者なれば、敢て資產を的にしなくとも、共々に資產を作つて行く事が出來る、たとひ鉅萬の財產があつたにしても、もし其夫たる人が放蕩で無賴で無いにもしろ、惡い仲間の者にでも欺されて遣つて仕舞ば何にも爲るものでは無い、よく結婚後に失望を來すのは何であるかといへば、

多くは浮雲の如き富と虛位等に嫁するからである、今日まで自分の見聞に觸るゝ所の財產に嫁せられたる婦人の現狀は、その表面は至極平穩無事に見えるが、一歩その裏面に廻つて見ると、寧ろ亭主は荷車を挽き、女房は子を背負ふて後押しを爲し、僅かに一日七八十錢位を稼ぎ、歸

りに魚の殘骸でも買ひ、それに芋か大根でも交せて調理をなし、親子の者共が共に舌鼓を鳴らして居る者の家庭に劣るやうな事實が澤山に認めらるゝのである、

畢竟それらは何に原因するかと云へば、最初に根なし草のやうな、皮想な、淺薄な理想を描き、其所へ嫁した時には王公の月桂冠でも得たやうに思つて居たのであるが、その悦びは束の間で、今はその財産あるが爲に一層の苦境に沈淪しつゝあるといふやうに、兎角處女時代の理想と、主婦時代の實際とに於ては、此くの如き背反した奇觀を呈する事があるものであるから、この處女時代から主婦の時代に移る過渡期は、何れも青春の血が湧いて居る上に、兎角内面の實質よりも外部の華美が喜ばるゝもので、從つて一生を不遇の裡に葬るやうな事に立至る、それは偏へに感情の爲に已が理性を晦すに基くのであるから、十分愼重の上にも愼重の態度を以て撰擇を誤らぬやうにしなければならぬ、

梅雨と家庭

綿貫立仲

十數年前の小學校の子供の讀本に、夏は南風多く冬は北風多しとあつた事を能く記臆して居るが、それは小學生の事だから大體を知らしむるに止めて左様敎へたものであるが、全體我國では、冬になると多く西北の方から寒風が吹き、夏の時節には多く西南の方から暖かな風が吹くのが常例で、梅雨の時節には、丁度この

兩方の風が交代する時

である、西北から吹く風は寒冷の換りに、濕氣を含むことは少ないが、之に反して西南の方から吹く風は、溫暖の上に濕氣を澤山に含んで居る、此兩種の風が相混ずると、西南風に含んで居る濕氣は冷されて小さい水滴となる、この小さな水滴の集まつたものが雲である、であるからして、空は一面に淡墨を流したやうに別に濃淡もない雲を以て一樣に覆はれ

雷雨の時に見るやうな眞黑な暗雲を見る事も無い代りに、雲切れの間から青空を見ることも稀なのである、暦で見ると何時何日入梅の入りといふ風で、九州の端も北海道の末も皆一様のやうに思はれるが決して左様いふものでは無い、同じ内地の中でも後先があるので、四國や九州の南の方は最も初めに梅雨に出逢ふので、從つて其明けるのも早いが、東北地方や北海道のやうに北の方になるとその始まるのも遲いが、終るのも遲い、斯く地方によりて遲い早いがあるは兎も角として、昔から入梅



には入りがあつて明けがない、初雷の鳴つた時を以て明けとするといひ傳へて居るが、實際は半夏生といふ季節に明けるので、日數は二十日餘りであるが、何にせよ此前後は雨勝であるから、俗に入梅三十日といふ事さへも言ひ觸らされて居るかく晴間もなく毎日々々幾日といふ事はなく降り續く霖雨には、誰とて心の結ぼれぬ者は無いのであるが、殊に家庭で氣の毒なのは子供である、梅雨の爲に戸外の遊戯を爲る事は出來ず、さりとて僅かの室内遊戯位

では直に倦厭が來てしまふ、であるからして、平常左程氣むづかしい子供で無くとも、何うも此入梅の季になると、何處の子供でも氣むづかしい事を云つて母親達を困らすのであるが、それも尤もの話で、大人は無聊ながらも何か他に其所在を見出すけれども、小兒は或部分の遊戯をして了へば、今度は何か眼新らしい事を求めるが、室內では其局面を轉ずるといふ事が極めて乏しい、そこで其不快は母親や又は兄弟姉妹等に向つて洩さるゝ、ツマリ之は家庭內に娯樂機關、例へば、樂器のやうな物の備付けが缺乏して居るからであらうと思はれる、此點は主婦たる者が豫め考慮を費して置かねばならぬ事である、併し一時姑息の子供慰藉策として無暗に菓子や果實の類を與へるのは宜しくない、成るべく食物の類を以てせずして、何か適當の遊戯娯樂の方法を取つて欲しい、

　平常は左樣でも無いが、この入梅時になると隅から隅まで黴が生えたり、物が錆たりする、元來黴といふものは何うして生えるかといふに、決して垢の附かない部分には生えないが、垢さへあれば何處へでも生える、で、今までは左程に垢の着いて居るものとも思はなかつた處でも、黴が生えた爲に垢の着いたのに氣の附くことがある、言を換へれば、黴は我々に垢の所在を知らせる忠告者である、

　黴の形は如何といふに
松茸や初茸のやうな蕈類の植物であるけれども、却々肉眼では判然と其形狀は分らない、依つて顯微鏡の力を借りて見ると、其體は細長い糸のやうであつて、之が垢とか飯とかいふものゝ上に、縱橫無盡に蔓延して、其を黴の滋養として殖えのである、而して之が大きくなると、その細い糸から頭の大きい棒が直立する、のみならず、更に其上に極々小さな球が出來る、この小球は恰も種子のやうなもので、胞子と名くるもので、形は極めて小さく、量もまた極めて輕いものであるから、塵埃と共に空中に飛び散つて居る、それであるから何處の空氣を採つて來て

檢査をして見ても、皆この黴の胞子が多少混じて居ない處はない、

この胞子は最も濕氣を好むもので、濕氣の無い所には素より生ずるものではない、それに如何に濕氣を好めばとて、其所に適當の温度が無ければ是また發生するものでは無い、丁度一年中で梅雨の季節は前述の如く、空氣中に最も濕氣が多く、其上相當な温暖であるから、黴を吸ふべき養分さへあれば、簞笥の中でも臺所の隅でも御遠慮なく發生するのである、故に之を防がうといふのには、凡て物を能く乾かして置くといふ事が第一の要件である、それに

高熱と寒冷とは黴を防ぐの効があるものであるから、物によりては能く煮又は燒くとか、或は氷詰にして置けば、啻に黴の發生を防ぐばかりでは無く、又その腐敗をも防ぎ止めることが出來るのである、序でだから

入梅あけ後の注意

を少しお話いたさう、夏の初には每時病人が多い、それは入梅の爲に物が腐つたり黴が發生し易い、そこへ來て急に入梅が明ける、サア熱くなる、腐つたものが日に蒸される、これが人の身體に甚だ宜しくない、であるから平素虚弱の人などは往々之が爲に大切の生命を奪はれるのであるから、成るべくは硫黄を燻して家の中を清めると、大部殺菌をする事が出來るが、品によりては外へ出して太陽の光線に曝すやうにするが宜い、殊に每朝起きて直ぐ床を疊み脫だ寢衣を直ぐ仕舞ふといふのは、家の內が片附いて良いやうなもの丶、實は乾さないと、身體の爲にも又夜具等の爲にも宜しくないから、せめては餘焔の冷めるまで放置しておいて、それから仕舞ふが宜い、殊に夜具などは隔日位に裏表を太陽に曝さなければならぬものである、

次に注意すべきは食物で、病は口より發るといふ諺の如く、この果實が美いとか、熱いから一杯位は差支あるまいと云つては氷水を飲み、時としては生水を呑んだり、又は半熟の物を食べたりしては不

可ぬ、如何に鶏卵は半熟が良いからとて、それも程といふものを超えてはならぬ、

取り分け家庭で注意を要するのは、無暗と子供に果物を與へる事で、之は恐るべき結果を招ぐのである、只世間では甘い物を澤山に食べれば蟲がわくもの、やうに考へて居らるゝが、實は果物の皮と肉との間には蛔蟲の玉子が幾百となく住って居るのであるから、是また成るべく母親たる者は注意して與へないやうにしなければならぬ、たとひ與へるにしても十分皮を厚く剝いて遣るが宜い、終りに一言して置くが、子供には如何なる事情があらうとも、絕對に生水を呑ましてはならぬ事である、

赤ふだ旅行の記

同行四人

上

中川愛氷

物は不用意のうちに面白き事件は起る也、たゞ大道を歩くうちにも、見るもの聞くものに感興を授かることあるべし、足の向くまゝ、心の進むまゝに、一日を遊び歩かんも妙ならずや、されど砂塵汗に親しむ都大路にては面白からず、畦一歩を超ゆるのみの旅にても、旅路となれば乙なもの也、旅は道づれといふもの必要なること言ふまでもなきことにて、同行には旅行に尤も因縁の深き、鐵道唱歌の家元大和田建樹君あり、まかり間違へば東海道も留ならざるつぎはぎの衣を繼ふとも、針の歩みの正しき道に進めと教ゆる、裁縫界の大立者小出新次郎君あり、せめて一人は婦人の同行がほしきもの也、引ずる足の弱さも交りて、面倒を見させらるゝも旅らしくてよし、去ながらたゞ從いて歩くのみの婦人にては面白からず、折にふれては歌の一つも唄うてほしきなり、憚りながらわれ等三人、兎にも角にも教育家の

はしぐれ、この旅行の興を助くるに足るべく、而して曰くのつかざる婦人をいづれにか求むべく、三人して漸く思付きたるは花園一聲女史也、女史は絃界の達人なるのみならず、花は未生流、茶は宗偏に遊びて、風雅心尋常ならざるに、操行の正しきこと、女徳高き櫻井博士夫人も女史に學ぶ所あるを見ても知るべし、幸に同行を諾され、以上四人にて落行く先はいづれにしても、六月七日午前八時までに、兩國停車場に參會すべき約とゝのひ、これを第一回として、爾來毎月一回赤ふだ旅行を繼續することゝせり、赤ふだの文字は事實之を説明すべし、一讀の上加盟せらる方もあらは勿怪の幸也、

六月七日、誂へたらんやうの好天氣、床離れも景氣よし、予は道順なれば小出君を誘ふ、一歩後れて花園女史予の家に來り、漸く小出君の邸前にて落合ひ、三人同じく電車に乘る、一人前二錢五厘の運賃例によつて混合ひ、この道中物語なくして約束地に着く、大和田君既に來り待つ、恰もよし汽車の將に發車せんとする所なり、いづれにしても市川より先へ行くべき旅なればとて、市川までの赤切符を買ひ乘車を待兼ねたらんやうに發車す、約三十分の車窓田の面を吹く朝風、身輕と氣輕の袖を拂ひ、心まづ清しく、一歩より一歩、俗界に遠かる如く思はれ、名物の歸帆などいふ景物さへありて、少し前の電車中の三十分とは、乘車の價値に、多分の甲乙あるやう覺ゆ、一先づ市川にて下車す、

市川は予の近頃那染みたる地なり、桃の名所として、その花を愛し、その實を賞したるが、今は桃の葉ざかり也、桃の葉を見るほどの茶人ならねど、來馴れたる地とて、見覺えしほどのものは、予を迎ふる如く思はれてなつかしき心地す、

さてこゝにて今日の遊び場所を定むべしとて、歩みながらの相談は、それより中山に行き、道をかへて市川にもどり、市川より船にて行德の菖蒲を見、そこより亦船にて兩國に歸ることゝ定まり、行德の菖蒲見を樂みの打留とせしが、これは所謂出來ぬ相

談にてありき、

とかくするほどに、はや八幡町に着きぬ、左に間はでも知らるゝ八幡神社あり、神社が投票によつて利益を争ふ世の中にも、鳥居をくゞるものは、柴を脊負ふ老嫗一人を見受けしのみにて、木立物ふりていと閑靜なる境内に、藁葺の社いかめしく建立され丹塗の板壁と、傍に立てる大銀杏の葉とは、配色頗るよく、繪馬堂には多くの繪を掲げられたるが、繪の拙なるだけ雅味の深きを覺ゆ、

社を出づれば同じく街道筋にて、程なく右に有名なる八幡の藪あり、一たび入れば出る道を失ふ、恐ろしき藪にて、周圍を嚴しく構ひ、誰もこの藪に入るものなしと云ふ、藪の前に茶店あり、そこにて暫らく息ふ、恐ろしきもののほど見たきものはなし、この藪は水戸黄門公さへ、まさかにとて足を入れられしてとあるほどなれば、變りものは入りても見たかるべし、茶店の主人は、今の時節に、この藪へ入ればとて出られぬ筈はなく思はるれど、誰とて入りて

あしゝと云ふ場所へ、利益もなきことに足を踏込むものもなく、たま〳〵元氣よき學生などの、何のこれほどの藪をと、入つて見たがるもあれど、年ふりて手入れせぬ藪なれば、變怪には逢はずとも、碌な目には逢ふまじき、薄暗くむさくろしき中をとて、一人も入れたることなしと語る、花園女史は流石女性の、筍は生えるまゝにて打捨て置くにやと云へば主人はその筍をとらねば竹は伸びるのみにて、それも日陰さゝねばおのづと枯るゝが多く、筍は次第に生えずなりぬと云ふ、かゝる藪は不生産のやうなれど、この茶店はこの藪の歴史を語るべく立ちて、八幡の一名物、相成るべくは長くこのまゝに置きたきものなり、

それより中山に行く道すがら、小やかなる家の勝手口とも云ふべき障子に、筆太に調菜場と記したるを見たり、斯るたぐひのこと一二にして止まらず、質朴なるべき地方にあまりの矛盾ならずや、たとへばこれも市川にて見たることとなるが、生徒ならば僅

に廿四五人を入るゝに足る位の家に、何々教授所と大きなる看板を掛け、一方口に右には生徒昇降口、左に來賓昇降口、敎員昇降口など記せるがあり、邪念なしといへば邪念なき仕業なり、

これも看板に「名物なし」と記せるがあり小出君は名物のなきを斷るにも及ぶまじきにと、その家を覗けば、珍らしく見事なる梨を一山幾錢として、客を待顔に積めるなり、やがてしたゝむべき食事の後の御馳走にとて、やゝ廣き風呂敷に包まるゝほど買求めたるが、さて手に提ぐるにも、肩にかけるにも、一人にて持つは重し、即ちステッキを通して、



二人して順番に擔ぐことゝなり、この順番には花園女史も免るゝを得ず、これより漸く赤ふだの旅行らしくなりたり、奚んぞ知らん此所にて買ひ置かずばと思ひし梨、そこゝの店に鼻につくほどありて、十丁ばかりの道を擔ぎ損となりたるも、時にとりての滑稽なりき、急がずとも行くほどに、中山法華經寺の門前となりぬ、この寺にとりてはあまり有難からざる一行なり、

中　小出新次郎

こゝは名に負ふ法華經寺の門前、祖師の利益には

我もわづからんと、往來に信者を呼びとむる掛茶屋三々五々軒を並べ、われ等を呼び留むる聲も、東京離れ甚しく、四五日前にたきたての御飯もありますと云ふやう聞ゆるもをかし、門の扁額、あまり文字數多くして、勿體なけれど蕎麥屋の品目を聯想さるゝなり、門を入れば右に銀杏の大樹あり、泣銀杏と云ふ、鐵の鎖にて構はれたる中に、廣告の俗氣はかゝる所にも及びて、その用材を緣に、碁盤の立札廣告あり、これでは銀杏も泣かざるを得ず、

そこより奥の院へ行く道あり、略して祖師堂に詣づ、四人代る〳〵鰐口を鳴らして、その音のよきを誇る、堂内にては賽錢の音のせざりしをいぶかりしならむ、その後にあたりて子安地藏を安置せる堂宇あり、眼つき尋常ならざる婦人三四、物思はしげなるがあり、狂い騒くあり、云はずとも知らるゝ精神病者なり、法華經の功德は、あはれむべき精神病者を治癒せしむるならんも、かゝる脫塵の境に身を置くこと、それのみにても怪しき腦病院に入るゝに優るべし、

それより境内を巡覽して寺門を辭し、『うどん屋』とて、その土地にて有名なる旗亭に入れり、献立は如何なるものにやと問へば、茶碗もり、すの物、うま煮、鷄卵燒と口ばやに答ふ、この所よろづ東京式なるが座敷は靜かにてよし、竹亭伯僊筆の額などかゝりて、こゝにはよき客も來るなるべし、すの物の材料はと聞けば烏賊なり、うま煮も同じとのことなれば、いづれ新しきものにはあらず、それよりは蠶豆は今を盛りなり、取りたてを御馳走せずや、また道すがら蟹をそこゝにて見しが、定めて新しきがあるべし、それも取よせられたし、献立のうちに鷄卵燒ありといへば、定めてその親の料理も出來るならんと云ふ、女中は變つた客よといぶかりしなるべし、やがて茹でたる蠶豆と、これも茹でたる蟹とは來れり、鷄肉はなしと云ふ、この二品さへあれば、中山にて御馳走になりしやうの心地す、あとは損の行かぬほどに献立の品々を出すべしとて、こゝに心

合ひたる四人の酒宴は始まりぬ、日ざかりの暑さに襖を拂はんとて花園女史は立つ、女史の力にては動かず、然らばわれ之を取らんとて襖に手をかけたるが動かず、大和田君はさア開け給へと、敷居の上に立たる、君が二十三貫の體量に敷居も恐入つて下り襖は苦もなくとれぬ、身體の重さは漬物の重石代用のみに限らずと笑ふ、かくて大和田君は飲む、中川君と予はまづ食ふ方なり、花園女史にも適當なる献立なれば、箸は割合に動く樣なりしが、これのみにては興薄しと、女史に一曲を所望す、旅行先ならば琴もなければ三絃もなし、もしこの家に何か樂器はなきかと問へば、女中は古三絃一挺あるのみと云ふそれにてもよしと借受け、女史は得意の高野山を演じ、中川君もまた一曲を奏す、大和田君未だ鐵道唱歌を歌ふまでに醉はざるも、興湧きて我も思はず舞はんとす、かゝるほどに菖蒲見の時間も促りければそこ〳〵に旅亭を出づ、主人らしきが見送りながら小聲にてあのお方々は何であらう、

中山より汽車に乘る、瞬くほどに市川に着く

下　　大和田建樹

汽車市川に着きて再び下車す。客待の車夫。參りませうとは言ひながら、さも不審かしげなる面持なるは。四人の一行。先には下り汽車にて下車せしに今また上り汽車にて下りつればなるべし。

そも何故に再びこゝには來れるぞ。名題の桃林。花すでに過ぎて。實は未だ熟せず。若葉もやう〳〵未の刻ならんとするにとの疑問は、豈ひとり車夫のみならんや。一行なほ遊び足らずして。こゝより更に汽船便を借り。行德の花菖蒲を見んとするなり。

さて市川の町を通り過ぎて。先だつ三君は橋を渡る。おのれは例の足遲の事とてあせるとすれど三四間の距離は後れ勝なり。梶原ならねば「はるび」ゆるしとも言ひかねて、江戸川の先陣。爭ふまでの勇氣は無かりしが。渡り果つれば。前は漫々たる苗代小田。左右はさながら汀も暗しと茂る蘆原。よし切の

聲のみ聞えて茶屋だになし。顏見合はせて失望を笑に紛らせども。誰しも汽船の乘場をと心に期したるは明らかになりぬ。赤ゲットの眞相。そこに巡査派出所のあるこそ幸ひ。詞を卑うして問へば。そは向ふなりしにと敎へられたる面目なさ。さるにても風を孕みて入りくる帆舟。ただ我友となしつゝ。とゝろ〳〵と蹈みかへる橋板。もしや天地が舞臺ならばこゝは膝栗毛序幕の花道。幕明きの唄には富本あり花園節あり。御注文とあらば汽笛一聲もあり。さぞ賑はしき事なるべし。

橋の袂なる家にて下り船の時間をと問へば。六時なれど保證は出來申さずと云ふ。保證の出來ぬとは時間の事か。又來るか來ぬかの問題かと問ひ返せば來る事は相違なしと云ふ。さらば汽車にて歸らんかとの議論も出でたれど。來るまで待たうの家康主義勝を得て。日光直射の座敷にて夏蜜柑の皮をむくさるにても三四時間の貴重なる光陰を如何にか送らん。寢るこそよけれと。煙草盃を横にして枕にするかと思へば。鼾聲囂々。雲あらざるに雷鳴せしむるは中川君なり。君の夢果して如何。試に當てゝ見んかといへば。滿場一致の贊成をもて議案續々出づ。曰く何、曰く何、されど天機を漏らすの恐ありとて君には語らざりしを。見る目嗅ぐ鼻、早くも娑婆のいたづらを告げたりと見え。君寢返りしつゝ叫びぬ風引いたと見えてクシヤミが出るなあ。

日頃は流水の如き時間が。今日はさながら溜水の如く。寢も飽きたり語りも疲れたり。いでや和船を雇ひ切りて行かんとの動議おこりぬ。折しも今宵は月夜なれば。それにすべしと一定し。亭主に之を謀れば。和船は何時間かゝるか分りませぬが。汽船にてすら東京までは四時間もかゝりますと云ふ。それは大變。四時間かゝられては。東京に着く事。十一時頃になるべし。止みなん〳〵。汽車こそとの否決說又復活して。停車場に向ふ。車夫ます〳〵物問ひたげなり。

汽車例刻より十何分おくれて來る。各室こぼるゝ

ばかりの滿員なり。中川君とおのれとは。室外に立ちつゝゆさぶられ行く。涼しき事二つなし。賤が垣根に卯の花あり。時ならぬ雪の村消を思はせ。田には短冊苗代。到る處に綠漲らして。歌一つ書かまほしく。今ぞ自由の天地を我物にして行く。床几得たる幸福者の夢にも知らぬ幸福なるべし。

兩國に着きぬ。隅田川のロセッタ丸を訪ふべしとの說もありたれど。なまぬるき風。海遠き魚。今日の遊の打止としては。興少なしとの反對ありて。大切の一幕は藥研堀の常盤とぞ定まりたる。

忽にして酒池肉林忽にして氣焰萬丈。忽にして盃盤狼藉。花園女史飮まずして醉ひ。小出君醉はずして飮む。興盡くべしとも見えざるに。十時の時計は打出しの太皷と響きて。袂を連ね街に出づれば。電車は今しも先客をおろして。晝の夢路を載せつゝ行けと待ち呉るゝに似たり。

女子と水泳術

島田鎭三

近年大日本體育會の女子部では、男子と同じく女子もまた水泳を爲さしむるの必要があるといふので何でも一兩年前の事かと思ふが、東京市內の某處に之が水泳場を設けたが、何うも餘り哇々連の見物が多いので、大森邊へ場處を移されたとか聞いたが、それは嘸左樣であつたらう、併し私は當時その新設せられた事を聞いた時には非常に愉快で堪らなかつた、尤も自分は男子であるから、何も曾て泳ぎを好んだからとて別に自慢する程の事も無いのであるがまだ鄕里に居て近所の川へ泳ぎに行つた時には腕白盛りで、友達の泳ぐのを見て羨望に堪へない、殊に自分より小さい女の子が、凡そ巾七八間から十間もある急流を易々と向ふの岸へ泳ぎ着くのを見ては、男子の友に對する羨望は、女子の友に對しては憤慨と變じたのである、

乃で何是しきの所を泳ぎ超せない事があるものかとは憤慨したもの丶、併し自分とても素々河童の子では無し、水中へ飛び込んでは見たもの丶、鼻から水が入つて、ツーンとした其時の心地悪さと云つたら無いのであるが、友達には去り氣なく、何うかあの女子の友達に笑はれまい、イヤ負けまいとは思ふもの丶、中々身體が浮ばない、や丶一週間もする中に辛く二三間位は先へ出られるやうになり、尚ほ一週間ばかりの中には彼岸へ行かれるやうになり、それから日を經るに從つて浮泳ぎ、立泳ぎといふやうな曲藝迄も覺える樣になつたが、何も初めの中は石地藏よろしくで沈んで仕舞ふ、昔から疊の上の水練といふ諺がある如く、何事でも左樣であるが、習ふよりは慣れるで、練習が積なければ上手に泳げるものではない、萬一の事は兎も角として、この運動の如何に興味があるかは言語で盡せるものでは無い、一體女子方は物を怖がる癖のあるもので、殊に水邊へ臨むと一層に其恐怖心が強いが、苟くも此水泳術に熟するといふ迄では無くとも、せめては其端緒だけでも心得て居れば、

自ら其恐怖心が無くなる

だけでも、一生の間に何れ程得があるか知れない、故に私は敢て女子に之を奨むるのであるが、それに就ては自分の實驗もある事とて、聊か其手解きを示して見やう、之が

實習法の第一着歩は

まづ最初自分の脛位の水の深さの所で、兩手を衝いて足の方でパシャ〱と行つて居れば、何時か自然と浮くやうになる、もし之を速成に行らうとするには、矢張水の淺い危ぶなげのない所で、腹を下にして横はり、兩手で人に捕まへて貰つて、

手で水を搔き足で水を蹴る

のであるが、この蹴るといふのは寧ろ敲くといふ方が早分りかも知れない、即ち前に云つたパシャ〱と左右の足をかはる〱、少し擧げては水を打つのである、尤も此際は成るべく頭も顔も一緒に水に浸

ける方が浮び易い、或地方では之を顔浸けと云つて居る、之を何度も〳〵繰返して居ると、遂には人手を借らなくとも、自分獨り泳げるやうになる、龜の子泳ぎ又は蛙泳ぎしながらも、身體が浮く樣になれば最早大丈夫それよりは面白も附いて來るから張合も出て來る、それ以上は最早自分の熱心一つで上達も早く成るのである、尤も此泳ぎ方には種々の流儀も分れて居るが、普通素人の行る方法といへば、先づ兩手の指を伸し、拇指と拇指とを、くつ付けたまゝ諸腕を十分に前へ突き出し、これと同時に兩足へ力をこめて水を蹴り、それより前に突き出しつゝ、手は掌を下



に向けたるまゝ半圓を畫きながら、同時に足を屈伸するのである、人によりては伸したる手で半圓を畫かないで、全圓を畫く人もある、それは餘り宜しくない、といふものは、さうすると半圓を畫くよりは腕の疲勞が甚しいから、迚も遠距離を泳ぐことは出來ない、この泳ぎが出來るやうになれば、次は抜手或は立泳ぎといふ順序になるのであるが、それは左程骨の折れるものでは無い、既に普通の泳ぎが出來るやうに爲つたならば、川立ちは川で果てるといふやうに、チヨツト放心した事から大事を釀す事がある、依つて

水泳中の注意箇條

を心得て居らねばならぬ、如何に熟練した游泳家でも、時々起り易いのは手足の痙攣で俗にコグラカヘリ又はコグラ上りと云つて、其爲に身體の自由を失ふ事があるから、まづ慣れぬ中は餘り沖へ出て泳がぬが良い、若しも之に罹つたならば、周章ないで靜かに其凝を揉み解すが宜い、さうすれば直ちに恢復するものである、それから泳ぎを初める前に、必ず指の頭へチョッと水を浸けて、それで耳の穴や鼻の孔を濕して置くが良い、又食事をしたばかりや、空腹の時などには決して行つてはならぬ、

水といふ中にも淡水と鹹水とがあり、その淡水の中にも池、沼、湖、河といふやうに數種ある、そこで海水で泳ぎ馴れた者が、所謂淡水に入ると、何うも身體が重いやうに感ずる、然るに淡水で馴れた者が海水へ入ると、今度は非常に調子が輕く覺える、それは何故であるやといふに

鹹水と淡水とでは比重が差ふからである、故に初め海で泳ぎ習つたものは、河や湖水では餘程注意をしなければならぬと同時に、湖水や川などで習つたものが海へ入ると、それは樂に身體は浮くが、一番に困る事が一つある、即ち波である、小さい波ならばフツリと其を乘り越せるが、大きいのでは左樣は行かぬ、その時にはその大波の下を潜るのが宜しいが、成るべくは左樣いふ危險に近かぬ方が良い、併し不時に起つて來た事は據ろないとして、其他は避け得らるゝだけは避けねばならぬ、

それに少し水練が出來て來ると、水と見れば直ぐに飛びこみたがるのは、是は男女を問はず通じて有する所の弊であるが、廣い河は水面より下が急流で川尻は一體に水流が急なもので、殊に危險が多いから、萬止むを得ざる場合の外は、勝手を知らざる處と共に這入らないやうにしなければならぬ、

夏時の膳部に上る魚介

大岩仙子

夏時には重に如何なる魚介の類が膳部に上るかといふに、それは一種や二種では無い、そして其調理法も樣々あるが、今は其調理法よりも、それに先つて之が鑑識法、平たく云へば目利法ともいふべきもの、事を話して見やうと思ふ、

まづ夏時の魚類で第一位を占むるものは鯛で、これも處に依つて異ふが、關東地方では上總の猍生あたりで漁れるのは味が良い、一體この魚は其發育の程度によりて名稱が異なるのであるが、普通世間では一口に鯛とのみ云つて居る、けれども其道のものは、べん、かすで、ぶら、こめ、おほめ、くち、なが、最後に鯛と稱するが、最早鯛と稱する頃は少くとも目の下が一尺程になつたもので、それから中鯛大鯛といふ順になるのである、而して之に赤いものと黑いものと二の種類ある、即ち黑いものは雄魚で餘り味が良くない、赤いものは雌魚で、價も黑よりは少し高いが、その換り味が良い、

次は比目魚であるが、この魚は釣り漁るものと網で漁るものとの二通りある、これも關東では先づ房州沖のものが美味である、昔から三月比良魚は犬も喰はぬといふ如く、その頃は殆んど不味いのであるが、併し今日此頃に至つては、極小さいものは味が好い、尤も網でとつたものと釣つたものと比べると釣つたもの、方が味が良い

といふものは、その網で捕るものは、夕方から漁夫が網を下して置く、すると大抵の魚は左樣であるが矢張この比目魚も其網の目に入ると、後へ退くといふことを知らないで、たゞ無暗に先へ〳〵とばかり氣を焦る、幾ら焦つても一度網に掛つたが最期、モー脱げることは出來ない、何うしても其で捕られて仕舞ふ、それ故に畢竟一晩中氣を揉むので、それで

味が悪いのであるが、之に反して針で釣るのは、ホンの一思ひに釣り揚げて了ふので、その氣を揉ませる時間が短かいから、それで味も良いのである、

次は鯔であるが、之は御承知でもあらうけれども鯛と同じく其發育の時期によりて名稱を異にして居る、即ち最初はをぼこと呼ぶが、それが一年經つといな、又はなよしと稱へ、それからはねかへりと化し三年目に初めて鯔となるので、之が十分脂肪が乘つて旨いのは十月頃であるが、今でも左樣捨てたものではない、これは出世魚と稱して芽出度い席にはよく使はるゝ魚で、殊に商家などでは昔から十月の惠比壽講には無くてならぬ魚としてあつた位である、

よく割烹店などで魚類を池簀に容れて飼つて置くが、之は素人でも出來る事で、それには所謂岡澁といふものを掛けるのである、この岡澁を掛けるには成るべく鹽の加減を強くしないと不可ない、その鹽加減を弱くすると味の良否に關係して來る

から、池留めには少し強過る位が良い、併し左樣したからとて一週間も二週間も保つといふ譯には行かない、精々長く保つて三日乃至四日位のものであるそれに之も何の魚にも通有性であるが、殊に鯛や比良魚などいふ類は非常に目を大切にするもので、若しも是等の魚を他のものと一緒に容れて置くときは他の魚族が自分の上の方で泳いで居ても、それを怖がつて下に小さくなつて縮んで居るもので、さうなると一層味に影響を及ぼすものなれば、成るべくは同族のものゝみを一緒に容れて置くやうにしなければならぬ、

次は蝦で、これを捕ふるには手繰といふ網を用うるが、之は強ち蝦にのみ限つた譯でも無いが、主に蝦を捕るに用うる、さうして之も夜分で、日中車蝦は藻の中に潜んで居つて、夜分になると藻の上へ浮んで來る、その時網を牽いて捕るので、之には具足煮、鬼から燒、天麩羅などゝ種々の調理法もあるが一體蝦や蟹の類は灰質の強いものであるから、その

調理は好みに任せるとして、何にするにしても生煮生焼、生揚げのものなどを食べてはならぬ、
右は夏時に於ける魚介類の二三種を擧げたに過ぎないのであるが、私は單に品物の名稱を列記したり又は之が調理法を述べやうといふのでない事は既に前に斷つて置いた如くである、唯望むところは、或は學校、或は講習會若くは自宅で調理法を學んだ方く々のために、當今のやうに
一家の幸福は庖厨に在り
といふが如く、衛生と滋養とに重きを措かるゝにも拘はらず、よく其味の由つて來る所を審かに知らるゝ方が乏しいやうに考へらるゝので、聊か實習の爲にもと思つて紙面を割愛して貰つたのである、

夏ごろも

菅　惠　子

螢

夏草のしげみにすだくほたる火は
　夜さく花と見まがひにけり

夕ざれは流れすゞしき鴨川の
　水にうつらふほたる火のかげ

水鷄

小夜ふけて友かとばかり柴の戸を
　たゝく水鷄にわざむかれけり

人訪はぬわがしをり戸はこと〳〵と
　たゝく水鷄も甲斐なかりけり

月かげのすゞしくさせる柴の戸を
　あけよとばかり水鷄なくなり

夏月

風ならで涼しかりけり池水に
　影をうかべる夏の夜の月

月かげのすゞしくさせる夏の夜は
　ことにみじかきてゝちてそすれ

足引の山の木の間をもる月の
　かげもすゞしき夏の夜のそら

夏の夜の川瀬にうつる月かげや
　涼しき色をむすびとめまし



（一）

『良人、今夜は少し早く歸つて頂けませうね』と、見るからして纎弱しい妻は、空手に鬢の後れ毛をかき上げながら、膝を突いて帽子を出して居る。

無言で編上靴の紐を結んで居た良人は、結び果て掌を拂ひ、外套を一搖々つて、依然無言で帽子を邪慳に引奪つた。

『良人、今夜だけは少し早く歸つて下さいましな、ねえ』、

『先づ晩いものと覺期して貰ひたいね』

『ですけれど、成るべくお早くお歸んなすつて下さいまし、今夜で三晩續きますからねえ、皆な勞れ切つて――』

『内に居て靜坐してるものが勞れる位なら、外で働いて居るものは、那れだけ勞れると思ふ。手前勝手も可い加減にしろ』と、帽子の位置を修して、茶革の手袋を嵌めながら、尚口の裏で呟いて居る。

其の權脈に愕然して、妻は其の面を瞶めて居たが

銀頭の杖を小脇にかい込んで、格子戸に手をかけたので

『ぢやア今夜も亦晩くなるんですね、何う有ても』

『遊びに行くんではないからね、用が濟だら遲々しては居ないよ、多少社會に頭角を現はさうといふものが、出入毎に細君の節度を受けて何うなるものか馬鹿も休み〳〵言ふものだ』

手荒に格子戸を引き開けると恰好そこへ郵便が來た。主人は直に手を出して受取つたが、其の差出人を見て、莞爾と微笑むだまゝ、二つに折て衣兜へ押込み、些いと後を回顧て、闊歩に歩み去つた。

妻は玄關に坐つたまゝで、茫然として往來を眺めて居たが偶然心著いて身を起し、靜に障子を閉めてさも力脱のしたやうに、火鉢の此方に坐つた。

良人の裀にはまだ温りがあつて、灰につきさした喫さしの卷莨からは、殘んの烟が淡らとたち騰つて居る。散亂つた新聞を揃へて疊む勇氣もなく、火鉢の緣にかた肱靠れて、妻は沈思を續けて居る。

『愛兒でもあつたら斯でもないだらうが、何うして如彼に邪慳におなんなすつたらう、全く私は倦られて了つたのか知ら――』と、火箸を把つて灰を均しながら『此んなに身體が惡くつては、自分でさへ隨分倦き〳〵する事があるんだもの、旦那のお心になつて見ると、可厭になつてお了ひなさるだらう。倦られるのも無理はないけれども、情愛といふものは其んな淺々しい水臭いものぢやありさうもないね乃公は一夫一婦を人倫の上に動すべからざる原則と認めて、之れを實行する事を畢生の義務と信じて居るから、藝妓を買て劣情を娯しむだの、妾を圍つて獸慾を滿すだのといふ事は、誓つてしないと被仰つたけれど、お口が餘り立派なだけに、一倍心許ないやうな氣がする。それにしても此の身體がもう少し壯健なら、怨言でも何でも言はれるけれど、――わゝ、何たる愛想の竭きた身體だらうねえ』と、隻手に顰めた額を壓へて、自狂に火箸を投げつけると、柱に當つて鏘々と聲を發した。

「奥様、御生家の若旦那がお見えになりますよ」と、仲働女のお松が次の間から知らせると、妻は俄に笑面を作つて、

「おや、爾うかえ、また御不在で生憎な事ねえ」

「何も旦那様に御用がおありなさるではなし、奥様がお在なら可いぢやございませんか」

「だけれども、來る度に御不在だと、阿母さんがまた氣を廻して御心配なさるもの」

「それは奥様の方がお氣が廻り過ますので、御隱居様が其んな事を思召しますものですか、餘り先から先を御心配なさいますと、御身體が續かなくなりますよ」と、お松は爽懐に茶道具を整へながら、散亂つた新聞を淸いに片づけると、誂へたやうに格子戶が開いて「御免下さい」と、聲をかけながら、障子を開けて佇立むだのは、增毛重吉といふ妻の仙子が實弟である。

「姉さん、兄さんは？」と、入りもやらずに四方を看回して居る。

「多忙しい身體だもの、今時分在らつしやりさうな筈がないやね。ま、お入んなさい〳〵、寒いから其處をぴつたり閉て」

「や、御不沙汰をしました、變つた事はありませんか」と、襞の潰れた小倉袴を、足に絡み着けて、火鉢の前へちよこなんと坐つた。

「今お役所の退けかえ」

「えゝ。今日は少し早く退けましたから、些いと寄つたのです」

と、お松が汲だ茶を一口飲んで「兄さんはもう總選擧の準備ですか」

「何だか私には了解らないよ、何一つでも被仰つた事はないもの」

「そりやあ爾うさ、姉さんのやうな神經家に、選擧運動まで相談して居たら、秘密だつて一つも保てやしない。政治家の妻だからねえ、もう少し快濶にして、多少交際も勤めなくつては不可ないさ」

「生意氣お言ひでないよ、貯金管理局へ回して貰つ

たばつかりで、まだ給仕離れがしない癖に、眞個に生意氣だよ」

『もう青筋を立つたのですか、困つた病的だ。姉さんは給仕々々つて何時までも僕を小僧扱ひにして居るけれど、給仕だつて馬鹿にはならんよ。僕等の先輩にい齋藤海軍大臣もある、滿鐵總裁後藤男爵もあるからな、へん』と、手を伸して其處にある乾蒸餅を一掴み掴んで、ぼり〳〵と嚙り始めた。

『それが將來の大臣の所作かえ、ま、惘れたものだねえ。おほゝゝゝ』と、笑ひながら自分も茶を啜る。

『齋藤閣下でも、後藤男爵でも、其前身は斯の如きもので、當家の兄さんだつて、電氣技手をした事があるんだ』

『馬鹿におしでないよ、兄さんはお國に歴然とした地所があつて、今でも生計の半分は其方から來るんだもの、其んな小役人なんぞなさるものかね』

『大功は細瑾を顧みずですよ、淸浦さんは忍の行田の小學敎員で、尾崎三郎さんは京都の巡査です。兄さんが電信技手だつたから、別に政治家の價値が低るものぢやありません。へん、憚りながら』

『重さん、お前何うかしてるの？大層氣炎を吐くぢやないか』

『燒殘りの書類整理で發見したのだから、氣炎よりは、餘炎といふものだ』

『何の事だえ？』

『何ね、去年役所の火事で燒殘つた書類を整理してゐるとね、其中に古い修技校の志願書の綴込みがあつて、夫に山梨縣第何大區第何小區……村平民大宅山四郎といふ願書があつたといふものさ。珍しいでせう、夫れが燒殘つたのも不思議でせう』

仙子は弟の話しの何うやら根據のありさうなので、早晩耳を傾けるのである。

重吉は大いに氣を得たらしく『何にしろ兄さんのお名前は、電車市有反對以來非常に人の記臆に上つて居るからねえ、皆なが夫れを見て、當時賣出しの政治家も、曾てはこゝの飯を食たと見える。電信技

手から一の蝸牛露伴を出したのは、我々の偉大なる光明と仰いで居たのだが、今また大宅君の如き未來の大臣を出したのは、實に至大の名譽と言はねばならぬといふ騒ぎで、其の義弟がこゝに居る、是も將來大飛躍をするかも知れないから、大いに祝へといふので、散々胴揚にされたのです。姉さん眞説だよ、全くだよ』

双手を眞直に膝に突つ張り、能ふ限り肩を峙て、、眼にも口にも莞爾として笑つて居るのは、堪へぬ怡悦の溢れたものとしか思はれないので、仙子も臆はず誘入れて、

『ぢやア事實の説しなんだね』

（三）

『事實だとも、僕が姉さんを欺して何の益がある』

『夫りや爾うだけれど、今まで些とも聽た事がないもんだから』

『女房には其んな事まで話さなくつては不可ないものかね』

『其んな事はないけれど、話したつて別に害にはなるまいぢやないか』

『爾うか知らん、僕は爾は考へないね』

『何故？重さんは何う考へて？』

『僕は慥かに害があると考へるね』

『妙だねえ。爾して見ると女房といふものは、餘程不信用なものと見えるのね』

『ま、爾うだね、或場合には慥かに不信用だ。殊に姉さんのやうな神經質の人には、常の話にも警戒が必要だらう。現に今でも爾うぢやないか。兄さんの前身は電信技手だと言たら、姉さんは沸然になつて、小役人なんぞした事がないと辯解なすつたらう、電信技手はいかにも小役人には相違ないが、併し技術と修練を經て任せらるゝので、男子の職業には相違ないのだ。それを一概に辯解なさるのは、小役人は非常に賤しいもので、其の出身だと言へば、兄さんの金箔の剝げるやうに思ふからだね。それ御覧、僕が言つてさへ直に爾う貶めるのだもの、若し兄さん

が被仰つたら、姉さんは非常に輕蔑して了ふに違ひなからう」
『何を言ふんだね、私の氣として何うして其んな事が能きるだらう」
『いゝえ、夫りやア僕が斯う言たからだ」
と、重吉は鋭く首を掉つて、『何、必然輕蔑るに極つてる。憤つたつて可いさ。――全體姉さんは兄さんを誤解して居るから、夫れで家庭が圓滿に行かないのだ」
『おほゝゝゝ、大層お祖父さん染た事を言ふのね。私が兄さんを誤解して居るか、兄さんが私を誤解して在らつしやるか、知れたものぢやないやね」と、仙子は急須の茶を湑むで其れに鐵瓶の湯を注だ。
『兄さんが姉さんを誤解してるッて、夫れだから阿母さんの御心配が絶えないんだ」
と、重吉は拱手をして熟と考へる。
「阿母さんが私の事を御心配なさるの、え、重さん、今以て心配して在らつしやるのかえ、重さん」と、仙子は茶に唇を觸れたまゝ、遽かに茶碗を下に置いて、青い顔に深い皺を刻み着けて居る。
『姉さん」と、重吉は曇らした顔を擡げて『全く貴女は不孝だよ、兄さんがねえ、姉さん、兄さんが家にお尻の落つかないのを、姉さんは何と思つてお在だか知らないが、阿母さんは仙子が我意だから、大宅さんを憤らして了つたのだと被仰つて、御自分の爲すつた事のやうに、夫れを心配して在らつしやるんですよ、姉さん、何故姉さんには兄さんの苦心が解らないだらうねえ」
『知りもしない癖に、人の非ばかり擧るものぢやないよ。旦那の氣が近頃何んなに變動て居るか、お前さん知らないぢやないか。私もう少し學校へ行つて貰へたなら、旦那なんぞに瞞着されはしないけれど、高等小學で澤山だ、女學校なんぞ我々の娘には要らん事だと言つて、阿母さんが無理に手許へ引着けてお置きなすつたもんだから、政事家の妻が何んなもんだか、實業家の家庭は何うするものだが、些とも

解りやしなからうぢやないかね。だから、番毎譴責ばかり言はれて、謝らなくつても可い事を謝まらされるんだよ』

『なるほど兄さんの不平を言ふのが有理だ、此の筆法で捏ね返されては、いかな好人物でも忍耐は能なからう』

『何を言ふんだね、可い加減におし』と、甲高な聲で一喝して『今何とかお言ひだね、兄さんの不平が有理だとお言ひだつたやうだね』

『え丶、其の通りです』

『ぢやア旦那が阿母さんに種々な事を申告るんだね』

『申告るといへば語弊があるやうだが、堪り兼て來ては漏すんですね。兄さんは阿母さんを實母同様に慕つて居て、僕も血を分けた弟のやうに扱はれるんだから、阿母さんには何んな秘密でも明すんだ。ですから僕も大概な事は知つてるのさ』

『其んな風にして欺すんだらう。私も全く欺されたんだよ、旨い事を言つて欺し込で、私が馬鹿だからオイソレと口車に乘せられ、首尾よく結婚して見ると、自分の鑑識が違つて居たものだから、直ともう倦が來たけれど、無理に貰つた女房だから、自分から出す理には行かないので、出て行けがしの扱ひをなさるのさ。夫りや歴然洞觀てるけれど、此方ももう剛情になつて、何うするか些とでも動くまいと決心したのだわね。だから、夫婦といふものは戸籍面と人前ばかりで、全く仇敵同志が睨めッ競をしてるやうなものだよ。其の仇敵の言ふ事を、眞正に聽て居られて堪るものか、眞個に可い加減にしておくれ』と、冷た茶で息を入れたが、まだ熾んに迫つた息がはッはッと機んで居る。

『病的だ、全く病的作用だ、實に驚いた誤解をするんだねえ』と、呆然に取られて姉の面を見て居たが、後から其の眼を濕して『夫れぢやア姉ねん冥理が盡るせ。兄さんが姉さんを愛して居ることは、吾身を愛するよりも以上だよ。殊に彼の通り不健康な身體

だから、切て二三ヶ月寂樂に轉地でもさせたら、健康も回復し、神經も鎮靜するだらうが、何うしても其の融通が着かないので、仙子よりは私の意氣地のないのが腹が立つと被仰つて、男の眼に──姉さん、え、姉さん──男の眼に涙を浮べて、阿母さん、私が虐待するやうに思召さうが、私は何ういふものだか、仙子が憫然で、可憐さうで、外で仕事をして居る時でも、偶然想理すと居ても起ても居られない事がありますよと被仰つてね、姉さん、それにつけても早く自分の地位を高め、社會に信用を増して、仙子にも安心させ、多少得意な地位に立つたなら、神經の方だけでも鎮靜らうかといふ考へで、種々と焦慮つて居ます、夫れが爲に隨分社會の反感を買つた事もありますが、仙子の感情さへ和らいだなら、私は深く恨みとしません。──姉さん、お前さんに那れだけの德があつて、是れほどまでに亭主に氣苦勞をさせるのですか、恐く是れほど情の厚い良人といふものはありますまい」と、熱心餘つて口からは沫を飛ばすのだ。

「甘いのねえ、其口に私欺されたのだわ。お前さん餘程緊實しておくれ。先刻だつて、些と歸りの時刻を聞くと、馬鹿の百も並て出て行たんだよ」

「そ、そ、それが兄さんの深情なんだ」

「おほゝ、深情で女房を叱り飛すんだね、妙な深情もあるもんだ」

「斯ういふんです。畢竟私が餘り腫物に觸るやうにするから、依頼心が起つて、何時までも氣が引立ぬのでせうから、些と殘酷に仕向て、一つ興奮させて見ませう。或は效を奏すかも知れませんといふので、全く阿母さんと相談づくなんだ」

「え、重さん、夫りや眞説かえ」

「何、僕が噓を吐いて何の益がある」

此時、車が家の前で停つて、戛然と格子戸が開いた。仙子が仲働女を呼うとする、其の刹那──

「仙子々々、大急ぎで飯を食へるやうにして呉れ」

「あつ、兄さん」と、重吉が身を起すと、靴をとん

と投出す音がして、山四郎はつか〳〵と上つて來た。
「お〻重さんか、今阿母さんには御暇乞して來たが、今つから、大坂まで行て來るから、不在中一つ君に賴むぜ」

〔三〕

「良人、お燗がつきましたよ、お汁の冷ないうちに、召上つて下さいまし」と、仙子は片襷のま〻前掛で手を拭き〳〵中の六帖を覗いた。

支那鞄二箇には和洋の衣



服をぎつしり詰て、もう麻索が龜甲にか〻つて居る。ズックの鞄には書物だの、文房具だの、坐石の用を便ずる雜品の類を充して、重吉が赧くなつて革を締ると山四郎は車夫に手をかして柳行李を据つて居る。其の周圍には、古新聞だの、毛布だの、洋傘だの、

提籃だの、双眼鏡だの、水筒だの、類が散亂て居て、六疊は足の踏ん込み場所のない程である
『おや〳〵、大層なお荷物になりましたね、夫れだけお持なすつたら、後は夜具と夏衣ばかりでせう。おほゝゝゝ』と、仙子が口に手を掩つて笑ふと、山四郎は險しい眼をちよいと光らしたが、咄嗟に氣を轉へた。
『串戯被仰つちや困りますせ、有る人といふものは、ちよつとした旅行でも、先づ雜と此んなものさね』



と、手を拂つて腰を伸した。
『爾ですねえ、執達吏が來て封印を着けても、依然これだけですねえ』
『馬鹿ッ、夜逃と間違へちや困るぞ』
『何う致しまして、白晝逃だと思つて居りますよ』

と思ひ切つた戯言を听いて、ひよいと首を引込めた。
「姉さん、餘り甚い事を言ふぢやないかね、兄さんは旅行なさるんだよ」と、重吉が怺え難て戒めると、山四郎は怪しく眼を瞬かして、唯苦笑ひをして居るばかり。
「兄さん、殘餘は僕が車夫先生と協議して行りますよ。姉さんが待つて居ますから、彼方へ行らつして下さい」
「爾かね、ぢやア重さん願ひますよ」と、衣服の塵埃を拂つて、茶の室へ入つて行く。
「今日は兄さん、改まつた口を听くよ、訝だなア」と、支那鞄の上にズックのを積みながら呟いた、重吉の聲は、襖一重の茶の室へは聞えなかつた。
山四郎は仙子に酌をさせて、いつになく快く酒盞を傾けるのだ。
「この吸物は誰の御加減だい」
「鹹くはございませんか、私が鹹口ですから」と、仙子は心配さうに眉を顰せる。

「いや、素敵に美味いから聞いて見たのだ、仙子の方餘所行の腕を揮はれたと見えるな」
「眞個ですか、お口に合つて、何より結構でございます」
「お前も食つて見るがいゝ、蕗の台の吸口なんぞ豪儀に風味が佳いよ。——、さ一つ飲みな」と、酒盞を献して直に銚子を取る。
「あの、私にですか」
「お前でなくつて誰にだい」
「ですけれども、餘り珍らしいから」と、また手を出さずに不思議さうに眺めて居る」
「だつて俺は旅行するんだもの、言ば復逢ふまでの別れの酒盞だ」
「此んな青瓢箪の皺婆さんに——」
「文句を云ふな。時間がないわい」と、酒盞を手の上に投げて與る。
仙子は悄悴として手に受け、兩手を添へて酌をして貰つたが、夢のやうに良人の面を見て、窃と唇を

つけ、
「良人にお酒盞を頂いたのは、全く三年目だわ、今度はいつ頂けるか知ら——」とほろりとしてぐつと飲乾した。
「其のまゝ與んな、洗がなくつても宜しい。晩くも二週間の後には、吉報を齎らして、お合膳で獻酬をするのさ、夫れを樂しみに留守を氣を着けて貰はう」
「留守を預るのは私の役ですから何んなにでも氣を注けますが、良人もお閑はありますまいけれど、三日目や四日目には是非お手紙を下さいまし」
「手紙かい」と、熟と顏を見たが、素逸く箸を刺肉に投じた。
「えゝ、電話でもお話しが能るのですが、一々高い通話料も拂はれませんから、離れて居ると郵便ばかりが便なんです、夫れに鏑木も催促に來ませうし、倶樂部の方だつて、不時な用が生まいものでもありませんからねえ。是非ちよい〳〵お手紙だけは頂きませんと困りますよ」
「爾う正面から攻撃されると一言もないよ。併し鏑木の方は二月の利足を納れて置たから、まさかに今月中は待て與れるだらうと思ふが、何と言て來ても不在で追拂つて與んな」
「夫はまア夫として、良人競馬の時の一件が僅か今月一杯でしたよ」
山四郎は頭を掻いて「あいつには大閉口だ、メートルの昇つた奴は、いつでも配當が少ないから、一番穴を狙つて掬はふと思つたんでね、九百圓といふ大穴を開けて了つた」と、夢中で山葵を刺肉にくるみ、夫を一口に頬張たので、眼を白黒して涙を流しながら、額を叩いて息を吹いて居る。
「おほゝゝゝ、能く利きましたねえ、九百圓が千五百圓になつたんですもの、夫れくらゐの利目は有りませう。」
「今度大坂へ行けば必然甘く行つて見せるよ」
「今までの御手際がありますから、何うも安心が能ませんね」

『大丈夫だと言ふ事よ』

『夫れが違つたら、私この内には居られませんよ』

と、保ちかねて太息を吐く。

山四郎はそれを見て凄味のある笑ひを含んだが、酒盃とゝもにぐいと呑込んで、

『西陣の帯に小紋縮緬の一重ぐらゐは、確かにお家苞に買て來るよ。其んな事を氣にしないで、ま、一つ飮れ、さゝ、お酌をするよ。ねえ仙子、俺の爲に前途非常に望みのある首途なんだ。機嫌よく一杯飮つて、祝つて發程して呉んな。よ、お願ひだ』

仙子は酒盃を受けてほろりとなり『お願ひだなんつて、其んなお優しい事は、宅の二階に在らッしやつた時に伺つたばッかりですよ。彼の時分は眞個に優しかつたのねえ。夫れが公然て同棲になると、全で人が變つたやうに邪慳になるんだもの。私が此んな常病人になつたも無理はないのねえ』

（四）

大宅では山四郎が旅行先の音信を待ちつゝ、安か

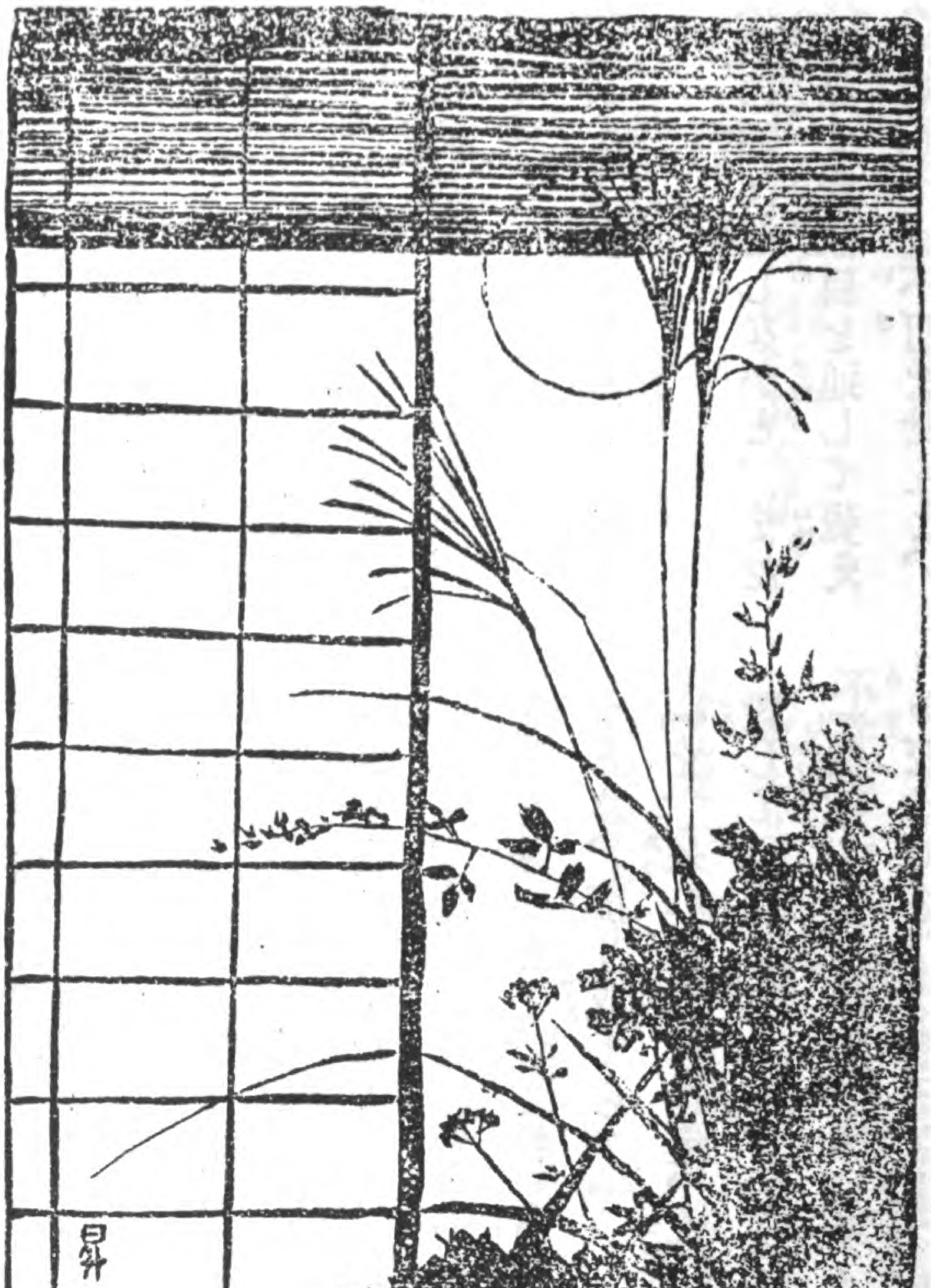
らぬ日を送つて居る。新橋で袂を分つにも、堅く音信の事を頼み、山四郎も快諾したのであつたに、一週間は過ぎ、歸ると約した二週間も、明日を限りとなつたのに、たよりの風の音信もないので、唯さへ歇易的里の強い仙子は、狹い胸に溜て餘る心配が痞塞となり、頭痛となり、楚痛となり、噪狂となつて、今は煩悶と欝悒とに、衾を離るゝ事さへ能はず、糸の如く瘦たる身を、倚春窓に悶え苦しみ、牀と枕にくひ着いて、戀しき人の移り香を、空しく涙に洗ふのである。

蒼ざめた面を顰めながら、重吉は枕邊をさし覗いて、極めて小さな顫え聲で、

『姉さん、もう大概車に積んで了つたよ、近隣の人が愕然して見て居るから、僕はきまりが惡くつて、逃て來たが、姉さん、實に口惜いぢやないかねえ』

『あの鏑木といふ奴がね、義理も人情もある奴ぢやないのよ。だから彼では初中兄さんと衝突したのさ。――重さん、後生だから其の水藥を少しお呉れ

『また胸が苦しいかい、困つたなア。只さへ昨日から良くないのに、執達吏なんぞが舞込みやアがつて、利不盡な事をするんだもの、病氣の重るのは當然だよ、法律さへ無かつたら、僕た、た、たゝき殺して遣るのになア、横暴無慘な高利貸の利益を保護するやうな法律があるんだもの、法律だつて決して正義の保護者ぢやないや』



『重さん、まだ執達吏が居るだらうに、大きな聲をおしでないよ』

『關ふものか、彼奴等は狐の伴をする狼だ、高利貸がなかつたら、役人面をして飯の食る奴ぢやないんだ、此んな事を見ると、僕は社會主義者になつて了ひたくなるッ』と、齒を切しばつて眦を決するのだ。

『重さん、もう何にも言つてお呉れでない、私今度といふ今度は、郭然と悟を開いたのよ』と、切なさうな咳をして、紅くなつた額に纖指を加へ、頭痛を揉んで突伏して了つた。

『悟つたッて何う悟つたんだ、え、姉さん』と、膝を進めてさし覗いた時、玄關の障子が戞如と開いた。

『ちよいと、今の人！』

「馬鹿にしてやアがる、チョッ」と、舌打をして玄關に出で「僕の事ですか」

「わゝ爾だ」と、執達吏は二通の書類の一通を渡して「是は副本だからお前の方へ取て置くんだ。今は假差押だから、此處へ置ても可いのだが、主人が不在では保管も不十分だし誤つて封印を破毀でもすると、却て刑事上の犯罪を構成するから、便宜上當役場で保管するのだ。其内に要求金額相當の金を供托すれば、何時でも保管を釋く。又強制執行に對する訴訟を提起するなら、一週間内にするが宜からう。念の爲めそれ丈注意して置く」

重々しい咳拂ひを故意とらしく高く殘して、銀モールは悠然と出て行く。

「今の差押へ物品で、豫定の額に達しないと、また其内に差押へますが、現在品は大概目を通して覺えて居るから決して隱匿なんぞしては不可ませんよ、可うがすか、ま、御病人を御大切に――」

是は鍋木の手代が、去るに臨んでの好意であつたが、重吉は眦の裂んばかりに睨み詰めて、ぴッしやりと障子を閉めた。

「ま、重さん、餘りだわ」

弱々しい姉の聲を聽くと、重吉は兩眼の涙を押へて、枕許へ轉り込んだ。

「頭へ響いたかい、惡かッたねえ」

「何うしたの、何とか言つて居たぢやないかね」

「到頭かつ攫つて行つちまやアがつた、横奪者め！」

「何を言つて居たの、必要な事ぢやないかい」

「ふん、馬鹿にしてらア、此が欲きや一週間内に金を持て來いとよ。これで足なかつたらまた參りますッとさ、能く成てらア」

「ま、呆れた奴だねえ、序に姉さんを持て行つて、殺して呉れりやアいゝのに」

「失敬ぢやないか。エンサイクロペヂア、ブロダニカだけでも、時價三百圓以上するんだ、足るも足ないもあるものかい」

「書齋は何んなになつたね、重さん能く後の締をし

てお呉れだらうね」

「伽藍堂だい！、締りも糸瓜も要るもんか」

「ま、酷い事をするもんだねえ」と、身體を弓形にして、痞塞を壓迫して居る。

「姉さんは悟を開いた人ぢやないか。何が其んない悲しいんだい」

重吉は怫々として起上り、勝手元から鹽笊を持て來て、無闇に其處邊へ撒布すのである。

威勢よく玄關先へ撒布すると、丁度そこへ入つて來たのは二人が母の妙貞尼であつたが、黑い頭巾の眞白になるほど鹽を浴びて、

「重や、阿母さんはまだ鹽にしなくつても大丈夫だよ。尊貴になつて高價なものを、爾う粗末にしては堪りません」と、雪でも拂ふやうに袖を振つて、直に病人の枕頭へ來た。

「姉さん、阿母さんが來たよ」と、重吉は臺處へ飛で行くと、妙貞尼は頭巾を脱つて圓顱をくる／＼と撫た。

「今日は何うだね。」

「もう散々でございます」

「不可ないのねえ、お前が早く快癒ならないと、御不在がしやうがなからう」

「私やもう立派に悟つたのですわ、人間は金の家來なんだから、金に嫌忌はれたら、もう沈として死ぬのが一番です」

「おほゝゝ、馬鹿な事をお言ひでないよ、其んな氣だから病氣が癒らないのだわね」

「爾うでせうかねえ。でも私やお天道樣の次がお金、人間なんざお金の頤で驅使はれて居る、誠に卑な動物だと思ひますね」

「お前餘つぽど變だよ、しつかりしてお呉れよ、阿母さんはもう長い事はないのだから、何卒泣を見せてお呉れでないよ」

「…………」

「阿母さんもあるけれども、お前には夫より、大切な大宅さんといふ者がある、夫れが明日にもお歸り

がおらうといふのに、引被つて寢て居ては、折角復つた御機嫌が、また惡くなつて了ふよ。ねえ、自分勝手の能ないのが、人間のこの世間だから、婦人に生れた不肖には、先づ第一良人の事を主として考へなけりやならないぢやないか。ねえ、お仙』

『阿母さん了解ましたよ、私も種々と考へて居るんですけれどね――』

尙辯解を續けやうとする時、格子戸が急に開いて

『電報！』

重吉が飛で出で受取ると、今まで息を引取りさうであつた仙子は、勃如と起て其の電報を引奪つた、而て三人が額を合せて披いて見ると

トウブ　シカヘレヌ一ジ　サトヘ　ユケ　ヤマ

（五）

一週間ののちには、大宅山四郎の財產は、成規の如く公賣に附せられたが、其の落札人は、大宅と眞逆の交友たる某派前代議士であつた。

爾來山四郎の消息は杳として聞えなかつた、近日に日々の新聞を飾る新代議士の肖像中、紛れもなき矢川山四郎の寫眞を見たのである、夫には大宅の名はなく、何故の誤りであるか、矢川山四郎と記してあつた、

矢川は關西に有名な事業家であつて、某々貴顯とも姻戚の間であるが、其妾腹の娘に福代といふのがある、老矢川の寵愛は殆んど此一身に集つたが、何故にか非常に緣が遠い、實は遠いのではない、今年二十七の曉までに、哲士秀才を選んで、其聟として迎へたもの、既に十二人に上つて、時には年に二度までも合巹の禮を擧げた事があつたが、一人として三月と同棲したものがなく、彼に屬する數百萬の財產をも棄て、悉く鏡を破るのであつて。

一人娘に聟一ダースとは、獨り京童の諺言のみではなく、野心ある才子の間には、百日聟との名が盛んに唱へられて居るのであつたのに、第十三人目の聟君は遂に百日の關を通越して、今は福代の身を重からしめたとの說、盛に企業界を騷がして居る（完）

家庭教育の實感（其二）

醫學博士　大澤謙二

次は交際の事であるが、この交際といふ事の必要なるは今更ら云ふまでも無いのであるが、何うも我國では爾う容易行はれないといふものは、其原因は何處に在るかと云へば、チョッとした話が、人を招べば必ず御馳走しなければ爲らないといふ風習と、また招ばれて行く者は着飾つて行かなければならないと云ふ舊習があるから、

　自然双方で窮屈になる

それが我國に於て容易交際が行はれない一大原因では有るまいかと思ふ、往年私が獨逸に留學を致して居た時分に、如何か專門學研究の傍ら、彼方の家庭の事も檢べて見たいと思ふ所から、當り前の下宿屋では無く、今日東京などで云ふ素人下宿といふやうな、寡婦の家に下宿して、だん〳〵馴れるに從つて彼方の茶話會、此方の晩餐會などへ出席して見たが特別の場合を除く外、平常は極めて質素で單簡なもので、茶話會などに往來するにはワザ〳〵衣服を着換へるなどゝ云ふ事は無い、平生の儘で出掛けるのである、のみならず、茶話會であると云つても、別に改まつて御馳走するでも無く、また別段に蒸菓子や羊羹の類を出すといふ事も無く、然らば何が御馳走かといふと

　互ひに談話を交換する

それが何よりの御馳走である、招ばれて行つても爾うまた招れて來ても同樣といふ風で、それで交歡を盡す事が出來るのであるから、實に造作も無く互ひの間に交際が行はれるのである、併し爾う云つたからとて、敝れたる褞袍を着て狐裘を着けたる者に對して耻ぢざるは其れ由か、といふやうに、少しも態にも振りにも搆はないかといふに、決して爾ういふ譯では無い、所謂

　小洒灑とした平常衣

を着したまゝ往來するのである、尤も晩餐の會食に

行く時は、多少更めて往くのであるけれども、日本のやうに客座敷といふものを別にするといふやうな事は無く、矢張平常家族の者が會食する食堂へ、家族も客も一所になつて會食するのであるから、如何しても相互ひに心が打解けて行くのである、併し直ちに之を我國に移すといふ事は出來ないが、前に云ふが如く、屢次互ひに往來をして交際するには

第一に華美驕奢を避ける

といふ事は必要であらうと考へる、

社會の階級即ち上中下に由つて異うであらうが、等しく女の子を有つた親達は、之が教育の程度を如何にすべきやと云ふ事に就ては同感であらうと思ふその中の下層は且らく措き、まづ中流に位する者の家庭では

無論高等女學校だけの程度

は授けねばならぬのであるが、サテ其以上は如何爲るかといふに、

其者の獨立自營の爲に技藝教育

を施して置くのが好いと考へる、併し私の獨立といふ意味は、女子それ自身が男子を離れて

單獨生活をするといふ主意では無い

元來女子が男を離れて始めより單獨なる生活を爲るといふ事は、抑も天理に背いた仕打で、私は大不贊成である、如何しても女子は良人を持ち、而して家庭を形造らなければならぬのである、

多くの中には婿を迎へると云ふのもあるが、まづ十中の九分九厘まで女子は嫁ぐのであるが、萬一良人に死別れるといふやうな不幸に陷らぬとも限らない、縱ひ良人が亡なつても、遺產で樂に暮さるゝやうな家ばかりであれば結構だけれども、それは望むべくして獲べからざるのみならず、假りに其が有つたとしても、その遺產を賴らず、自分の腕に覺えのある技藝を以て、家を治め子女を立派に教育して行くといふやうにさせる爲に、何うしても何か一つの技藝教育を授けて置くのが肝要であると、實は末の女子に就て殊に感じたのである、

一體我國では男女共に結婚が早いが、歐米などでは大抵二十以上二十四五歳位でなければ結婚はしない、然るに我國で早いのは十七八遲くとも二十前後といふ風で最早二十二三になつても片附かないと、何か故障が有るのでは無いかなど、、人の疝氣を頭痛に疾む者のあるばかりでなく、嫁入り時代が遲れたと云つて心配する親達も偶々見聞きする事であるが、左まで心配するには及ばない、それに女子は第一に標緻が何うの斯うのと心配するが、女子が十分發育して艶々しい容色であると云はれるのは、まづ十八歳頃から二十二三歳まで、最早二十四五歳となつては止めで、その美いといふも醜いといふもホンの一つ切りのものであるから、爾ういふ事よ



りは將來の事を心掛けねばならぬのである、

改正の小學令六ヶ年の義務年限を終り、それより高等女學校に入つて、病氣その他の事故なくして、辛く滿十七歲で其所を卒業するのであるが、而して卒業するや否や直ちに嫁に行くのがある、それは迚も主婦としての十分の資格ある者とは認められない何故なれば、それは自分の娘で十分に經驗がある、まだ高等女學校を卒業した丈では、裁縫も滿足で無ければ、碌な手紙の文も綴れないのみならず、文字も甚だ如何はしいものである、ソコデ私は竊かに思ふやう、如何しても獨立自營の爲に一の技藝を授けたいと考へたのであるが、何分學校の科目が多い上に、前のやうな宿題などを課せらるゝから、誠に時間の餘りが少ないけれども、何か其者の嗜好に適した技藝を授けたいと思つて、少しは其間に行つては居るが親が斯ういふ風に心配すると、所謂奇貨居くべしであると其機に乘じて、家の經濟または搆造等にもお搆ひなくピヤノが欲しいと云ひ出したり、或はヴアイオリン若くは琴などを强請出すので、オルガンでも買つて與へると、當座は珍らしいに任せて搔き鳴らすが、少し程經つと少しも顧みない、それに關はらず、今度は誰某が茶の湯と生花と遣るから、自分も其が學びたいといふので、其方を行らして見るとこれも三日坊主といふやうな有樣で、ツマリ一種の好奇心に驅られて、その爲に親を苦しむる事があるから、餘程親達は其者の嗜好といふ事に就ては精細なる視察を下さねばならぬのである、

それから何れの技藝を問はず、少し其事が出來て來ると、何うも其が鼻の端に降下つてならぬ例へば、私は此頃斯ういふ歌を讀んだとか、その歌を何雜誌へ出したら天賞を獲たとか、或は何處其所でピヤノの獨奏を遣つたとかいふやうに、何うも自分で吹聽したがるのであるが、是等は本人自身が注意しないと、遂には人から嫌はるゝやうになる、

近頃某媒妁人から聞いた話だが、その者が知人某に嫁を世話しやうとした所が、先方の男の言分が面白い、その女子は高等の教育は受けて居りますまいなと問はれたので、媒妁人は失敗たとは思ひながらも、所謂媒妁口を利いて、後で暴露ては困ると思つたから、實は腋の下に汗を垂らして、おづ〳〵しながら、言はるゝ如くまだ高等の教育は受けない者で嘸かし不足ではありませうがと答へると、その知人は不滿足を訴ふると思ひの外、それでは貰ふ事にしやうと云つて、其縁談は纏つたとの事であるが、是を以ても略今日男が女に對する要求の程が分ると思ふ、何うも彼のハイカラ流とかいふものは概して歡迎せられない傾向となつて來たのである、

男は左程でも無いが、女子は兎角に容色好みをするのであるが、如何に傾城傾國の容色を有つて居るからと云つても前に云つた如く、實に僅の間のものである、先年私は暫らく向島の言問近邊に居を卜した事がある、初めの一年程といふものは、寢覺めから花が眺めらるゝといふ鹽梅で、非常に心嬉しく思つたのであるが、一年と經ち二年と過す中に、流石花の時には人を以て埋むるといふやうな向島でも、萬一風雨の時などは、吾妻橋を渡り、それから河堤に向つて歸るのは追々厭忌になつて、遂に外へ移轉したが、若い時の容色好みは是と同一である、また中には財産好みや學位望みを爲る者もあるやうだがそれも一つ考へものかと思ふ、諺に身代の釣合はぬは不縁の基などゝいふ事もあり、學位があつたからとて、必ず樂にのみ暮せるものでは無い、

ソコデ其男女の結婚を取極めるといふ事に就て、親達のみで子女に無斷で取極めるといふ事は宜くない、と云つて、私は所謂自由結婚を奬勵する者ではない或程度までは互に性格品性等を知らしむるの必要があらうと思ふ、それには彼のカルタ會などは適當であるが、今日の如く下宿屋の二階などで密々と行るのは宜しく無い、矢張昔のやうに各自の家庭内に於

て、父兄の監督の下に行るやうにするが宜い、芝居は下等の美術と謂はるゝだけに、餘り好ましからぬが、高等の美術と稱せらるゝ音樂の會などを催ほすれば、互ひに交際の栞ともなり、または男女をして相知らしむるの機會を與へる事が出來やうと思ふがそれに附けても現今の女子は、德育よりも學術の方が片落ちに進んで居るから、父兄たる者が監督を忽せにして、彼等をして自由に機會を得せしめてはならぬ、女子もまた女子自身に、女の貞操といふものは、縱ひ如何なる塲合に際會するとも

　死を以て之を守る

といふだけの決心を常に持つて居らねばならぬ、斯くまで女子の志想が堅固でさへあれば、如何なる誘惑に遇ふとても、それが爲に墮落するものでも無ければ、また不幸に陷るものでも無い、

土用ぼしに就て

前田八重子

土用干は入梅前にするのが好いといふ方もありますが、土用といへば入梅の後に來るものであるからマア入梅後に爲るものとして、併しそれは何れにしても關はないが、兎に角長持の底に鼠の巢を拵らはしたり、又は簞笥の抽出しに黴を生やしたりするなどは、云ふまでも無く家婦たるものゝ不注意と云はなければなりません、

　既に一通りの簞笥もあり、長持もあり、はた押入戸棚等があつて、倘ほ其上にも納むべき幾襲の衣服がある以上は、その衣類の仕舞方即ち貯藏の方法に就ては、一家の主婦たる者が委しく心得て置かねばならぬ責任の一つでございます、

　最早入梅も程なく開けて、おひ〳〵三伏の暑に向ひますから、此所にその貯藏の方法に關して、最も大切なる一二の事柄をお咄致しませう、

元來衣服といふものは年に二度づゝ乾すのが常例でありまして、即ちそれは

土用干と寒干

とであります、所が、土用干のみを爲さつて、寒乾は餘り見受けませんが、實は斯樣に二回乾さなければ不可ないのであります、また衣類は毎月兩三回位づゝは疊み直さなければならぬのでありますが、是も大抵は忘られて居るやうであります、尤も澤山に衣類を持つて居らるゝ方などは隨分面倒でありませうが、爾ういふ方には尙の事大切であります、尙ほ少し委しく其利害等を述べて見ませう、

何故衣類を土用干にするかといへば、暑中土用の風に當てゝ大氣に曝すのは、よく濕氣を除きて虫喰ひを防ぐからであります、けれども此土用干をしたからとて、決して其で滿足は出來ません、乃ち尙ほまた寒中の嚴冷なる氣に當て、充分に乾燥しなければ不可ない、これも矢張り土用干と同じく、濕氣と汚氣を取り除く効用があると共に、土用干に殘つた物や、又は其以後に發生した食衣虫までも皆悉く驅逐せらるゝからであります、それ故に少し位の手數を厭はないで、衣類等は必ず夏と冬との兩度に乾すやうになさるが宜い、

既に土用干と寒干まですれば、それで充分のやうであるが、まだそれでは安心が出來ないので、尙ほ遺憾なからしめやうと云ふには

一ケ月　兩三回

簞笥または長持の中から衣類を取り出して、

これを疊みなをさなければならぬ

のであります、この事は如何にも馬鹿氣たことのやうなれど、

之には二つの利益

があるので、一つは其をり〳〵の空氣を吸はせて簞笥の中の蒸氣を散ずるのと、なほ一つは疊み直すでとに、幾らか折目を違へて行くから、永く一所ばかり厭附るより起る所の、所謂折れ目、切れ目、又は仕舞ずれ等の心配を來すことが無いのでありますか

ら、曠衣等の爲には是非とも此面倒を見なければならないのであります、併し之を行るのには、好い天氣の日を擇はねば不可ません、もしも曇天とか雨天とかに爲れば、却つて濕氣を呼んで宜しくありません、殊に霧模樣の日は廢すが宜しい、これは木綿物でも絹物でも同じ事であります、萬一爾ういふ天氣に行つて濕氣を喚ぶと、それが黴の本となつて、身體の爲に能くないのみならず、遂には[illegible]が爲に食衣虫まで生ずるやうに爲るのであります、

衣服の類を藏つて置けば、何うしても折れ目の付く事は免れないのであるが、それと同時に折り切れといふ事がある、折角金をかけて着もしないで痛めるのも能でないから、之を防ぐには、其疊み直す時に、衣服の折り目〳〵に新らしく柔らな綿を入れて置きさへすれば、決して折り切れる憂は無いのであります、

衣類の方は先づ大抵以上のやうに手當さへすれば充分でありますが、簞笥や長持の方にも手當が肝腎で、簞笥の抽出を日に乾す事や、虫除に樟腦を入れて置く位は何方も御存じの事でありますが、さて其樟腦または麝香を餘り澤山に絹物の衣類中に入れて置くのは、損あればとて得は無いといふものは、其香氣の強いために衣服の地を損するからであります、それ故に絹物には丁子が最も適當であります、尤も少量の麝香なれば差支はありませんが着た時にプン〳〵香はせやうなど〻思つて澤山に入れると、後に取返しの附かない事が出來ます、そして樟腦はマア絕對に宜しくありませむ、併し木綿物には關はないと云ふもの〻、これも澤山は宜しくない、けれども毛織物や毛革の類は、少し樟腦の強い位が能いのであります、近來多く行はる〻ので、木綿物にも絹物にも

特効のあるといふのは、まづ松の青葉と取り、それを水一升に炭酸曹達四合を溶きたる鍋に入れて沸騰せしめ、よく煮えたちて泡立つ頃を見て火より下し、その冷えるを俟ちて適宜の器に移し、而して其を霧吹やうのものに平らに振りかけ置く方法にして、この仕方は一度に澤山のものを貯藏しおくには最も便利にして且つ利目があるのであります、斯く云はゞ、或は其が爲に衣類は松葉臭くなるであらうと心配なさるゝ方があるかも知れないが、それは炭酸曹達の爲に化學作用を起して惡い臭は去つて終ふのみならず、少しも地質を傷めるやうな心配は無いのでありますから、澤山に貯藏を爲さるゝ方々は速かに試して御覽なさい、それも一度に澤山の衣類に試つて見るのが氣遣はしければ、一二枚に施されて見るのも宜しい、



少し事が後先になりましたが、土用干でも寒干でも為さる丶時は、決して日に直下に當て丶干してはなりませぬ、

保津川の船

小川直子

私は先頃病氣で、醫者からも面會謝絶といふ事に申し聞けられましたので、徒然を慰めやうと存じて物の本などを繰り擴げて居りましたが、それにも倦厭て、見るとは無しに廣くも無い庭の面を打眺めると、折しも垣の藤の花が房々として其ゆかりの色を匂はせ、また傍へには松が枝の下にアケナス霧島が常盤の緑りに映りて、實に得も云はれぬ景色であるものから、坐ろに興を催ほして歌など詠み出でやうか、又は日記にても書かうかと考へて居ります折から、門口に鈴の音がして案内を乞ふ者がありますので、取次がせて見ますると、思ひもよらぬ昔の教子でありますから、イザとて座敷へ通すと、その人は只管に無沙汰を詫らる丶のであるが、私はそれよりも、一と眼其人の顔を眺めると、嬉し涙が先に堰き來るので、互に暫し無言で居りましたが、やがて其人は口を開かる丶やう、偖も師の君に對しては、思ひながらも久々音信を絶ちましたが、實は一たびお別れ申してより、嗚呼がましくも、豫て師の君より承はりし教に從ひ

　家のため將世のため

に盡して見たいと存じて、歸國の後ある事柄に手づ觸りしところ、初めの程は目上なる人の引立により、聊か盡して居りますと、固より自分より目上の方に頭の上らう筈もなく、また之を凌がうなどいふ了見は毫しも無いのでありますが、兎もすれば其に厭せらる丶やうな傾きがあるのみならず、その目上の方に知られたが為に、却つて傍輩の嫉み妬みを受けると云ふやうな譯で、遂に其所を辭して、下に得ずんば上に得られずといふ古人の教へもある事とて

今度は友達と一緒に行る事になつて、漸く事が緒に就たかと思ふと、思はぬ所から種々の障碍が出て來て、それも到頭壊れて了ふといふ次第で、思はず御無沙汰をいたしたのでありますが、それに就ても、何故に斯くまで浮世は儘ならぬので御座いませうかそれを思ひ是を考へますと、如何すれば善いのか至然と夫等を切脱ける途が分りませんので、實はこの心の煩悶を解いて願ひたいので、ワザ〳〵陸奥から出て來たのであると、涙ながらに申しますので、私はもうたゞ同情に堪へないばかりで無く、今も尚ほ我を師と慕うて來る其心根の優しさを愛でまして、左の一話を試みたのであります、

往年私がまだ京都に在職中の事でありましたがある日二三人のお友達を誘ひ、よく案内知りたる者を引具し、嵐山の下の渡月橋から、極手輕な小舟を傭ふて保津川を溯ることゝ致しました、この保津川は彼の名高い大井川の上流で、その源は丹波に發して京都の方に流れ來て、末は大井川桂川となるのであります、

さて纜を解いて棹して出ますると、その水の清らかなること、且は鱗のやうな漣漪の打寄する狀態、殊に丁度其頃は花も過ぎ去りて、兩岸に立ち列ぶ木々の青葉の淺緑りが流れを挾んで居るので、實に畫も及ばない風景でありますから、目に所謂送迎に遑なしといふ鹽梅で、孰れも歡び合つて居りましたがおひ〳〵溯るに從つて屏風巖、蓮巖などいふ五百引千曳の巖々が折重つて居るばかりでは無く、名もなき數々の巖が峰を噛んで居るので、河幅はだん〳〵に狭くなると共に、水は淺く瀬は急になり、剩へ兩岸より蔽へる大樹の爲に、川の面も小暗くなるばかりに、搗て加へて、舟が水底に輾り巖角に摩れる音を聞いては、餘り善い心地はしないで初めの喜びは何處へやらといふ有樣であるが、併し舟子は上手なもので、その巖角が噛合ふ狹い間の急湍奔流を、僅かに一本の水竿で扱つて易々と溯るのでありますがまづ其は商賣柄としても、その舟といふものを見る

と、薄いかよわい板で造られたもので、水に搖らるゝ毎にシナ〳〵するやうな舟であるから、實は乘つて居ながらも、それを知らなければ兎うでもありませんが、知つてからといふものは實に膽を冷すのでありますが、慣れとは云ひながら、如何に舟子が其を上手に繰るものから、私はそれを見て感心いたしまして、

山川のけはしき巖のかど〳〵に
さはらで上る船もありけり

と、一首を口吟んだのであります、丁度この世の中を渡るのは船る行るやうなもので我身は我身の勸めを勉めて人に便らずして、たとひ時としては巖角に摺れ、又は水底に船が觸るやうな事があらうとも、それは浮世の有樣で致し方も無いが、去りとて其に逆ひさへしなければ、かの保津川の船に於けるやうなもので、易々と世の風浪激波にも打沈めらるゝといふ事は無くて其源に達するのであるから、常に此心掛けが肝要であると言ひ聞かせ、尙ほ左の實例を話しました、

これは私が親炙したことで、今は無き數に入られた砥所敎子刀自の事でありますが、刀自の心底の堅い事は石金も比べものにはならない程の方であります、けれども其ものごしの優しき事は、實になよ竹のなよやかな、それに御標緻まで女らしき方でありました、

一體御所といふ處は、一種の御所風といふ空氣の充ちて居る所でございますけれども、この敎子刀自ばかりは、畏くも上は皇后陛下の愛し給ふのみならず、御傍輩同志にも慕ひ敬はれた方で、私なども色々と御親切を蒙つたので今も尙ほ忘れませんが、爾ういふ御仁でありますから、敢て公卿華族樣とか、又は大名華族樣とかいふお家から上つた方ではないが、あの通り位高く立身なされたので、誠にお羨しい事と存じます、併し羨むと申のましても、花みて花を羨むな、本なき枝に花は咲かぬとか誰やらが申された如く、私は刀自を羨み慕ふにつけても、

始終自己を省る

といふ事は忘れない樣に心掛けたのでございます、素より私は諂媚といふ事は大嫌ひでありますから、何所に勤めて居りました時でも、それを仕たことはありません、しかも刀自には毎時も御親切にして戴いたのでありますが、元來刀自は前にも申しますが如く、上には愛せられ下には慕はれたのでありますが、爾うかと云つて其爲に

態とらしき行や振舞

などを爲さるゝのではありません、其所が刀自の婦德を備へて居らるゝ所で私も此點には敬服いたして居ります、

一體物事といふものは、固より投げ遣では不可ませんが、餘り凝つてクヨ〳〵したり、又は其事に呑まれても不可ません、曾て私が是も京都の學校に在勤中の事でありましたが、ある同僚の方が、何でも卿は易々と爲さるが、如何して爾う出來ますかと云ふので、私は之に答へまするに、

極樂もしゆらの地獄もみな人の
心よりこそ浮び出でけれ

との一首を以て致しますると、その同僚の方は成程と言はれましたが、娯しいと思ふ極樂も、また辛いと感ずる修羅も地獄も、何も餘所に在るものでもないければ、又餘所から來るものでも無い、みな自分の心から生み出すものであれば、いつも此心を正しき方に導くは勿論、すべて物に逆はず、事に屈せずして進んで行けば、遂には目的の地に到達するばかりでは無く、この世の中を渡るにも易々行かれるものであると申し聞せましたら、その教子は大層に喜んで、來た時とは打つて異つて生々として辭し去りましたが、世には此教子と御同感の方、また是より後爾ういふ事に遇はるゝ方が無いとも限るまいと存じて、聊か婆心をお話いたしたいのでございます、

教子刀自の事は大抵世間の方は御存知であらうと思ひますけれども、或はよく其生立等を御承知ない方も無いとも限りませんから、因に掻摘んで其傳記

をお話いたしませう、

刀自は、文政八年に京都賀茂川の邊りなる錦織の里に生れたもので林といふのが本姓で、後に薩摩の藩士税所某に嫁せられてから其姓を冒したのでありますゝ刀自は年甫めて五歳の頃、ある日、父母は家の周圍に遊んで居る事と思ひの外、夜に入つても還つて來ませんので、兩親の心配は一方ならず、遂に人々を賴みて諸所方々捜しましたが、かいくれ分らないので、若もの事でも無ければ好いがと、各々安き心もなく、尙も八方へ手分けをして探しまして、北野の天滿宮へ行つた人達が、若やと思つて其所らを見廻ると、何か小さい黑い塊のやうなものが天滿宮の階前に在るのを見て、よく〳〵傍へ寄つて見ますと、豈計らんやで、いたいけなる僅か五歳の童女は階前に跪き、廻らぬ口にて最と懇ろに、額きながら、何うぞ天神樣、私が歌と手習と上手になるやうに導き給ひ護り給へと、一心不亂に祈願して居らるゝので、一同は且つ驚き且つ悅びて、取り敢へず家へ伴れで歸らうとするけれども、私は今夜此所で一晩お籠りをするのであると云つて何うしても歸らうとは仕なかつたが、辛くにして之を宥めて家に伴れ歸つたと云ふ事でありますが、實に栴檀は嫩葉より香ばしゝとは此事であらうかと存じます、まだ五歳の童女が、何うして歌の事など分るものでは無いがます、それから稍長じて八田知紀翁に就て學ばれたのでありますが、不仕合の事には十八歳にして父を喪はれ、二十歳にして京都在勤の薩摩藩士なる税所某に嫁せられ、間もなく一女子を擧げ、暫らくは圓滿平和なる家庭を形作つて居られたが、刀自が二十八歳の時に、柱と賴む良人は死の手に淩はれて了つたのであります、それさへあるに、尙ほ亡き良人の故鄕には義母 即.姑が居らるゝので、是に奉養しなければならぬといふので、住み馴れし京都を引拂ひ亡夫の遺紀念なる一女子を伴れて、遙々と薩摩の國へ下られたのであります、この砌りの事を書き記さ

れた「心づくし」といふものがありますが、それを見ると私は涙に掻暮るのでございます、

さて國へ下られてからも爾ういふ賢婦でありますので、朝夕よく姑に仕へまするものから、姑御も非常に怡んで居られますと、何時しか其才德兼備の事が藩主の耳に入つたので、召されて若殿の御養育係りの仰せを蒙りましたから、晝夜心のたけを盡して仕へて居りますと、不圖せし事より其若殿が逝くなられたので、刀自は自分の子を喪ひしより一層悲歎に沈まれて、一時は死出の山路の御供をもと思ひましたが、家には侚ほ年老ける姑御の在ることを思ひ返して暇を戴き、家に下りて十年一日の如く孝養いたして居られますると、前の左大臣公の御姫様が近衞家へ入輿遊ばさるゝ時、刀自は其御附人に撰ばれて參りますと、近衞家でも大層の御氣に入りで此所に仕へて居ります內、明治八年の秋、畏くも皇后陛下の內侍に召されたのであります、並々の者が初めより內侍の官に召さるゝなどゝいふ事は是まで無いので、刀自の如きは實に異例であります、それといふも刀自が才德兼備の致す所で、外の者の企て及ぶものではございません、

刀自は今紫式部と稱せられしが如く、學は和漢に通じ、手蹟もまた美事なものでございました、それのみならず、

刀自は實に程の好い方でありましたから、隨分世には無い事でも兎や角と浮名を立てられる者でありますが、刀自に限りましては、たゞの一回でも歿くならるゝまで、また歿くなられた後までも、決して爾ういふ事はございません、それでありますからよく上下の衆望を繫いだのでありますが、それもこれも刀自が才德といふ中にも、殊に婦德が優れて居たからでございます、



世の中は廻り持

岡部德三

われ〳〵の住む此地球は球形をして居て、何處まで行つても際涯といふものが無いやうに、凡て此世の中の事は廻り持ちに出來て居る、即ち我々生物が生活の有樣を見れば直ぐに分るのである、實によくめぐりめぐつて環のやうで、何處といつて境界がない、手近い話が、我は人の爲に生き、人は我の爲に死し、植物は吾人の爲に缺ぐべからざる食物となり吾人はまた彼等の爲に食物となつて居る、之が自然界に於ける自然の必要上の現象で、平たく云へば廻り持に出來て居るのである、

今靑葉茂れる庭の面に出でゝ、その植物や又は其周圍に於けるものに就て檢べて見やうならば、之は何處の庭先にも見受けらるゝ事で、樹木といはず草花といはず、よく無數の蚜蟲の集つて居るのを見らるゝであらう、この蚜蟲も素より自然界の内に生活して居る一つの動物で、しかも便利な事には雌蟲のみで蕃殖が出來るのであるから、こゝに一疋の成蟲が居ると、其より澤山な子が出來る、そして出來たものも矢張り母蟲と同じ性質なもので、暫時の間に生長して、其がまた盛んに子を產み出すが、是等無數の蟲共は何に依つて生活するかといふに、何れも植物の新葉や新らしき柔莖などを食して生命を保全して行くのであるが、これと同時に讀者の多くは、その蚜蟲の間を蟻が頻りに彼方此方と行つたり來たりして居るのを認めらるゝであらう、之は果して何をして居るのであるか、直ちに之に答へらるゝ方は尠なからうと思ふ、一體この蟻といふ蟲は諸嬢も知らるゝ通りで誠に感心な蟲で、常に蟻同志一つの社會をなして、其内に一疋の王樣があつて、その手下に或は食物を取り集める働き蟻、或は外敵を防ぐ處の兵卒蟻もあるといふやうに、恰も人類社會と同じく、各々分業して働いて居る、ゆゑに是等は働き蟻で、それがまた奈

何なる仕事を爲るかと云へば、是また人類が澤山な牛を飼ひ置き、其から乳を搾取つて呑むやうに、蟻もまた此蚜蟲の體中から一種の甘い汁の出るのを知つて居る、それは生れながらにして知つて居るので、そこで其を取る爲に此蚜蟲を保護しそして其汁を取るのである、それ故に此蚜蟲は毫も他の害を受くることなしに子孫を增して生活することが出來るのである、併し蚜蟲もそれで安心なもの丶やうなれど、此所にまた强敵が居る、それは彼のてんとう蟲といふ、豆粒大の丸い形をして、處々に赤い斑點のある蟲がある、この蟲は冬になると彼の玉子を植物の幹や枝に產みつけて置く、それが丁度蚜虫が生れて跋扈する時分になると、これも孵化して蚜虫を食物として生活するのである、まづ斯くの如く廻り持ちになる、若しも左樣で無かつたならば、折角我々が其香を愛し、其花を賞し、其果を食せん



と欲して植えた草木の類は、みな蚜虫の爲にさいなまれて了ふのであるが、天道人を殺さずでは無くして、このてんとう虫が蚜虫を征伐して呉れるので助かるのであるけれども、蟻の爲には氣の毒の至りである、

それから何れの家でも持餘すのは、食物にたかつて玉子を生み付けたり、糞をしたり、又は恐るべき病氣の媒介等をする蠅といふ虫である、この虫は支那の周茂叔といふ人にサンザ愚痴を溢させた程の奴で、實にウルサイ痴者である、實に吾人に取つて害をする惡いもので、實は居なくとも差支の無いのである、併し左樣また苦にしたものでもない、斯かる有害無益の奴は、平素吾人が蛇蝎よりも怖ぢ懼るゝところの、彼の

バクテリアに征討せらるゝ

のである、それは蠅の身體に此バクテリアが寄生して、何時とは無しに喰ひ殺すのである、して見れば此バクテリアといふものは、常に我々が有害である

と云つて嫌ひ避けるのであるが、斯うして見れば有害どころか、實に有用有益のものであると云はなければならぬのであるが、それにも拘はらず、消毒々々と口八ケ間敷いうて之を施行する時には、この有益なるバクテリアも我々の爲に生命を損傷せらるゝのである

人間でも動物でも、死んでしまへば其體は土の中へ入つて、腐つて後いろ〳〵のものに分解され、初め有機物であつたものも、次第に無機物となり、又は鑛物となるのである、

植物は鑛物を食ふ

といつたら、チヨツト吃驚する事のやうだが、決して左樣で無い、即ち植物は絶えず其細い根から鑛物質の溶けたものを吸ひ取つて成長して行くので、例へば、蘇鐵の幹に肥料として鐵の釘を挿して遣るのでも分かる、而して其植物は我々に取つて大切な物である事は今更めて云ふまでも無い、吾人の常に食するものは大凡植物性のものである、左すれば植

物たる物は人間の爲に幾らづゝか死んで行かなければならない、その死ぬものは即ち吾人の爲に食物を造ると異ならぬのである、

少し今度は方面を換へて吾人の身體を檢べて見ると、

吾人の身體の大部分は水

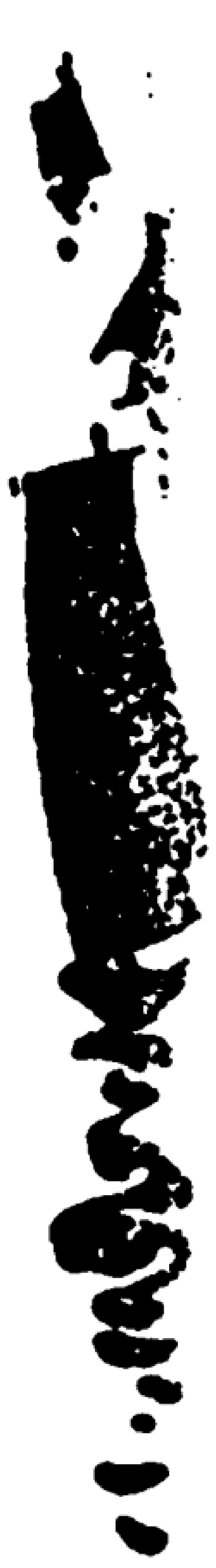
から出來て居ると云つて宜い、この水ほど我々人間の身體に取つて大切なものは無い、斯くまで大切なもので、瞬時たりとも離るゝ事が出來ないと云つて大事がる其水は、他の一方からは、吾人の身體を犯す恐るべき傳染病や流行病の病毒は、多く水から來ると云つて大層に怖はがる、植物の大切な葉を喰ひ盡し、吾人の食すべき菜や、其他種々の野菜に害を及ぼす青虫なるものは、サン〳〵害を仕盡し、大きくなるたけなつて、やがて蝶と變化する、かく生れ變つて何うするかといふに、恰も百花が紅紫を競ふ頃には、野といはず山といはず、翩々として浮れ遊び、あの花この花の蜜を吸つて歩く、その蜜を吸ふと同時に、花の雄蕋の花粉が足や羽について其が雌蕋の柱頭に運ばれ、而して其花の果實が結ばれるのである、

日々我々が翫味する所の果實や蔬菜類が、其子孫を絶やさないで何時までも我々の眼を怡ばしめ、且つ食欲を滿足させることの出來るのは

畢竟此蝶蛾類の御陰

と云はねばならぬ、されば青虫とて嫌ふべきものでは無い、寧ろ感謝の意を表せねばならぬ、

右の如く此自然界の現象を觀察研究して見ると、甲の悲みは乙の喜びとなり、丙の憂は丁の樂となり戊の益は己の害となるといふやうに、何から何まで此の世の中は廻り持ちに作られて無いものはない、



美貌は幸福の要素なり

牧田祐太郎

容貌を美しくするといふ事は、男女に關はらず必ず望むことで、殊に女子に於ては一層之を要求せらるゝのであるが、輙もすれば其要求せらるゝと同時に、之を施すの手段を見ると頗る反對で、却つて其が爲に美貌をも傷けるといふ奇異の現象があるのであるが、何故に左樣いふ結果に陷るのであらうか、多くを云ふまでもなく

美貌術の眞意を誤解

して居るのに基くのであると考へる、今日單に容貌を美しくすると云へば、まづ大抵は白粉を塗けるとか、臙脂を注すとか、頭髮を奇麗に結つて、流行の櫛や笄の類を戴くとか、又は立派な衣裳を被るとかいふことのみのやうに思はれて居る、成程それも容貌を美しくする所の一つの手段ではあるが、併し其を以て美貌術の第一義とする事は出來ない、尤も如何に地肌の黒い人でも、白粉を塗ければ其を隱すことが出來、鴉の巢のやうな頭をして居るよりは、サッパリと小奇麗に髮を結つて居る方が、人にも美しく見えるばかりで無く、自分とても心持が好いに相違ない、けれども其は普請でいへば繕ひ普請のやうなもので、少し堅い言葉で云へば人巧美といふので、人手を以つて天然の充りない所を繕ひ補ふに過ぎない、併し之も時には必要で決して捨つべきものではないが、成らうことなら今一足其奥へ踏み込んで、各自が天より受け得たる容貌を美しくする事を心掛けなければならぬのである、

全體これまでの美貌術は、餘り人巧美が勝過ぎた爲に、却つて其が爲に大切な天壽を縮めるやうな事があつたかと思はれる、才子多病といふのは男子の側であるが、佳人薄命といふのは專ら女子の方面に屬するので、その薄命の原因に多々あるとすれば、

慥かに餘り此人巧美を施したものは其原因の一に數へねばならぬと考へる、

單に粧飾ばかりで美貌が得らるゝものなれば、西洋の女子は優に我國の女子よりは數等上に出て居る尤も頭髪の部分のみは我邦の女子の方が優つて居るが、それは西洋の女子は常に帽子を用ゐるから、自然其結方や格好などの見るべきものも無ければ、また其事が發達しないのであらう、之に反して我邦女子の頭髪は頗る進歩したものであるから、見るからに幾多の趣味を感ずるが、顔面と來ては極めて其粧飾が幼稚である、別言すれば、日本女子の粧飾は故意とらしいが、西洋の女子は粧飾を以て自然に同化することを努むるので、之を約言すれば、我邦のものは人巧美で、彼方のものは自然美である、

見よ日本女子の粧飾は、白粉をコテ〳〵と塗つて居るから、著しく眼につく、斯やうな塩梅であるから、縱から見ても横から見ても氣品といふものが無いが、西洋の女子はチヨッと見ただけでは、粧飾を施して居るのか何うか、却々見分けが附かない、であるからして、或者は西洋の女子を見て、顔面には少しも粧飾を加へて居ないとまで云ふ、それ程までに自然の血色を失はぬやうに苦心して居るのである、

例へば、身體に何か故障のある時は、如何に嬉しさうな顔附をして居やうと思つても、思内にあれば色外に顯はるとやら、何となく物淋しい氣の無い顔をするが、之に反して何か心に嬉しく感ずることでもある時は、自づと嫣然した顔附をして居るから、それとなく傍の者にもさうと感ぜらるゝが如く、如何に粧飾の一點張で容貌を美にしやうとしても、その木地が惡くては折角の粧飾も引立たない、その木地とは如何なるものを指すかといふに

身體の健康と衞生の注意

とである、現時尚ほ勢力を占めつゝある我邦に於ける女子の美貌術は、幾んど其等を措いて顧みないやうに思はるゝ、といふは、概して世間一般の女子の

中には、多少新聞や雜誌其他物の本などの記事を讀んで、普通の白粉には鉛毒がある位の事は知つて居らる丶にも拘はらず、尚ほ且つ之を使用して居らるるのを見れば、如何に健康を害してまでも美貌を求めらる丶かといふ事が推測せらる丶のであるが、去迚生命は大切で無いかといふに、何うか長壽を保ちたいといふのが一般の希望であるやうに考へる、依つて今よりは衛生と兩立するものを擇ばなければならぬ、それには

第一に滋養に富める食物

を適當に取らねばならぬ、何うも我國の女子は少食を貴ぶ風がある、實際食べられないものなら據ろないが、腹を減らしてまでも少食を衒ふ風が行はる丶が、之は甚だ宜しくない、生理上の釣合が取れないから病氣に罹り易い、併し大食は固より宜しくないが、身體の要求するだけは適當に食べなければならない、そこで其滋養に富める食物とは、日常何れの家庭でも用うる米飯、鷄肉、鷄卵、魚類、野菜、果

實等を云ふので、是等の内米飯以下は毎日彼と此とを、取りかへ引き換へて適當に取らなければならぬ如何に美味しくて口當りが好いからと云つて、術ない程食べてはならぬ、まづ八分目を度とするが宜しい、斯く衛生に注意して健康を保護すると同時に、

第二に適度の運動

を爲なければ不可ない、如何に身體の爲になる滋養に富める食物を取つたからとて、少しも身體を動かさなければ自然に其食べた物が消化れないで、胃の腑の中で腐敗して了ふから、健康の爲どころではない、却つて身體を害することになるから、此に於て運動して消化を助ける事の必要が生ずるのである、右に次で身體を清潔にするとか、衣服の類を屡々洗濯するとか、毎夜一定の睡眠を得るやうにするとかいふ事柄も必要で、是等は並に身體上より容貌を美にする手段を説いたのであるが、まづ幾分は無いやうなもの丶、何方かといへば、寧ろ或點から見れば、一層それに適切なる關係を有して居るのは

所謂精神を靜かに平らかにする事で、之は食物などよりは直ちに影響を及ぼすのである、常に精神を靜かに平らに持つて居りさへすれば、少し位食物の滋養が乏しくとも差支の無いものであるが、之に反して常に精神に煩悶を懷き、不平を積み、憂苦を醸して居る時は、如何に事々物々滋養に富めるものを取つても、第一胃の腑が其影響を享けて消化力を減ずるから、從つて身體の全部に及ぼして來る、それ故に此精神を常に靜平に持するといふ事は、美觀術中の要素の要素と云はねばならぬ而して後、人爲を以て粧飾を加へるが好いが、それを施すにも、能く其品物が衞生を矛盾することは無いかといふ事を檢べて使用せられたいものである、

登山の愉快

多川源吾

一體我邦では昔から山に登るといふ事は、男子でさへも大層億劫に思つて居たので、富士山へ參詣に行くとか、その他大山御嶽若くは月山羽黑山日光山等へ登るなど丶云へば、丸で今日の洋行よりも大業なもので、云はゞ昔し武士が戰場へでも向ふ時に訣れの盃をするといふ工合に、親類緣者を呼び集めて宴を張り、翌朝は二里乃至三里五里までの遠方までも見送つて、御達者で、道中御大事にといふやうな挨拶で別れ、歸つて來れば、恰も死人が蘇生でもしたやうに大悦で、また〳〵無事歸宅の宴を設くるといふ風であつたから、男子でも容易には登山するといふ事は無かつた、殊に女子と來ては、たとひ富士山高野山に登るとしても、その或所までは登山を許さる丶が、それ以上は結界とか、女人禁制とか稱して、女子をして自由に頂上まで登ることを得せしめなかつた、それが遂には風を成して、女子は高山に登ることを得ざるもの、また登るべからざるものといふ默諾を爲さしむるに至つたのであるが、近數年以來は、大に女子の氣象も活潑になつて、チラホラ

登山する者も見えるやうに爲つたが、これは實に頼母しい事と思ふ、けれどもまだ多くの女子達の中には、迚も私し達は、といふやうな弱い音を稱へて居る方がある、畢竟それは登山の愉快と効用とを解せぬからであらうと考へる、

成程山へ登れば、内に坐つて居るやうな譯には行かない、それは大變に草臥れる、その骨の折るのが愉快でもあり、また効能があるのであるが、人によると過度に身體を使ふのは宜くないといふ、それは爾うである、あまり身體を使ひ過ぎては宜くないけれども、若しも良い衛生法を定めて、その衛生法に從つて運動したならば決して恐るゝに足らない、であるからして、婦人の中でも、殊に中流以上の生活をさるゝ所の婦人は山に登らるゝが宜い、といふのは、婦人は男子に比べると、何うしても骨を折つて仕事を爲る機會が乏しいのが一般の風である、ある生理學者の說にも同

一の仕事にばかり智慧を集めて一生懸命に仕たならば今度は其反對に、充分身體を休める事が必要であるといふが如く、斯ういふ場合には山に登るのが至極適當な運動法である、我々は今日斯く複雜した世の中に住んで居れば、些細な事にも氣を採む事が澤山にある、從つて過激に腦も使ふ、爾ういふ場合には是非とも十分に運動をして、精神即ち腦髓の過勞を癒すのが一番に良い、

一體世の中の婦人方が、兎角つまらない事に神經を使つて、物事に齷齪さるゝ僻の失せないのは、平素あまり身體を動かさないで、兎角家の内にばかり引込んで居らるゝ所爲であらうと思ふ、別言すれば生理的から來る所の一の病弊である、されば此際夏季の好時節を利用して高山へ登り、而して身體を十分に疲らし、且つは晴れ〴〵した天地の大景を眺めて精神を壯快にし、そして新鮮なる塵埃のない空氣を呼吸したならば、身心双方のために何れほどの功能があるか知れない、やがて之が平常腦髓ばかりを

過勞せしめた身體を回復せしめるのである、平たく云へば、一時世の中の紛紜を忘れて了つて、生理上身體の機能を一新するのである、それ故にこれほど壽命の藥になつて、生命の洗濯になる運動法はないのである、

登山の愉快と効能とは其ばかりでは無い、東西何れの國でも最も多くの婦人方の主なる職務は何であるかと云へば、まづ第一が家を治めるといふ事が主である、それゆゑに郊外へ出て十分に新らしい空氣を吸ふといふ事が極めて乏しい、極端に云へば少しも無い從つて生理學者や心理學者は、婦人の能力智力が男子に劣るのであると斷定して居る、これは強ち爾うでもあるまいが、何うも歷史的に考へても、婦人は男子よりも神經質で、感情の強いものが多い、そこで之を抑へるといふと語弊を免れないが、之を和らげ、之を弱めるの工夫は何うした



ものかと云へば、廣々とした郊外の地へ行つて、日がな一日太陽に曝されながら、四面に邪魔物のない處で新鮮な空氣を呼吸するのが宜い、何うしても現今のやうに、日一日と複雑に進む世の中では、漸次人間の神經が過敏になつて來るからして、斯ういふ世に處するには、猶更郊外に出る事が必要である、郊外も爾うであるが、殊に山の上にある空氣は誠に清潔で、まして高い處へ登るに從つて

空氣の壓力が尠なくなる

から、得も言はれない爽快な心持を感ずる、それから山上の空氣は、下界にある物と比較すると、一種の含有物を有つて居る、即ち其は人の顔面や其他皮膚に觸れると、清々して活々としたる感じを與へるもので、もしも皆樣が山へ登つて新鮮な空氣の中に休まると、今までの疲勞はそつくり忘れて了つて非常に愉快に感ずるのみならず、今まで世の中に居つて、生活の困難とか、職務上の難義とか、若くは交際場裏の掛引とか、日課の困苦とかいふやうな事は、すつかり脳から去つて了つて、一時に頓と忘れて了ふのである、恰も世の中のごた／＼を下界へすつぱり擲つて了つたやうな感じになつて、實に精神も身體も一變したやうに思はれる、しかも之は其時一時だけでは無く、將來に向つても非常に効用があるのである、例へば、我々が若しも非常の境遇に接して不快の念を起した時に、曾て登山して非常に困難した事を思ひ出せば、かゝる些細な事は何でも無い、比較になるものでは無いといふ氣になるから、自然と心持が快濶になつて來る、

男子は航海もすれば旅行もする、或は鑛山に入つて金掘もすれば、人跡なき處へ探險にも行くといふやうに、隨分いろ／＼な浮雲場處に出入するが、之に反して女子たるものは、概して

危險な處に身を措く

事が尠ない、それ故に男子に比して何うも勇氣が少ない、尤も女子といふものは、形態的人に依るやうに出來て居るからでもあらうが、併しながら今日の

如く世の中がだん〳〵進歩して來ると、矢張り女子にも相應な勇氣を要するのである、その勇氣を養成するには、登山が最も良い、この登山も始めは隨分困難なものであるが、その代り其困難を凌いで目的を達すると、今までは出來ないと思つて居た事でも容易に仕遂げる事が出來るやうになる、之は登山が他の事に向つて勇氣を與へる證據である、併し此勇氣といふ事は、所謂差出るといふやうな事をいふのでは無く、例へば、何か一つの己に與へられたる事柄が、少し自分の任には重いと思つても、よく耐忍して之を仕遂げるといふ氣象を勇氣といふのであるそれから今此所に云つた忍耐も此登山によつて養成せらるゝのである、といふのは、長い時間かゝつて山に登り、その間疲勞も見せず嬉々として歸るには必ず非常な忍耐がなければ出來ぬことである、

全體我々は何を見聞し或は作爲することでも、たとひ量の多少はあらうとも、必ず幸福を與へるものでなければならぬ、それは前に述べた忍耐と勇氣との報酬としてゝは無くして、天然の美に接して直ちに愉快を取る事が出來る、例へば、春の花、夏の靑葉、秋の月、冬の雪、或は巍然として中空を摩するやうな山の景色といふが如く、是等は別に我々が勇氣や忍耐を拂はなくとも、實に言語にも盡されぬ天然の美を觀賞する事が出來る、即ち登山は登山の後、擅に其天然の美を觀賞せらるゝのである、

以上は登山に由つて自分が過去數年間繰返して得たる愉快と效用との一斑を摘抄したものに過ぎないが、この他は自ら登山して味はれたならば、その實際の妙趣は私の下手な云ひ廻しのやうなもので無い事を曉らるゝであらう、

簡易なる石鹼製造法

廣瀬石鹼工場技師長　前田定次郎

石鹼は大體二通りに分れるので、即ち化粧用と洗濯とであるが、それらは一體如何なるものから製造

さるゝかといふに、その原料は苛性曹達といふ藥品を土臺として、之に牛蠟又は豚の脂肪に大豆か若くは椰子の實等を混和して造らるゝので、洗濯用のものは大抵夫丈であるが、化粧用になると其他に高貴なる香料を混入するのである、今その製法の概略を述べて見やうならば、まづ最初に以上列擧したる諸種の原料の中より苛性曹達を除きたる其他の原料を適度に混合したるものを鐵製の深い釜の中に投れて煮え立たせて、それらの溶解した頃を見計つて、徐々に苛性曹達の溶かしたものを加へ、櫂のやうなものを以て攪き拌せて煮ると出來るので、最初の中は丁度乳汁の樣であつて、尚ほ煮て居ると終には濃く煮詰つて來て、殆んで透通つてドロ〳〵した飴のやうな液體になる、之が即ち石鹸で、温い中はドロドロして居るけれども、之を木製の丈夫な、内面にブリキ又はトタンなどを張つた型の中に注ぎ込んで冷すと堅くなる、この堅くなつたものを、更に二三寸の厚さに切りたるものを、幅二三寸に切り、尚ほ之を小形に切りて日に乾かして硬くする、普通の洗濯石鹸ならば、別に細工も何も要らないから、之に勝手な形狀でも付けて直ぐに賣り出すのであるが、一歩進んだ石鹸、即ち手洗石鹸又は化粧石鹸となると右の品に色を着けたり、香料を加へたり、又種々な模樣を施し或は裝飾を加へるのである、

現今世界で石鹸製造業の盛んなのは先づ佛國と英國とで、殊に佛國のマルセール石鹸といつては藥用にまで供せらるゝものが出來るのである、我邦なども非常に之が製造業が隆運に向つて來て、單に内地用に供するばかりでなく、漸次外國へ向つて輸出せらるゝけれども、まだ迚も佛國や英國と肩を駢べるといふ段には至らぬのである、併し品物は隨分外國品に負けない物が製出せらるゝまでに發達して來たので、或一二品の如きは却つて外國品に勝るのみならず、寧ろ我國人の肌膚に適したものが行はれて居る、ツマリそれは我國で婦人が古來より化粧用に使ひ來つた米の糠の精油を應用したものである、併し夫等は專門家の事で、迚も素人の家庭で之が製造を試むるなどゝいふ事は出來ないから御預りとして、

此所に素人方の御家でチョット試して見やうといふには、何うも御飯を炊く釜を用うるといふ事も出來ず、普通の鍋では工合が惡いから、澤山の金の掛るものでは無いから、高さ三尺、直徑八寸程で底のある圓筒形のものを亞鉛で拵へて、更に一端に小さな方形の板の附いた攪拌用の棒、長さ凡そ四尺位のものを作り置き、まづ七輪か焜爐に火を起し、右の器を火の上に安置し、牛の脂肪百目、椰子の實油三十目乃至五十目とを中に投れ、よくその溶解したるを見計らひ、別に苛性曹達約三十目を一升乃至一升二三合の水に溶かしたるものを、一回に一合程づゝ攪拌しながら加へて行くのであるが、その加へる度に非常に泡が立つて溢れるやうになるが、それは團扇で煽げば忽ち消えて了ふ、けれども餘り火力が強くて泡の消えない時は、少量の水を注いでも好い、此時注意すべきは餘り火力を強くしてはならぬ、器の中のものがグラ〳〵と煮えたつやうでは不可ぬ、火加減が最も大切である、斯くして苛性曹達の溶液を混じ了つたならば、尙ほ引續いて熱して置いて、若しも焦げ臭いやうな一種の臭ひがしたならば、それは水が減つたのであるから、少量の水を加へて關はないのであるもの丶、その水を加へた後、攪拌棒で中のものを少し取り出し、それを板の上に落して直ぐに白く堅まりその周圍に脂肪分の出るやうな事がなく、舌の尖でチョット味はつて、僅かに刺戟性がある位なら結構なのであるが、もしも脂肪が圍りに露はれるやうでは、まだ熱しやうが少ないか、又は苛性曹達の量が不足して居るのである、それは何うしても實驗に依るの外は無いのであるが、一番素人に分り易いのは前にもチョット云つた如く、ドロ〳〵して透通つた飴のやうになるのを適度と心得て居れば宜い、既に液體が左様なつたならば、最早火氣を去つて宜しいのである、

その火氣を去りて暫らく措き、それが堅まらない内に型に注ぎ込み、もしも蓋をして急に冷えぬやう

に出來るならば、毛布のやうなもので覆ふて置くが宜い、そして一日位そのまゝにして置けば全く堅まるから、そこで之を取り出して適宜の大さに切り、天日に晒して乾かしたる後、之を紙などに包んで貯へおきて洗濯用に供する事が出來るのであるが、まづ之で市中に四五錢位で賣つて居る大きさのものが少なくとも十二三個は出來る、それで其資本は幾ら程掛るかといふに、原料の總價格が約二三十錢、之に薪炭の代が約三四錢と見積れば十分である、尚ほ其に其手間が四時間位掛るのであるが、其でも差引幾分の純益は慥かにある、

洗濯用の物の製法は右の如くであるが、それを化粧用のものとするには、その原料の調合は矢張前の通りで宜いが、化粧用になると、それらに尚ほ

濃厚なる食鹽水を加へる

のである、それは何が爲かといふに、それを加へ温度を與へて石鹼分を沈澱させ、この沈澱物を布にて漉し取り、少しく水を振りかけ、壓搾して水を去り更に再び之に少量の水を加へて溶かすやうにしたる後、各自の好む所に從つて香料を加へて型に入れるのであるが、之は俗に云ふ蒸製といふので、何うも香料の香氣が早く逃げて了ふが、製造者の側では損であるけれども、この香料を他の原料と混じて煮るときは、その石鹼を遣ひ畢るまで其香氣が留存して居るが、之は他の材料の爲に種々なる化學作用を起すために、その香料の配合が却々困難で、專門家でさへも頭腦を痛める事柄であるから、迚も素人方が慰み半分に行る時などに其樣な事をすれば、香料ばかりでも大した金が要るから、まづ其は試みない方が得策である、であるからして、東京でも左樣して製造する處は餘り多く無い、否、たつた一二軒位のもので、其他は何れも蒸製のみを行つて居る、まだ使用の途によりては種々の製法があるけれども、何も皆樣が專門家にならうといふのでは無いから是位として置いて、次回には何故石鹼を使へば肌膚が奇麗になり、衣服が清潔になるのであるかといふやうな事をお話しいたさう、

兒童と原人

千谷理吉

人間は猿から進化したものだとか、否、さうでは無いとかいふやうな八ケ間敷い議論はお預りとして今より幾千年幾萬年の昔かは分らないが、我等の祖先は、猿と同じく山野に起き伏し、木の實を食ひ、谷川の水を飲みて、他の動物と何の變りし所も無かつたものである事だけは爭ふべからざるものゝやうである、去とて私が其時分生れて居たといふ譯では無いから、急度左樣とは斷言が出來ないけれども、現今進歩したる學問の指し示す所に依れば、先づ左樣であるやうに考へらるゝと說いてある、而して其時代を稱して原人時代と名けられてあつて、この原人なるものは未だ智識の進まないものであるから、只食物を得て今日を生活するに過ぎないのであれば其心意の狀態は恰も今日の小兒の如く、殆んど智もなければ、道理を辨へない者であつた、それは兒童研究が次第に進歩するに從つてその精神狀態の同じき原人を研究することの必要を認めて、着々として研究を重ねて見ると、案外に不思議な面白い事實が發見せられたのである、

即ち小兒が日常の動作と、原人がその當時生活したりし狀態とは實に多くの點に於て相一致して居るのであるから、今より原人の生活狀態を追想してこれを現今兒童の動作に對比して靜かに視察するときは、何れの方面から行つてもこの兒童と原人とは一の連絡を有して、何等かの關係が其間に存するやうに思はれるので、例へば、兒童といふものは幼き時より人に抱かれたり、又は籠のやうなものに容れて搖らるる事を非常に悅ぶものであるが、之は恰も猿が樹の枝にぶら下つて、自ら身體を搖つて樂しむと同じやうで、吾人の祖先が其昔彼等と同じ生活を爲し來つた所の遺風が、依然として何萬年後の兒童に表はれ

て居るものゝやうに考へらるゝ、又兒童が多く木に登ることを好み、或は高い處に昇ることを好むものであるが、是また祖先の遺風で、曾て山野に生存する間は、時として他動物の侵撃に逢ふこともあるであらうし、又木の實を取る場合などには、何うしても木に攀ぢのぼるの必要は常に在つたに相違ないと推斷せらるゝのである、

また何でも兒童は食物でも貰ふと、直ちに之を己が寢床に持つて行かうとする性質がある、或は己が物を取つた時は、慌てゝ之を股の下に隱さうとする少し大きくなつて歩行の出來るやうになると、自分の手の届く限りは障子や襖などを破らうとする、之は子供のある家庭へ行くと直ぐ實驗が出來る、といふものは、卽ち原人が山野で食物を得た時に、他動物に掠奪されん事を恐れ、己が安全なりと信じて造りし巣の中へ持つて行つて食したものに相違ない、また股の下へ隱すのは、丁度猿が物を股の下へ隱すのと好く似て居る、障子や襖を破るのは何うかといふと、前にも云へる如く、吾人の祖先たる原人は、多く木の實を食して生活したのであるが、冬期になると其が無い、そこで止むを得ず昆蟲の類を取つて喰ふのであるけれども、其等は何れも冬期は地上に居ない、みな土中又は木の皮の間などへ蟄伏して居るのであるから、その木を折り皮を剝がして彼等を搜せし事の遺風が傳はつて居る事を證するので、之は或時期に於ける兒童が等しく其等の動作を爲すのでも分かる、

その道の學者が段々研究し調査せられた所によると、石器時代とか又は銅器時代とか、それから鐵器時代といふやうに進んだもので、それらの時代に於ける原人が生活に用ゐた器具の類を蒐めて見ると、それが現今兒童が弄ぶ玩具に似て居るものが多いので、是等も慥かに其間の或一部を説明して居るものであると思はれる、見易い話が、兒童達が友達同志戸外で遊ぶ時に所謂食事などを爲るに方りては、必ず自然物たる石とか、木片或は竹切などを用うる中

にも、別に誰が傍から敎ゆるでも無いが、平たき石を臼とし細長き石を杵として、更に或種類の植物を持ち來り、之を搗き碎きて食物を造る眞似をする、又石や木片などを集め、之を積みあげて家を造る遊戯をする、是等は何れも原人の生活狀態を表はして居るのであるが、更に是より一層兒童の遊戯の中で、原人または野蠻人と兒童とが接近して居る



事を認めらるゝのは、何處の兒童でも、一般に縦穴や横穴を掘ることを悦ぶ性質がある、これ即ち原人時代に、彼等が穴を掘つて住居とした事が思ひ當る、此所に之に就て一つの面白い事は、兒童等はまだ弱小のものであるから、迚も自分の入るやうな大きなものを掘ることは出來ないから、乃で適當なる自己の代理

者を捉へ來つて之に容れて悅ぶ、その代理者は昆蟲又は蛙の類で、この代理者こそ迷惑千萬だが據ろない、捕へられて幽閉せらるゝのである、

次に兒童の遊戯に鬼ごつことか、又は鬼遊びなどと云ふのがある、これは原人が、弱い者を捕へて己が奴隷となし、或は物を奪つた遺風が再現せられたのである、一體兒童といふものは

疾く走る事を好む

もので、之は單に生理上の自發運動ばかりではない即ち原人時代に於ける生存上に必要であつたのである、例へば、敵を避けるにも、食物を得るにも、又は己が配偶を得るにも、其他何につけ彼につけ疾く走るといふ事が必要であつたに相違ない、何故なれば、野蠻蒙昧の時代には

智を以て生活するといふ事が無い

から、自然何事に付けても身體を働かして生活を營んだのである、兒童が無心に疾く走ることを悅ぶのは、是等の本能が自然に發現したのである、

一般に兒童といふものは慘酷なもので、原人も亦然うであつたから、たとひ少しでも己の意に適はない時は、如何なるものも之を殺しても意としないのであるが、これは畢竟智力的の考へなくして、ホンの一時の感情によつて事を行ふからである、今も尙ほ野蠻人中には左樣いふ事が行はれて居る、我邦などでも、かの姨捨山の昔を思へば成程と合點が行であらう、

今度は方面を換へて、日常兒童が弄ぶ翫具に着色せらるゝ種々の色の中で、最も多く如何なる色が好かるゝかと云ふに、概して赤が第一で、之に次ぐものは綠とか黄色などであるが、何うして重に夫等の色のみを好くのであらうか、されば、是等の色は單に鮮明であるといふ事のみでなく、兒童それ自身が

一種の本能的に好む

のである、この道の學説によれば、それには深い原因があるので、凡て人に快樂を與ふるものは、其物

が其人に取りて生活上の必要より來ることが多い事は爭ふべからざる事實であるから、赤色は肉の色、綠は草木および野菜の色、黄色は彼等が住居とした土層の色で、是等は皆彼等に取りて一日瞬時も缺くべからざる物の色であるから、彼等が之等の色を悦んだのも尤もなる次第と云はなければならぬ、

以上のやうに對比して見ると、何うしても兒童と原人との間には何等かの連絡があるやうで、それは兎も角として、此く兩者が似通うた所があるのは奇妙では無いか、

繪畫に現はれたる動植物

磯島　傲

繪畫といふものは、云はゞ立體の物を平面に描くのであるが、それで何れも美なるものであるから、目に觸れて何となく心持の好いものである、固より大人と小人、專門家と素人とでは自ら見る所を異にするものであるが、爾ういふ六ケしい議論は兎も角として、この繪畫といふものは比較的世間に多い、そこで吾人の目に觸れる事も從つて屢次で、人しば〳〵すれば疎んせらるゝでは無くして、繪畫も屢次目に觸ると、何うも素人目でも完全といふものは少ないやうに考へらるゝ、尤も繪畫そのものが、單に美の一點に止まるものなればイザ知らず、苟も眞卽ち實物に似合せ、アヽこれは善く出來た、全で眞物のやうである、といふやうに、幾分其自然のまゝを寫すのが一要素であるとすれば、物を畫くに方りて十分の注意を拂はねばならぬ事と思はれる、

東洋畫と西洋畫とを比べると、東洋畫の中にも種々なる流派はあるが、概して東洋畫は寫生といふ事に重きを措かないやうである、例へば、吾人が始終目に觸るゝ所の人物でも、ひたすら手本を摸寫するとか、或は想像を描くのか知らないが、一體に頭部と幹軀と手足とが不釣合に出來て居るものが多い、殊に古代の支那人などに

なると、非常に顔面のみが大きくて、手足は極めて小さい、所謂壽老人的の人物が多い、爾うかと思へば、我朝の平安時代から鎌倉時代までの人物を描くときは、非常に顔が小さくて頬の部が膨んで居る、抑も動物の意志や觀念が宿つて居る所は何處かといへば、頭腦であるといふ事は今日學者の一般に是認する所で、それと同時に、頭腦の大いものは怜悧で小さいものは愚鈍であるといふ事も、比較上爭ふべからざる事實となつて居る、西洋人の頭部は大きいが、亞非利加の黑人は極小さい、日本でも今日英傑の士と稱せらるゝ人々の寫眞を見ると、大抵頭部が大きい、之に反して白痴や智慮に乏しい者になると頭の大きいものは尠ない、骨相學からいふと、人間の頭顔部は倒卵形が一番良いとしてある、成程美の點から云ふも倒卵形の方が見榮がある、所が、平安時代の女流姿や、鎌倉時代の武者繪を見ると、多くは頭が細くて顔が膨んで居て、所謂卵形をして居るから、折角の紫式部や和泉式部とかの肖像を畫いても、何れも愚物の相になつて居て、迚も富贍婉麗なる文詞を綴り出すといふ豪い人相でない、また男子の方で云へば、源の賴朝や大江の廣元の畫像なども爾うである、元來賴朝の頭の大きかつた事は歴史上有名であると共に、大江の廣元は當時の參謀長なり顧問なりであつたのであるから、定めし頭が大きかつたらうとは一般世間の推測である、しかも古來よりの繪畫は何れも痴鈍の相に作られて居る、

顔面に就ても眉毛、目、鼻、口、鬚等が不自然である、例へば、美人の畫を見ると、大概口が小さくて、時としては目よりも小さく描かれてある、けれども武者繪となると反對で、口の分量も廣がつて、殊に竹篦口などゝ來ては實に可笑い、これは勢の然らしむる所であらうが、今少し加減の出來ないものか、鼻の正面を描くといふ事は餘程困難で、西洋畫の如く光線に依らなければ巧く出來まい、目は眦が多少上つて居る、繪畫としては良いが、實際には見惡い、それから眉毛は双方の間が非常に離れ過ぎて

間が抜けて居る、鬚は近頃の畫には概ね鼻の下から生て居るが、昔の武者繪は八字形になつて居るが、鬚は決して八字形に生るものでは無くして、への字形に生るものである、

手足の恰好も往々不自然なものが見える、即ち何れも太くて短かい、世界の人類を見ると、西洋人は割合に手足がのび〳〵して居て見好いけれども、野蠻人になると、胴が長くて手足が短かく、或は手ばかり長過ぎたりして不格好なのが多い、東洋畫の胴や手足の不釣合なのは、是まで裸體畫を研究しなかつたのに基づくのであらうと思はれる、所が、彼の有名なる近世の畫伯葛飾北齋翁は、毎時も下畫に裸體を描いて、而して其に衣服を着せたのであるから、何れの釣合も良く出來て居る、それゆゑ翁の畫は今尙ほ歐米人に推賞せらるゝのである、人物に關するものは其位として、

次は獸類の畫を見ると、獅子の如きは大に實物と違つて居る、この獸は印度及び亞非利加の地方に棲で居るが、日本や支那や朝鮮には古から居らない、恐らくは支那人か印度の歸化僧あたりから聞いて描いたものを、更に日本人が眞似をしたのではあるまいか、さすれば間違も無理はない、もと〳〵實物を見た事は無いのだから、然るに今は動物園などに飼養して、大抵の人が見て居るから、これからは彫刻や織物や、塗物などは兎も角、繪畫の上に於ては、昔のやうな獅子の體形は、自然に消え失せるであらうと思ふ、また虎の畫は概して四足が太過ぎる、而して虎の眼は晝夜によつて、瞳孔の大さに違ひがあるのであるが、毫も夫等には注意されてない、虎の爪は猫と同じく、用ゐない時は皮肉の中へ匿しておつて、外部へ突出しては居らぬ、野猪の尾が實物と違つて居るのも往々見受ける、鹿の毛の斑點は、期節によつて變化するのであるに、何時の鹿でも變りは無い、黄鼬および兎なども、處と季節とによつて毛色に變化を來すのであるけれども、是また毫も意を注がれて無い

彼の猩々なるものは、世界の中でも僅かにスマトラとボルネオの二島にのみ產するので、昔は勿論、今日でも我邦に飼養せられてゐるのは少數であるから此畜は少ない、その少ない中に、動もすれば前腕の毛が逆生して居るのに無頓着なのがある、

鳥の中でよく畫かれるのは鶴が第一で、その鶴の中でも丹頂鶴が優美であるから、最も多く畫かれるが、丹頂とは讀んで字の如く、頭の頂が眞紅で、喉部と翼の一部に當る所の羽毛が眞黑で、殘りは一體に純白色である、で翼は長くして、飛ばない時は其眞黑な部分が尾の上を覆ふて居るから、全で尾としか思はれないのであるけれども、丹頂鶴の尾羽は眞白であるから、飛ぶ時に黑い羽は一本も見えない、所が、是までの繪を見ると、飛んで居る鶴の尾が眞黑に染められてゐる、之は大いなる間違ひと云はなければならぬ、論より證據動物園へ行つて翼を擴げた所を見るが宜い、鶴の次に喜ばれるのは孔雀である、此鳥の繪は雄の尾羽に價値がある、尾羽は全く粧飾であつて、雌を喜ばせるには、此長大にして美麗なる尾羽を傘の如くに開くので、其時は實に美麗である、所が、孔雀の美を描きながら、尾羽を擴げた繪畫に乏しいのは遺憾である、雉の雄は多くは頭部の毛を逆立て、又頭冠も大きくしてゐるが、かゝる形は餘程物に激した時である。常に悠々として地上又は樹上にある時は、決して頭毛も逆立てず、また頭冠も縮小して居るのである、

次に魚類でよく描かれるのは鯉で、この鯉の生きて居る時は始終眼を動かして居て、

決して眞直に置く事は無い

然るに畫かれたる鯉は、何れも正視して居るやうに描かれてある、動物は此位で切り上げて、

次は植物の方面を少し漁つて見やう、繪畫の習ひはじめは、習字の最初に永字を敎ふると同じく、春蘭を習はしむるとの事であるが、畫に描いた春蘭は五瓣になつて居るけれども、實物は瓣が三片、蕚が三片といふ工合に成つて居る、一體單子葉植物の花

は百合でも花菖蒲でもみな三の數から成つて居る

然るに同じ單子葉植物の春蘭ばかりが五枚からなつて居るのは間違ひである、それから春蘭の葉は、勢よく、スッ〳〵と伸長して居るやうに描くが、之も異ふ梅の畫となると、花は正面のものばかりで、裏面を見せたものは殆んど無い、梅の花は元來己がじゝ右に左に前に後に咲いて居るので、決して一方にのみ向いては居ない、これは美としての畫であるから仕方が無いとしても、今少し花や葉の裏面を見せても差支なからうと思ふ、竹の畫はまた節が高過ぎる、節の高いのは瘦地に生るので、甚だ値のないのである、それから樹木の畫は如何かといふと、幹は勿論、梢まで判然と現はれて居るが、樹木の幹は半ば以上になると、大抵は葉に覆はれて見えないのであるが、併し枯木とあれば、何も申し分はない、

尙ほ斯樣に穴捜しをすると數限りもなく、餘程私の手帖に殘つて居るのもあるが、それはまた他日折を得て話す事として、それに餘り掘繰り出すと專門家から御叱りを蒙るか知れないから、まづ此所らで止めて置く事とするが、何に致せ繪畫を以て生命とせらるゝ方は勿論、たとひ生命としないまでも、美術の一端として之を愛翫せらるゝ方は、今少し實用の學問に當つて貰ひたい、また世間一般の方、殊に女子方などは爾ういふ所に注意を拂はれて、徒らに虛飾を貴ばれないやうに希ふのである、

結婚と職業

加瀨善七

昔時は女子が結婚するに就て餘り職業好みを爲なかつたものであるが、當今はスッカリ都鄙ともに其樣子が變つて了つて、財產に嫁がなければ地位に趨り、學位に眩惑しなければ權勢に赴くといふやうな風になつて來たが、それも時勢の然らしむる所であるとしても、一體歐米の女子が男子に對して、殆ん

ど同等の地位に立ち、それと同時に勢力を社會に有する所以は何が爲かといふに、一言にして之を覆へば、

　財産の力であつて

學問や職業は之が次に置かるゝのである、されば如何に才色兼備の佳人麗嬢でも、若しも不幸にして此財産が無いならば、誰一人として振り回つて見る者が無い、といふのが彼方の風習である、故に歐米の人は常に戀愛といふ事を口にするのみならず、戀愛といふものは神聖なるもので、その神聖なる戀愛により初めて異性の婚を結ぶのであると、大部其言分は立派であるが、實際今日の事情は左樣で無い、全然黄金より成立つのである、成程黄金は素より貴ぶべきではあるが、しかも其極人倫の大道たる結婚の目的さへも、單に其財産を獲るの一點に歸せしむるに至りては、うたゝ嘆息に堪へぬ次第である、

　されば歐米に未婚の女子が多いのは止むを得ないので、實は氣の毒の至りである、それよりも可笑な

事は、彼國に於ける男子の既婚者は、貴女の交際社會に於て甚だ勢力が無い所より、從つて晩婚の風をなした一事である、一度歐米の地を踏んだ者は知つて居らうが、凡て彼方では交際場裏に入る時には、必ずまづ既婚か未婚かと其別を問はれるのが通例で苟くも既婚者であると答へたならば、一二の特例を除くの外は處女に紹介さるゝといふ事はない、之に反して未婚者なれば、直ちに多くの處女に紹介せられて、盛んに持て囃さるゝといふ風で、結婚そのものは交際場裏に於ける勢力を失墜する結果を招ぐのであるから、所謂ハイカラ者流は、其社會に持て囃さるゝのを唯一の光榮とし、結婚の爲に此光榮を犧牲に供するに忍びないのであらう、併しながら之はホンの一小部分に過ぎないので、其主なる原因は財産の有ると無いとに關する事は明白なる事實である故に財産の無い女子は、勢ひ職業を求めて獨立自營の途を講じなければならぬ事となるのである、

　我國の女子は大抵十七八歳になれば、殆んど結婚

しない者は無い位で、勿論例外もあるが、最早二十歳を超ゆれば、後れたといつて親達が心配する、故に概して其年輩になれば母と呼ばれて、子供の一人か二人、多きは二人乃至三人もあるといふのが普通で、偶々獨身者があれば、それは寡婦か何かであつて、まづ目下の所、上下を通じて未婚婦人は少ないのである、然るに彼方へ行つて見ると、五六十歳の令嬢は決して珍らしくないので、七八十歳



の白髪だらけの婆さんが、ミス某と云つて居る、是等の未婚者の中には、相當の學問もあり、職業に從事して居る者も少なくないのであるが、しかも一生涯配偶者を得ないで終るのである、要するに相當の學問もあり、相當の職業に從事して居ても、唯一つの財産が無ければ結婚するといふ事は出來ないのである、また之を男子の方面から見れ

ば、學問や職業は妻とするだけの資格はあるが、惜いかな財產の點が缺げて居るといふので娶ることをしない、それに左樣いふ女子になると、その女子の方でも多少注文がある、その注文する所の許へ嫁くには財產が無い、何れにしても財產が先に立つといふ鹽梅であるから、普通の女子などは、寧ろ最初から結婚を斷念して居る有樣であるから、獨立自營の女子の多いのも無理からぬ自然の數である、

斯くの如き狀態であるから、彼地に於ては自から女子の職業も發達して、種々の方面に女子の領分が擴まつて行く、之に就て珍話がある、尤も之は既婚の者であるが、實は妻君の方が御亭主より少し學力があつたのであるけれども、所謂財產が乏しかつたので、目出度結婚はしたもの丶、如何にも今日に追はる丶ので、妻君は八方へ傳手を手依つて勤め口を搜して貰ひ、辛うじて其職に有附いたは宜いが、それと同時に其良人は是迄の職を失つたので、段々その樣子を探つて見ると、良人は其妻女の爲に自己の

職を奪はれたのであると云ふ事が分つたが、併し今となつては致し方が無いとしても、その俸給の額が減じた事のみは取り返しが附かなかつたといふ、これは決して揑造の說では無い……數年前英國龍動にあつた事實である、

我邦に於ても先年電話交換手として女子を用ゐられし以來、今は殆んど交換手は女子の獨占となつたのであるが、此の外電報の調査、爲替貯金の計算掛、鐵道の出札掛、若くは銀行會社等で女子を採用してからといふものは、ます／＼其範圍が擴まると同時に社會からも

女子の地位を認められて來た

のであるが、何分我國の女子は、前にも云へるが如く、最早十七八歲になるとお嫁に行くのが通例であるから、歐米の女子のやうに、獨立して永く其業に從事するといふものが少ない、そして結婚後職業に從事するといふ者は實に稀である、

歐洲の某國では、公務の爲に女子の結婚を禁じて

ある國さへもあるが、それは例外として、一體彼方では結婚しても概して生活が簡易であつて、我邦のやうに、一家を有ちたる以上は、之が主婦たる者は、裁縫は申すに及ばず、滌ぎ洗濯の事から、さては掃除、煑炊き、應接までしなければならぬといふのが普通であるが、彼方では相當な身分のある人でも、家は概して部屋借で、裁縫は仕立屋へ、洗濯物は洗濯屋へ賴み　食事は料理屋で一家の者が食するといふ風であるから、割合に家事の煩累が無いから、隨つて結婚してからでも十分職業に從事する餘裕がある、此に只一つ困る事には出産であるが、これとても姙娠期の幾部分と、出産の前後に多少の時日を費すに過ぎない、そこで小兒が產れれば、養育は乳母を傭ふなり、又は他に預けるといふのが風習であるから、迚も我國の女子とは比べものにならない、それも其筈、彼方では我國と異つて生活の程度及び生活の狀態等が女子をして然らしむるので、我國の或一部分に於ても昔から其は實現せられて居る、

要するに我邦の女子は、終生未婚を以て畢るやうな事は、まづ今日の處では無い、故に強て職業を求めて獨立しなければならぬ境遇に在るものでは無いから、歐米の其に比べては幸福の位地にあるものと云はなければならぬが、早晩社會の風潮は一ト所に止まるものでは無く、時々刻々に推し寄せ來つて我等を生存競爭の渦波の中に捲き込む所では無い、最早今日は晝夜の別なく推し寄せ來つて一步〱其中に捲き込みつゝあるのであるから、女子たる者は結婚するに方りて、多少先方の職業が、從來自己が從事し來りし職業と相關連するや否といふ位の事は擇ぶも好いが、餘り掛け離れたるものなどは望まない方が得策である、何故かといふに、自己に其丈の實力が無いのに其望む所が大きいと、遂には先方の威力に壓せられて、終生を不幸の中に暮さねばならぬ事となる　故に結婚に先ちて一定の職業に從事して婚資を蓄積するのが急務である、

社交の機密

小原保

社會が進歩するに從つて交際といふことが必要になる。交際は男子に限られたるもので無い。殊に歐米諸國では婦人が社交の中心となつて居る位である故に教育ある婦人は社交の方法を心得て居らなければならない。社交の秘訣とか眞髓とか言へば如何にも深い原理でも有りさうだけれども、何もさまで六ケ敷いことでは無い。常住の些細な事物に注意して人に接して悪感を生ぜしめぬ、相互愉快活潑なる社會生活を營むといふ事に歸着する。我國でも今日の交際は維新前とは一變して漸次歐米の風習が混入して來たのみならず或方面は全然歐風の交際をして居る。然るに之に從ふ人悉く彼の風習の意味を知つて居るかといふに、さうではない無意味に盲從して居る人が多いやうだ。而して敢て其意味を知らうともしない。此點に於て流石は米國少女である。

彼等は日常有勝ちなる些々たる小事にも小心翼々として其研究に努めて倦むことを知らない。故に彼等は常に渇仰私淑する老練なる婦人の周圍に蝟集して其說に傾聽する。老練家は亦是等の說明を爲すを以て義務として居る。左に斯界の花形キングスランド夫人が與へたる解釋を掲げて見やうと思ふ。

　肉叉及匙は如何なる順序に使用すべきか。

通例饗應に際しては萬事隣席の人に從ふといふのが方式ですが。先づ食碟より一番遠く備へられたのから漸次近きに及ぼすといふのが慣例となつて居ります。ですから近手に在るのを最後に御使ひなさい。

　夜中男子の見送りは如何に謝すべきか。

お世辭的でなくしかも輕快に謝するのです。深更ならば男子を招入するの要がありません。近い内にいらしつて下さいといつて別れるのです。然し兩親や保護者に信用ある人か、或は日常親密なる男子以外の見送りは申出されても謝絶するのが適當です。

二婦人を伴ひて電車に乗りたる男子は如何に

着席すべきか

男子は二人の中央に座すべきでは有りません。婦人を相隣つて坐せしむるのです。婦人は之を好むからであります。

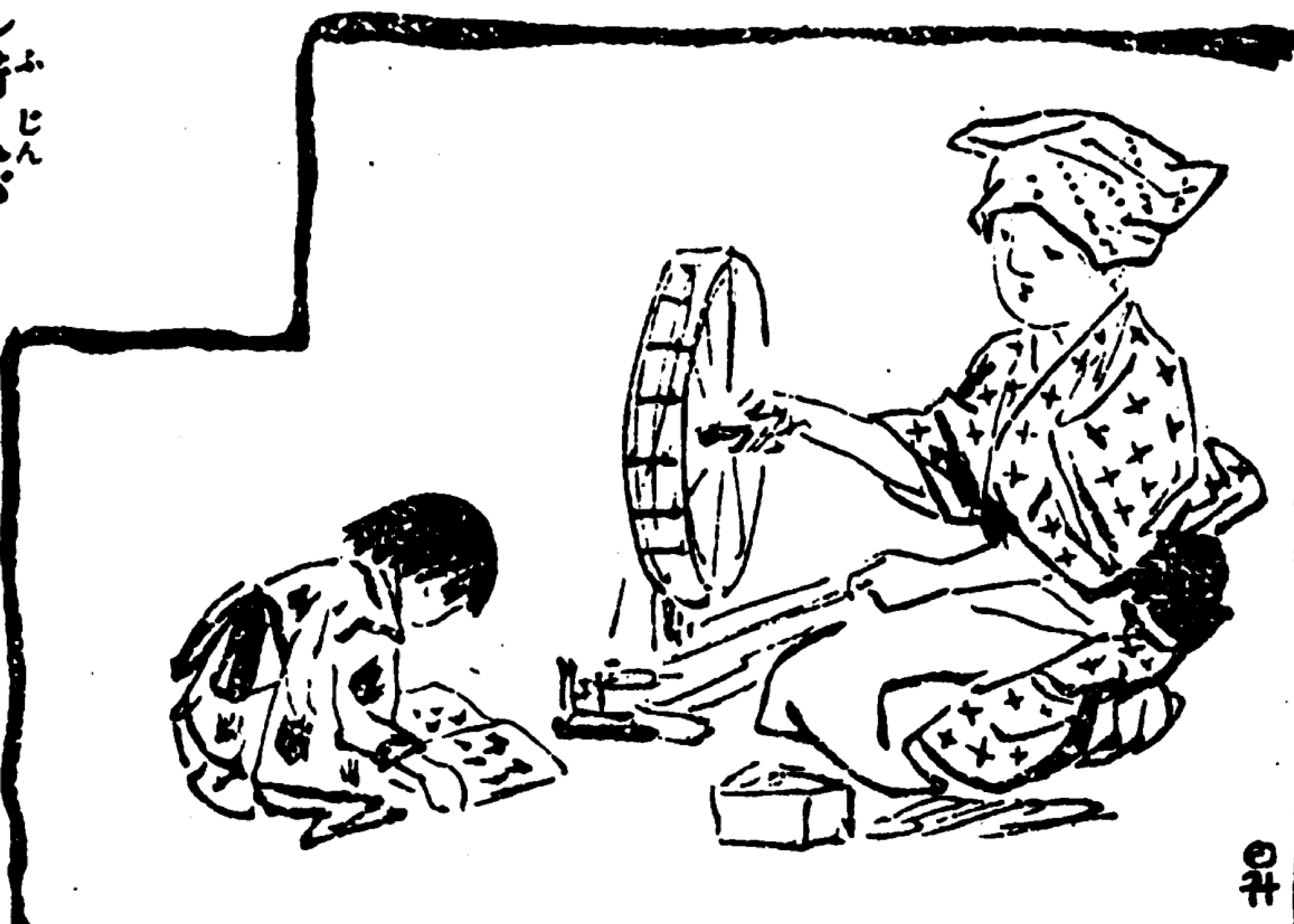
男子が二婦人を伴つて街路散歩の際は

男子は人道の外側に近く位置するのです。昔は街路上動物を馳驅したのみならず。車場の往來等で人道の外側の方は比較的危險が多き故男子は此方に立つて婦人を保護するといふ意味です。婦人を人家又は家壁に近く立たしむる風習は今日でも行はれる事で。兩婦人の間に男子が立つてサンドウィッチ的に散歩すると、田舍風だと笑はれます。

男女騎行の際は、

男子は婦人の右側を進行するのです。然し婦人が馬脊に跨騎した時は別に規定も有りません。

新夫が新婦を接吻するは禁物です。



式場で接吻をしたのは古式です。今日では式場で新婦に潮紅せしむるは禮儀で無いとしてあります

愛情の表示に接吻するのは、私事で儀式ではありません

名刺の一端を折るは如何なる意味を有するか。

名刺の右上端を折る風習は近來あまり見受けません一體端を折ることは別段深い意味や用事が無い 訪問であるといふ表示であつて何の端を折つても同意味です。訪問の返禮などの際もやります

男子の長座は如何に謝絶すべきか、

若い令孃達の最も苦しむのは男客の長座です。斯

麽な時にうちつけに言ふのは氣のきいたとでは有りません。なる可く話の種の盡きるやうに仕向けて客の談話に身が入らぬやうするが第一です。夜などだつたなら。お蔭さまで大へん面白くゝらせましたが父が厳格で九時（或は十時とか便宜の時間）にて戸締りをするのが規定ですから。お氣の毒ですがお近いうちに又いらしつて下さいと懇願すべきものです。

男子に先ちて戸外に出る時は、

後から人が來る其面前で扉を閉めるといふは無禮なことです無意識を裝つて開きたるまゝにして決して顧みてはなりません。

滯留客に來客ありたる場合は、

直ちに退座するのは善良なる風習ではありません兩人の間に特別の用件の有無に係らず十分乃至十五分同座して後退座の申譯をして他の室に行くのです佛國の諺にも「吾等が友の友は亦吾等が友なり」といふことがありますが、極めて懇切に接待せねばなりません。

舞踏の相手が未知の男子なる時は、

男子の方から名乘るのですが、その人がこれを忘れて居ることがあります。其麽時は若し其人が溫厚な紳士で相手の申込を嘉納するならば淑かに其姓名を尋ねても差支ありません。

舞踏を知らずして舞踏會に招待せられし時は

謝絶するの要は有りません。但し豫め主婦まで其由を報じて置けばよいのです。

舞踏を勸められたる時は、

有難うございますといつて謝すのです。衷心から出たやうな調子でいふのですが、感激したやうにいつてはいけません。

饗宴の先導者は、

茶菓の饗應などお手輕の時は主婦が先導するのですが。本式饗宴になると男主人が來賓の先導をして夫人は其日の正賓を伴つて之に從ふのが例です。

饗宴を受けて後如何に退出すべきか、

七時又は七時前の御馳走だつたなら十時或は十時

半に辭するのが通例としてをります。八時後に食卓に就くやうだつたら十時半前に退出するのは失禮です。然し十一時過ぎになつても辭し歸らぬのはいけません。

貧困なる男子と婚約したる時の指輪は、

これは程度問題でありますが大概平打金指輪に何か文句を彫刻するか又は Mizpah. と凹刻にするのです。此字の意味は「神は相離れても共に見そなはす」といふことであります。

セレネードを奏せられし娘は、

古代は窓口を開いて熱情を以て謝したものですが今日では婦人が奏樂者の姓名を知つて居れば郵便にて謝辭を述べます。因に、セレネードとは若い男子が婦人の心情を慰め且つ其歡心を得るため夜間婦人の住宅の近傍に立つて奏樂することであります。元來は自作の短詩を朗咏したのださうです。

良人同件の宿りには。

必ずしも良人と同様に記名する要はありません。良人が記名其他の要件を終つてボーイが案内に來るまで應接間で待つて居る方がよいのです。

新婚披露に招かれたる時先づ挨拶すべきは、

新婚の家ならば勿論新婦でありませう。然し新婚は全く不知の人であり、又紹介の勞を取る人の家であれば其家の主婦に最初に挨拶するのが順當であります。

夫人午后家居の場合は、

襟の高い化粧着を着るのです。若し一週一日丈け午后家居するやうな人ならば友人を招いて茶菓を製して談笑するのです。それに使用する室は夫人自身の室であります。

訥る癖ある時は如何にするか、

其人によつて訥る音或は詞が一定してゐるものでありますゆゑ其音又は詞を言ふ前には肺に十分空氣を充滿さすことが必要です。さうすれば幾分か防ぐことが出來ます。然し出來るなら頓智で以て其音或は詞を使用せぬやうにするのがよいやうです。

良人の困戚に不幸のありたる時は、良人と同様に喪に服さなければなりません。法律の前では夫婦は同一であります又世間でもさう認めて居ります。然し實際は三ヶ月毎に輕めて行く風もあれば、又良人が喪に服する間單に喪章のみ附けて居る夫人も見受けるやうであります。

動物の結婚

深井龍蛹

結婚は人生の要件で、何人もなすべきものだとは云ふもの丶、然らば何故に人は結婚せねばならぬのである乎と云ふ疑問に對しては、滿足に答をなし得る者は少いかも知れぬ、過般一寸外字雜誌を見たのに、佛國(なりしか)の小學校で、女生徒に人は何依結婚するのです乎と云ふ問題を出したら、その生徒の半數以上は、その理由が書けなくつて、殘餘の生徒は兩親と離れて暮したいからとか、家を持ちたいからとか、又は新婚旅行がしたいからとか、各自思ひ〳〵の事を書いたと云ふのである、今茲にその理由の何たるべきを知らない、云はばしたいからすると云ふ生徒が半數以上もゐると云ふのは、頗る面白い事實を吾人に敎へてゐるもので、僞なき人間本能の叫である、之は外國ばかりではなく、我が國でも必ず類似の結果を得るだらうと信ずる、又少年少女ばかりではなく立派の男でもまづ五十歩百歩の答案であらうかと思ふ、その主なる答は人生を幸福にするとか子孫を續かせるためとか、先祖を祭るためとか、種々あらう、又中には自然界に男女兩性がある以上は、その理由などを云々すべき必要がないではないかと云はる丶方もあらん、然れば今茲に動物の結婚に就てお話すると云ふとも、決してそんなに立ち至つた奧深いことを論ずるのではなく、唯動物の社會に於ける通有の法則に就てお話するに過ぎぬ、そのお話をする以前に結婚とは何ぞと云ふ問に答へる必要があると思ふ。

勿論結婚なるものゝ定義は、國と時代とで種々であるが、我が國の民法上の婚姻なる語は、二個の意義に解釋せられてゐる、其一は夫婦の關係を指稱するもので、其二は夫婦關係を創設する行爲を指稱するものである、換言すれば異性間の結合で、定まつた男女間の生存結合で法律の公認したものでなくてはならぬ、之はローマ時代でも、今日でも變らない法則であるが、猶今日の文明國では以上の外一男一女の結合である事、及び男女双方の承諾に出た事等の二條件を具備してゐる、此の定義を以てすれば、人間以下の動物には到底結婚なるものは成立しない譯である、先年ボストンで雌雄の老



猿が一牧師によつて結婚の登錄を得たと云ふ奇聞もあつたが、夫は除外例であつた、一般的のものではない、然らば法律なき動物社會の結婚とは何乎、獨乙のヴントが人間及び動物の心理を論じた著書で各個的愛情が性欲衝動を以て結合する時に、動物の結婚は起るので、各個の愛好に基いたのが明で、そして性欲的官能を滿足せしむるために、男と女との結合が永久である場合にのみ結婚と云ふことができると云ふてゐる、即ち動物界に於ける結婚なるものは(一)愛情に起源する(二)生活異性の(三)結合が永久なる等の三條件で成立するもので、ヴントとの定義を以て見れば、そ

の目的は性欲的官能の滿足にあるのである、かのナポレオン一世が結婚は必ず戀の結論なりと云はれたのは、實に金言と云はねばならぬ、然らば更に一歩をすゝめて、戀愛とは何ぞと云ふ問題になる、これが抑も大問題であつて、昔から哲人の苦勞した處なのである、併し夫等に就て議論するのは、自分の目的でないから云はない、唯近頃獨乙の科學者が、殊更に唯物的機械的說明に熱中してゐると云ふ事實をお話して置く、

動物が愛即ち性欲で結婚する通り、人類とてもその根本は矢張是等である、唯人間は理性が發達してゐるので、種々の精神分子が加はる、從つて必ずしも人間の結婚は、生理的のみだとは云はれない、併し人間以下の動物はまづ〳〵生理的と云ふべきで、その滿足を得んがために美音、彩翅、又格鬪をもなすので、即ち進化論者の雌雄淘汰の現象が起るのである、詩人は天地間の美を直覺して歌ふものであるから、花に醉ひ花に眠り、花に起き花に踊りて遊ぶ蝶哉杯と云ふのも無理はないが、事實は必ずさうではなくて彼等動物間には激しい雌雄競爭があるのである、例之は獅子の雄に鬖々たる、長鬣のあるのも孔雀や鴛鴦の雄鳥の美麗なのも鶯や蟬が雄のみ鳴くのも皆それなのである、人間がコスメチックや香水や白粉やを用ふるのは皆異性を引きつけるためにするのである、それなら又何故そんな競爭が起るの乎、その昔アダムとイブの時代には着飾る必要がなかつたと見えて兩人とも裸體であつたと云ふ、これが面白いので天地間たつた二人の男女のみなら決して同性と競爭する必要もなく又美裝する必要がなかつたであらう、然るにだん〳〵人間が増殖して甲乙丙丁との間に異性に對する競爭が開始されるやうになつたのである、これが動物界では容易ならぬ事件で人間界どころの騒でない、獨乙の學者デウジングの著書中には之等の統計があるが、その統計では犬は雄百十頭に就て雌は百頭の割合、羊は雄九十七頭に對し雌九十頭、豚は雄七頭につき雌六頭、家鷄は雄九

十四羽に對し雄百羽の割合である云々、即ち鷄を除けば皆雌の數が雄よりも多いのである、これが則自己の配偶を得んとして競爭せねばならぬ理由なのである、それで雌雄の比例で競爭が起るとせば雄よりも雌の多い家鷄の雌の間には何故競爭が起らないのである乎と思はれるが、これは鷄の習慣が一夫多妻であるからである多妻の動物はなか／＼に多數でゴリラは一夫で二三妻獅子は一夫四妻位で鹿・羊も亦さうでアメリカにゐる山羊の一種は一夫百妻であると云ふ、かうなるとモルモン宗信者の家庭でも到底及ぶ處ではない、序に云ふが動物が多妻的なのは然らざれば滅亡するか又生存に不適當となるからであるが又雌の數が多いからである、それで人間に於ける割合を調べて見ると明治三十一年の現在統計では男五十人四五に對し女四十九人五五の割合で千八百八十年の統計では合衆國では男五十人八八につき女四十九人三であつて、英國では男四十九人五六に對し女五十人四四の割合である、これが頗る面白い事實を提供してゐるので米國の男子が結婚するに資產幾何てふ項目が必要であつて英國にオールドミッスが多い一理由ではあるまい乎、勿論米國にもオールドミッスがゐないのではないが英國では中流以下の社會では海外に出稼する者が多いので女子のみ殘される傾向があるからであらう、それは兎に角人間に於ける男女の割合と云ふものはそんなに相違してゐない、又自然界に於ける優者である以上一夫多妻の必要がない、と云ふものである。

動物中には假令一旦結合するとも永久と云ふ點になると疑はしいものが多い、それでは未だ結婚と云ふことができない、フオン、コッペンフエルスが觀察ではゴリラは一夫婦及びその二兒とで家庭生活を營み母はその幼者を愛護すると云ひブレームは長尾猿の生活に就て物語られた、ピールが鴛鴦の夫婦生活に就て面白い觀察をなした事實をお話すればそれは同氏の飼養所で一番の鴛鴦があつてその雄が或晩盜まれたのである、然るにそれからは殘された雌が

心配相な容子で飲食も碌々しない有樣であつた、其時雄がなくなつた、鴛鴦がゐて頻に後へ殘された雌に媚を呈したと云ふ、それには一向かまはなかつたと云ふのを見ればふそアメリカに袖はぬらさじとの趣がある、それから暫時の後自分の夫が即ち雄が飼主の許へ歸つので飼主は夫を飼育所へ戻した、すると雄は忽ち元氣が出て兩方の喜悅の狀見るも感心すべきであつたと云ふことであるが何と美はしき情ではない乎、又エッセが觀察した處では鶴が貞操を守つたとある、之等に關する記事は澤山あるが今日の學問から論じては疑はしいものが多いから略す、以上の記事も疑はしい點がないでもないけれども今茲に動物心理を論ずるのでないから云はぬ猶一夫一婦の生活するものには三光鳥、燕鳩等多くある、之等動物の結合の年數に就ては未だ信ずべき報告がない、從て茲に詳述することが出來ぬ

動物の結婚に就て猶注意すべきは生殖の能力なき者は結婚の資格がないと云ふことである、即ち餘り若くても年寄でもいけないので各動物に略定まれる年數がある、その年齡中でなければ競爭場裡へ立つても敗者にきまつてゐる又立つこともない、之等に就て論ずれば慥にある眞理を捕捉し得るかも知れぬけれども最早や冗漫になるかとも思ふから止める

以上は動物界の結婚に就ての一部を心に浮びたるまゝ筆を走らせたのであるし、のみならずお門違ひの事柄もあるので或は以て鹿を馬となすの議論があるかも知れぬ

（完）

新式菓子製造法

梅田矯菓

○山吹芋金屯

原料　並割甘藷餡壹百匁　鬱金粉少々　上等微塵粉六匁、外に早仕立並割赤小豆餡五六十匁

之は並割甘藷餡を壹百匁を琺瑯鍋へ投れ、次に鬱金粉を少々と、清水數滴注ぎこんで七輪烈火に掛け、

杓子で間斷なく攪拌しつゝ充分熱して濃堅く煮詰て下ろし、平板上へ掬ひ出し、暫時熱氣を冷してから、其中へ上等微塵粉を六匁入れ、徐々と揉練交せ合して其三分程取分けて三匁位づゝに切分けて掌で押擴げ、其中へ六匁程の早仕立並割餡玉を載せ、指先で壓詰入れて半包にして置き、次に殘部の煉芋餡を一分角編目位の荒い篩張の裏漉篩へ上げ、平掌で擦漉し落して朧餡を拵らへ、其朧餡を先の尖つた竹箸で摘み取り、前の半包物の上面へ體裁良く載せ附けて亂粥狀にお飾りなさい、

紅芋煉羊羹

調合率　白寒天一本　清水一合五勺　上等粗目糖七十匁　白甘藷漉肉百五十匁　食料紅汁少許

先づ細長い白寒天一本清水中に投れ三四時間水膨し置き、次に白甘藷を二百匁程求めて水洗して上皮を剝ぎ去り、庖丁で五分位づゝに輪切にして土鍋へ投ざ、清水をビシャ〳〵と注ぎこんで上蓋を被せ、七輪烈火に掛けて暫時煮沸し、充分柔かく茹覆して下ろし煮汁を絞り、其熱い間に毛張の裏漉篩上へ揚げ杓子で手早く擦潰し、漉出して纎維を取除けて漉芋肉を前の分量の如く取集めてから、前に浸水膨した寒天の含水を握絞り、細かく千切つて琺瑯塗鍋へ投れ、清水を一合五勺注ぎこんで七輪烈火に掛け、充分煮溶かし、暫時沸騰してから上等粗目糖を百七十匁投れ時々杓子で攪拌しつゝ糖塊を悉く解し、吹上がるを待つて下ろし、別鉢へ毛篩を當て煮汁を濾過して塵芥糟を取除け、漉汁を以前の鍋へ戻して、再び七輪烈火に掛けて雜と煮沸してから、前の漉芋肉を入れ、杓子で間斷なく攪まはし煉り、鍋底へ焦着せぬやうに注意して十五分時間内外煮詰て試みに其煉液を少々掬ひ垂し、濃く流動體に滴れ落つる加減を見計つて下ろし、直に深さ一寸縱橫五寸位の漆塗重箱内を濡布で撫引き濕し、其重箱中へ煉液を流し入れ、風通しの宜しい平坦な板上へ列らべ、半日間以上靜に動搖せぬやうに注意して冷し、凝固めて後お用ゐの際は重箱を平板へ裏返して移し出し、庖

丁を濡布に撫つけ持つて巾五分長さ二寸位づゝに押切して断ち離し、其切口を斜に段々と附合して菓子鉢へお盛りなさい、

緑岡時雨

調合率　並割甘藷餡一百匁　上等微塵粉五匁
碾茶粉少々、尚外に並割甘藷餡一百匁程入用なり

先づ並割甘藷餡を一百匁ほど、琺瑯塗鍋へ投れ、清水数滴入れて七輪烈火に掛け、杓子で間断なく掻まはしつゝ煉返して、充分熱氣を加へて濃堅く煉詰て試みに其煉餡を少許掬ひ取り、乾いた掌に押當て引離し見計り、毫も掌に粘着せぬ位を程良い煉加減として下ろし、平板上へ掬ひ取出し、暫時熱氣を發散してから、其中へ上等微塵粉を五匁入れ、指頭で能く掻まはし交せ、尚碾茶粉を一匁内外揉み練合して程良い緑に着色してから、更に一分角編目位の籐張の朦朧篩目へ前の緑芋餡を上げ、平掌で徐々と擦漉出して朦餡といふ者を拵らへ、次に其朦餡を少々金篦で掬ひ取り、小さい酒盃内へ八分目程軽くふわりと入れ、其眞中へ四五匁位の並割甘藷餡玉を載せて、寸緒押詰め尚其上へ朦餡を少々被せて金篦で雑と壓均らして後、盃の橡を掌へトン〳〵と軽く、打當て内部の詰菓を揺り動かして盃を裏返し、抜出して葭簀上へ載せ列らべ、暫時風に曝しおいて周圍を稍締固めて後、菓子器へ取入れてお使ひなさい、

注意朦朧は味噌漉より一層編目の荒い裏漉篩であります、



佐々木信綱先生選

螢

天

飛驒南　みね子

放ちやる螢の行方眺めては
　そゞろに戀し古里の空

（評）やさしき女心を探る。

地

埼玉　横田秋子

せゝらぎのこなきが露をはなれきて
　庭田にひとつとぶほたるかな

（評）田舍には庭に田のある處もあるべし。庭田の句おもしろし

人

岐阜　藤引くわ子

母の脊にねる子のもてる紙袋
　破れ目のがれてゆく螢かな

（評）大隈言道の歌に『妹が背に眠る童の現なき手にさへめぐる風車かな』といへるあり。それとこれとはことかはれど、共に幼兒のさまを寫し得てよし

秀逸

◎ 千葉　益子操子

溫泉の宿の二日の雨は今はれぬ
　いざ子等來れ螢狩せん

◎ 名古屋　熊澤かぎ子

うなゐ子があげしうちはやのがれけん
　水上遠く螢とびゆく

◎ 相模　藤原下枝子

灯火を風に消されてたどりゆく
　里川堤螢飛ぶなり

◎ 美濃　長濱關子

君まつと扉にたつ我頬かすめても
　螢とびゆく川添のみち

◎ 名古屋　不破きみ子

ゆくりなく久しき友と語る哉
　川ぞひつたひ螢がりつゝ

讀者文壇

幼子の興がるまゝに一つづゝ
　汽車の窓より螢放ちぬ　◎　美濃　川上鈴枝子

青やみや岸の小舟に人もあらず
　葉やなぎ堤螢とぶかふ　◎　美濃　服部せき子

その昔し泣きて別れし故里の
　土橋のあたり螢とぶなり　◎　岐阜　中村華子

姫百合に夕はえすなり梅雨晴の
　十歩の庭の美くしき哉　◎　岐阜　中村はな子

坂にそひてくねり〳〵し里川を
　螢ゆきかふ夕まぐれかな　◎　美濃　芳翠敬子

月出てほころびかゝる宵闇を
　雖が如くに飛ぶほたるかな　◎　神戸　足立あさ子

月さへも洩らぬ青葉の木下陰
　光り亂れてほたるむれとぶ　◎　清國　鶴田つる子

夕月はうしろの山にかけ落ちて
　ほたるとぶなりうらの川波　◎　須磨　有村紫子

知らず〳〵乳母の里まで來つる哉
　田の道つたひ螢狩して　◎　岐阜　露木とし子

草青き里川堤雨はれて
　涼しき月に螢とぶなり　◎　岐阜　露木まい子

長良川鵜飼をはりて夜は更けて
　さびしき堤飛ぶ螢かな　◎　美濃　杉山靜子

鵜飼見る人も下りて水上の
　さびしき堤飛ふ螢哉　◎　美濃　杉山米子

螢狩り狩りつくしたるかへるさに
　照らすもすゞし三日月の影　◎　美濃　若園照子

早苗取る十戸の村のたそかれて
　螢とぶなり里川堤　◎　美濃　若園清子

たをやめの招く袖にもなびかぬは
　誰れにこがるる螢なるらむ　◎　宮城　山形すみ子

葉柳に夕風すゞしき池殿や
　すだれちかくに螢飛び來る　◎　美濃　酒向椿子

夕かぜにそよくみきはの蘆の葉の
　つゆとみだれて散る螢かな　◎　對馬　無名

賤の女のあせみちつたひかへるさの
　小川てらしてとぶほたる哉　◎　陸前　前田河千年子

少女子がまねく團の風よわみ ◎
たもとにすがるほたるやさしも　陸前　前田河みさを子

夕すゞみ里川ほとりさまよへは ◎
螢とびかふ夜となりにけり　神戶　後藤より子

昔しわが螢追ひせしふるさとの ◎
野はにぎはしき市となりにき　名古屋　山根しげ子

うなゐ等がうちはの風にまねかれて ◎
見えみ見えずみ飛ぶほたるかな　東京　たしろ貞子

おこたりをいさめがほにもてらしきて ◎
まなびのまとにほたる飛びかふ　東京　田代糸子

川添ひのやみの中なる五月の村 ◎
こゝにかしこに螢とびかふ　美濃　酒向京子

ゆけと〳〵花眞白なるうつぎ野や ◎
たそがれ初めて螢とぶかな　美濃　酒向うた子

ふるさとや里の川邊に亡き妹と ◎
螢おひにし昔し戀ひしも　岩代　岸野菊子

はからずも乳母が里まで來つるかな ◎
川添つゞみほたるおひつゝ　岩代　岸野常子

月見草咲きつゞきたる長縄手 ◎
夕やみ縫ひてとぶ螢かな　美濃　酒向ますゑ子

いさゝ川たもとすゞしき夕風に ◎
露と亂れて螢とぶなり　神戶　梶原京子

君逝きてひとり淋しき夕まとや ◎
森をなゝめにほたるとぶなり　東京　青木たま子

夕風にゆられてたてるあしのはの ◎
露をはなれてとぶ螢かな　新潟　岩本芳子

こむ秋と夏とゆきかふなか川に ◎
かたゞがへしてとぶほたるかな　靜岡　河合象子

草深みありともしらぬわすれ水 ◎
すだくほたるのひかりにぞみる　東京　益子逸子

うなゐ子がまねくうちはの追風に ◎
中そらまでもゆくほたるかな　東京　西村直子

先がけをあらそひがほに宇治川の
くれ行く波に飛ぶほたるかな　東京　倉重千惠子

甲

○

君を待つ君は音せず螢飛ぶよそ更け渡る橋の上かな　磐城　木幡きよ子

讀者文欄

○　青森　河合りし子
姉きみとかへる小道に日はくれてやなぎ蔭かくれ螢とひかふ

○　河内　竹内久子
夕月に里の乙女か手を洗ふいさゝ小川を螢流るゝ

○　美濃　一日京子
小夜更けて月はかたふき下草に猶も光るは螢なりけり

○　名古屋　木下鶴子
うれしさの笑かほもみえてうなゐ子かかそふる螢いくつあるらむ

○　群馬　鵜子
いさゝ川清き流れに添ふ堤のかなたこなたにほたるとひかふ

○　美濃　遠山よしの子
とまりつと笹の葉さぐる袖のさきなかすめてもゆくぬかほたるな

○　美濃　中村玉子
かよひぢや闇夜おかして來る君のやさまゆてらしとふ螢かな

○　常陸　岡田萬子
五月雨のいふせき馬屋の夕やみの草に光るは螢なりけり

○　美濃　川上るり子
若竹に雨おたゝかき窓近ふ螢飛ひ來ぬなつかしきよや

○　神奈川　服部八重子
弟が培ふ庭の草の上に螢放ちし妹可愛ゆき

○　美濃　早川しな子
鮎飼終て瀬の音たかく夜はふけぬ螢とひかふ長良つゝみの

○　美濃　杉山敏子
身なげ人船してさかす夕くれの背淵すこく螢とふかな

○　東京　小林春子
夏川の岸のおし原とふ螢いざやとらへて家つとにせん

○　美濃　平岡かん子
一人／＼竹に笹の葉結ひつけて螢追ひ行く村の男の子等

○　神戸　今西操子
螢とふ里の小川の岸つたひ追ひつ追ばれついく夜なりけむ

○　石見　山根直子
おさな子の露草もちて螢よふ歌も愛らし月の夕べに

○　東京　牧千春子
風折々早苗をふきて田の水にしばし流れてとふまたる螢

○　旭川　佐藤央子
月夜にも猶物すごき山寺のらんとう寒うほたるとふなり

○　神戸　足立ゑい子
泣く子にはせんかたなくも母親の佐保の川原に螢狩るなり

○　兵庫　小山波子
そよ／＼と夜風涼しき川端の柳の枝に螢三ッ四ッ

○　神戸　清水いと子
うちわ手に道なき畦にまよひ來ぬ我まへにとふ螢おひつゝ

○　神戸　井口その子
亡妹のおくつきところこの夏も螢生まれて思ひ出多き

○　神戸　竹野節子
はてもなき大空に高くとびまがふながるゝ星と見ゆるなりけり

○　須磨　有村芳子
御田植すまして歸るあぜ道や行手てらしてとふ螢哉

○　須磨　有村とみ子
洗かみ乱れて散れる水色のきぬの御袖に螢とまれる

○　須磨　有村紫子
おさな子に打つれ立ちて彼方こちに螢よふなりあせのゆふ道

○　美濃　若園清子
雨やみて月かげうすき夏の夜を庭のしげみに螢とびかふ

○　宮城　山形すみ子
川添の柳の小條吹き渡る風に乱れて螢とぶなり

○　宮城　山形みれ子
ゆらめきて灯更けたる草の屋の雨の青さに螢さまよう

○　美濃　酒向菊枝子
螢一ッ水を離れて舟越えて向ふの川岸に影をとゞめぬ

○　美濃　酒向道子

やはらなる君の御手執り川の邊を逍遥ふ夕べ螢乱るゝ

○　美濃　酒向鈴枝子

遠く見えし白き帆影も消えゆきて螢とびかふ保津川堤

○　河内　竹内敏子

とらへえし籠の螢を蚊帳の中に放ちて遊ぶ幼子かな

○　美濃　酒向清子

捨て舟の浮きて動かぬ青淵の岸の邊近く飛ぶ螢哉

○　美濃　酒向百子

無き父を夢みてはたと眼さむれば光る螢ゝおそしろき哉

○　東京　平塚つゆ子

夕やみを夏草めづと妹のながき袂に螢よりくる

○　美濃　松田春子

湖上笛の音絶えて舟見えず蘆原十里たゞ螢とぶ

○　美濃　松田君子

螢飛ぶ湖上の舟にうつゝなり笛の音しのぶ若き歌人

○　美濃　松田信子

螢ながら籠に筱の葉いれまして螢給ひぬ歌も添へつゝ

○　美濃　松田昌子

おばしまに灯をばこと更細うして山家集讀む螢火のもと

○　東京　高橋珍子

追ひ／＼て遠くきにけり螢かり小田のかへるさふみ迷ふまで

○　能登　栗倉一子

玉すだれもれくる月にうかれでゝとび行く螢星とみしかな

○　横須賀　高橋つれ子

川水にかげをうつして飛ぶ螢星のちるかと思ふ夜半哉

○　岩代　岸野豊子

いとし子のいたつき重き枕邊に三ツ四ツのこる螢さびしき

○　横須賀　柏原美奈子

霧雨に螢飛び交ふ御旅端客待つ車夫の灯火暗き

○　美濃　山田ゑい子

五月闇空なる星の姿して野川のほとり螢交ひ飛ぶ

○　兵庫　古東靜子

遠くまた近くとび行く螢火のゆくへ守りつゝほゝゑむ少女

○　兵庫　古東すみ子

夕風に螢おひてはなか／＼に晝の熱さも忘れ果てけり

○　松山　田村多豆子

蓮葉のつゆにすがりて玉と世をあさむくかげは螢なりけり

○　埼玉　横田やな子

漕てくる人はかへりて江の島の岩やつたひを行螢かな

○　神奈川　富永久代子

物の怪の出づてふ原の石地藏鬼火と見しは螢なりけり

○　横須賀　渡邊比佐子

風失せて二ツ三ツ四ツ螢飛ぶ加茂の河原の雨そゝぐ夜を

○　相模　香野濱子

垣ひとへ隣の庭の夕やみを燈籠消えて螢舞ひ來る

○　東京　小島榮子

芦のはの露にうつりて川きしをてらすほたるにゆふやみはなし

○　東京　吉岡龜子

ふくつけくほたるあつめて文机の光りをえたるよはの嬉しき

○　東京　原三幸子

みやびなるこゝろの友はよろきませ　ほたるの數もおほくぼの里

○　靜岡　中村志賀子

ふみまなぶつくゑの島をてらすなり籠にあつめたる窓の螢は

○　靜岡　中村まき子

川水のそこのさゞれもよむばかりすたくほたるの影のさやける

○　下野　井上尙子

楢のはの音してそよぐ大沼の暗らきあしまを螢かすとぶ

讀者文藝

乙

○ 美濃 井上とも子
月落ちて一入光る里川の堤の上に飛ぶ螢哉

○ 東京 堤 いく子
龍の形も去年なしのぶの屋根小舟うばがつとなる源氏ぼうたる

○ 千葉 金子 智子
羽きかぬ籠の螢をつゆしげき草にはなちぬ憂き夕暮や

○ 千葉 金子つる子
うすものゝ袂にしるき夏虫をほしがる稚兒に暫時與へす

○ 美濃 長濱由佐美子
いくたりもはまりて死にしうわさある池の黒淵とぶ螢かな

○ 東京 神田けい子
あしのへにかけたる網の散る嫌ひすかきそへて螢みだるゝ

○ 神戸 今西なぎさ子
青山の奥津城ところ小夜更けぬ誰が靈ならん土産の螢は

○ 靜岡 藤田 秀子
夜なのみ我世とたのむ螢こそ晴れぬ光を代々かこつらむ

○ 東京 平塚白百合子
露草にいきつくらしのうす光りほたるよぶ子のこゑ遠のきぬ

○ 神戸 波多野千鶴子
城跡の半ばくづれし石垣に宵の露吸ふ淋しき螢

○ 美濃 山邊きり子
乳母が背にこちくとよびてぬれふりし稚子の笹栞による哉

○ 埼玉 金子 律子
闇ふかし姿もゆかし田の水をみせて とひゆくはつ螢哉

○ 須磨 有村 紫芳
玉すだれ御香とめし花ずりの御きぬもれて螢ちりかふ

○ 岐阜 歌川 楕子
なつかしい君の御名のあらはれぬ螢入れにし文がらの筒

○ 東京 佐々木壽子
涼しさを螢に名ある宇治橋に夜更けて人の聲をきくかな

○ 東京 中村千代子
おもしろくたのしとおもう螢狩ほたるは此世憂しとわぶらむ

○ 美濃 飯島みゆき子
屋かた船うしほゆかたのやさ姿ほのに螢のてらしゆくかな

○ 三河 橋 たか子
女の子三人籠をめぐりぬうす絹にみどり涼しう照る螢かな

○ 常陸 白 菊 子
初螢ひとつ追ひつゝ畔の道歸りは淋し蛙なく音も

○ 美濃 吉田小百合子
人聲の去りて靜な橋詰の草へ螢の戻る東雲

○ 美濃 小綠女史
咲き乱る花かと迄にうたがはる黒川堤に螢飛ぶなり

○ 岐阜 中西よし子
夕まぐれ螢の行方ながめてはいにしへしのぶもろこしの空

○ 橫濱 鈴木まつ子
あまの子も涼しきかぜにふかれつゝいそ下かげにほたるおふなり

○ 美濃 松田 直子
相行くや露の上てる螢火にこがれてみだる戀の胸々

○ 美濃 松田 文子
今日も又忍べば露の畔つたひ螢おふなり君と二人が

○ 茨城 今泉千鳥子
子供よと母は笑みけり三人して螢逐ひゆくわがふりを見て

○ 下總 秋月曉江子
夕寒し螢追ひにし思ひ出にゑまんともせぬ我が身かなしも

○ 東京 石田りつ子
ますかゞみうらをてらさぬ人の世にしりへあかるき此ほたるかな

○ 東京 鮎澤 貞子
水棲や夕べとなれば香木の枝に螢み髮にひとつ

〇 岩代 岸野せい子

新月は大河の果にかくろひぬ螢に後のを開かせて

〇 岐阜 歌川すが子

ほのかにも君の御名のよまれけり螢入れにし文がらの筒

〇 岐阜 後藤英子

亡き人の昔偲べば讀みやすし机の螢文照らされど

〇 岐阜 中野梅子

螢がり堤のほれはれむけなる牛の所の暗を漂ふ

〇 岐阜 山田はき子

優しかる浮藻が花に螢居て王者冠に似る夕べかな

〇 大坂 木村春江子

あしま出るふれの邊さらでとふ螢桝の栄や友と見るらむ

〇 山口 村上操子

草のはにとびかふほたる吹風にちりてもちらぬ露はありけり

〇 松山 上原のぶ子

やみの夜も木陰てらしてとぶ螢空にしられぬ星もありけり

〇 近江 柚木はま子

夕立のはれて月もる青柳のつゆをもとめに螢三ッ四ッ

〇 近江 柚木音羽子

一ッぴきの螢はなせし蚊帳の中別世の空の星とながめて

〇 神奈川 飯田白露子

草むらにやとるは露とうちはらふ袖にみたれてほたるとぶなり

〇 秋田 長谷川薫子

五月雨はをやみもあらず若竹の梢をぬふて螢とびかふ

〇 伯耆 錦織幸子

籠のほたる免がれてよらんじやの間消えてまた照る金屏の上

〇 伯耆 錦織よし子

雨上の宵闇ぬひて青葉かけ露はみたれてほたるとぶなり

〇 伯耆 錦織千代子

籠のほたる佛間てらして松嶋と共に消えにし兄上かなし

〇 相模 中島るい子

古里の紅の小谷戸の夏草によるはもえつゝとぶ螢かな

〇 美濃 目島眞砂子

かへり來て衣をかやにふりかけは螢とび出でぬ石山のやど

百合

天 東京 平塚白百合子

つの笛や夕ばえ匂ふまきばみち
羊もる子の百合かざしゆく

評 西欧の名歯を見る心地す。すぐれたる作。二句もと夕はへかほるとあり。夕ばえ匂ふに改む

地 岐阜 中西よし子

牧の野の木かけにねむる小羊の
夢の行方か白百合の花

評 うつぶきがちなるさゆりの花の美くしき如、歌も又うつくし

人 陸前 山形さち子

神の斧に削りなしけむくしき巌の
上にさきたる姫百合の花

評 椋名さては汐原の旅のけしき思ひいだされて。

讀者文藝

秀逸

◎春の霞軽う浮べる湖の上や
静かに舟の櫓音聞ゆる
神奈川　服部八重子

◎暁の霞湧く山の湖ぎわに
すずしく立てる百合の花姫
相模　藤原下枝子

◎折り〳〵に鳥も水あむ山の井に
姿うつしてさ百合の花咲く
美濃　杉山雪子

◎雨晴れし青葉の風に露散りて
涼しき庭の白百合の花
美濃　杉山静子

◎やわらかき夏の朝風みどり風
谷間の百合の香りもてくる
美濃　杉山よしば子

◎明星のまたゝくかこと百合のはな
やみにゆらけり葉のしげみに
東京　神田けい子

◎なつかしき都の姉に送らばや
青葉こかげの山百合の花
美濃　多田さとる子

◎みじかよの残りの月もさしそひて
いとゞつゆき白百合の花
名古屋　不破きみ子

◎山越しに潮の音きゝていたつきの
君と手折りぬ百白合の花
東京　鶴澤貞子

◎覓して山の水ひく岩かけの
湯槽すずしき白百合の花
横須賀　柏原みな子

◎うるはしく野邊の姫百合咲きにけり
心して子等うしにはますな
松山　田村多豆子

◎谷川やきしにくだけて散るなみのしぶきにゆらく姫百の合花
秋田　長谷川藤子

◎村外れまだ家たゝぬ焼あとに
残りて百合の花咲き匂ふ
横須賀　渡比比佐子

◎里の子が潤して去りしさゝ川の
堤に咲きし白百合の花
相模　春野濱子

◎鬼あざみにほふ夏野の草むらに
いろなつかしきひめゆりの花
東京　吉岡鶴子

◎夢に見し星のゆくへを野のはてに
たづぬるあたり百合の花さく
東京　平塚つゆ子

◎白百合はこひする人のひとみして
朝もやしろき夏の野にさく
東京　平塚いと子

◎筆とりて何なかゝんのたゆたひに
　露の姫百合月となりぬる　　美濃　松田春子

◎なつ草のしげみがなかにうるはしく
　一本吹きぬひめゆりの花　　神戸　梶原京子

◎白百合を胸にかざして少女子の
　ほゝ笑む顔の神に似たるよ　　美濃　若園照子

◎物思ふ妹が姿に似たるかな
　まがきの下の姫ゆりの花　　名古屋　山根しげ子

◎岸にさくさゆりの花ぞなつかしき
　岩魚さばしる谷川にして　　同　山根しづ子

◎鬼あざみ茂れる中に一もとの
　白ゆりさけり山添の道　　大阪　竹内敬子

◎丸窓に文かく女房若し
　百合の花さく夕ぐれの宿　　同　竹内吉子

◎よるの間に天つ女神の露おちて
　花とやさしき姫ゆりの花　　同　竹内けい子

◎鬼あざみ茂る野中のくさむらに
　あはれにもさくひめゆりの花　　東京　田代廣子

夏くさのしげみの中に色生えて
　にほふもゆかし野への姫ゆり　　東京　田代米子

物言ふに面はゆげなる麗人の
　様して咲きぬ姫百合の花　　岐阜　歌川清子

白瀧のとゞろに落つる岩の上
　空けだかく咲ける姫百合　　東京　佐々[illegible]孫子

おのが身のすくせ悲しとかこつらむ
　いばらが中に匂ふしらゆり　　東京　中村千代子

川一ツへだてし岸に山百合の
　色うつくしく咲ける山道　　岐阜　露木とし子

岩清水たえず流るゝ石垣の
　かたへにさける百合の一本　　東京　牧千春子

新らしき卒塔婆の前にうなだれて
　雨にうたるゝ姫百合のはな　　神戸　千　鶴子

織をへる如くに蜻蛉ゆきかひて
　百合の香満てる野川よろしき　　美濃　芳翠敏子

水車ゆるくめぐれるしぶきうけて
　ぬれ〳〵咲きぬ岸の白百合　　美濃　傍島みゆき子

朝風に絽蚊幮出づれば花ぞのゝ ◎ 清國 稲田つる子
百合姫がさすつゆの白玉

若草の茂れるなかに床しくも ◎ 兵庫 濱子
咲き出でにける姫百合の花

白百合のつぼみけだかきそが中に ◎ 岐阜 藤引くわ子
入りても見たき我が思ひかな

甲

○ 岐阜 長濱田佐美子
奈良の街太古のさまに霧降りて朝美くし白百合の園

○ 常陸 岡田萬子
筑波峰のいはほに立ちて見下せば谷間に白き山百合の花

○ 常陸 岡田まん子
戀しらぬ少女にも似てあはれなり姿やさしき姫百合の花

○ 千葉 森子さと子
ゆあみして夕餉と〳〵のふそれまでを妹とつみぬ白百合の花

○ 千葉 志水みち子
よみさしの聖書にはさみぬ夕風にこほろゝ百合の花をひろひて

○ 神奈川 服部八重子
百合の花花咲く岩の岩蔭に吾も男の子ゝ足洗ひつゝ

○ 美濃 杉山敏子
鐘の音にゆら〳〵青葉よ散る露よ森蔭涼し白百合の花

○ 美濃 杉山國子
花の香も露にしめりて薫くらき谷間すゝしき白百合の咲く

○ 岩代 岸野常子
白百合は清くも咲きぬ世の塵にそまで逝きにし孝女の墓に

○ 岐阜 齋島曉子
化粧終へて君まつひまの手すさびに白百合活けば雨ふり出でぬ

○ 美濃 平岡かん子
歌を生む村とし思ふ霧降りて細き流れに百合咲きつゞく

○ 美濃 服部せき子
むらさきの霧の中より白百合はにほひはなちて閑美くしき

○ 美濃 多田こと子
なつかしき庭の姫百合咲きみちて薫りに栄し夏の夕月

○ 美濃 多田瑞枝子
姫百合の花折りとりてながめをれば夕べの風に香こぼれぬ

○ 美濃 多田花子
なつかしき君と語りし青葉蔭に床しく匂ふ山百合の花

○ 神戸 今井なぎさ子
苔のむす谷の岩かげ匂ふなり手折らまほしき白百合の花

○ 神戸 今井操子
夏草のかすいろ〳〵におほけれと清きは百合の花にそありける

○ 美濃 早川しな子
起き出て小百合の露をめでてながらそゝろおろさの朝心地よき

○ 横須賀 高橋つれ子
醜草の茂れる中に百合の花姿やさしく咲き匂ひけり

○ 岩代 岸野常子
星の夜や七堂伽藍香のみちてみ経誦する白百合の花

○ 岐阜 後藤英子
兄君の戰みやけの砲彈のからに活けゝり姫百合の花

○ 岐阜 山田はき子
雛鳥の水浴に下る溪合や所々に白百合の咲く

○ 兵庫 湖東靜子
あへき〳〵夏野をたどる道のべにみだれてさける姫百合の花

○松山　上原のぶ子
なにとなくゆかしき野へのさ百合花夏もさく花草はあれども

○大坂　木村春江子
あけぼのやわかばのみとりしつくする露にかたむく姫百合の花

○新潟　岩木芳子
花うりし翁はあらず家はあれてせとのかきれに百合の花咲く

○埼玉　横田やな子
色ふかき野へのひめゆり花咲てつゆもあはれのすがたなりけり

○東京　富永久代子
一筋に嶺より落つる大瀧のしぶきに揺ぐ山百合の花

○神奈川　飯田白露子
山路までゆかしき花の香に醉ひぬ谷間かくれに白ゆりのさく

○下野　井上尚子
夕闇のひろごろ中にさゆり花重げにゆれぬいさゝ川べに

○静岡　河合粂子
鬼あさみ手をきろすゝき茂る野にゑみこほれたるひめゆりの花

○静岡　中村まき子
かいまみてならまくほしくおもふかなとなりの庭の姫ゆりの花

○美濃　酒向京子
する墨に匂ひもそへて香るかな君ます窓の小百合の花

○美濃　吉田小百合子
夏痩せの尼の耕やす小畠に百合の花さく庵の窓先

○美濃　酒向うた子
石多き桑の木畑け桑出でゝ其葉がくれに白百合の花

○美濃　松田直子
初夏の遊子多き湯の山の湯のけ香りて百合の花さく

○美濃　松田昌子
百合の花君なつかしみ訪ひまさば共にながめん朧ろ月夜に

○茨城　今泉千鳥子
人とはぬみ谷に咲きし一本は若きおもひなひめ百合の花

○下總　秋月廣江子
御名よべは御香ゆらきて其かみの姿さながらに百合の花ちる

○美濃　若園照子
十年憂き病の窓の黄昏や遠寺の鐘に百合の花散る

○美濃　若園清子
そよ風にかなりゆれては露ながらちりてくづれし白百合の花

○三河　橋　たか子
鬼あさみしげれる中に心して匂ふもゆかし白百合の花

○美濃　酒向菊枝子
小ひさなる園に咲きたる百合の花あさ目すゞしく我れにそよきぬ

○美濃　酒向道子
夕露を首にうけてひめゆりの今宵一と夜を何歎げくらむ

○對馬　畑島郁子
しかすがに手折りも得ずて眺めけり朝露ふくむ白百合の花

○陸前　前田河千年子
八十草のしげみの中にけたかくもさきまじりたる姫ゆりの花

○名古屋　山根しげ子
半歳は海に養ふ身にしあれば見るもかなしき白ゆりの花

○美濃　酒向清子
はたなかに百合の花咲く暑き日を釣りする濱べの通り行くかな

○神戸　竹野節子
我が園にけさ咲き初めし白百合の花にふくめる露のしら玉

○須磨　奥村とみ子
岩しみづながれて結ぶ谷間の小川のほとり咲く百合の花

○須磨　奥村繁子
たそがれにたどり來にける山間のたにの岩ねに咲ける白百合

○美濃　杉山靜子
湖を廣く見渡す峠茶屋のせとに香ゆらく白百合の花

讀者文藝

○　美濃　杉山末子
百合の花草かり行けば山の井の邊に咲けり影をうつして

○　岐阜　鷹木とし子
奥山のさゝの假庵こけ清水夏もよきところ百合さきつゝ

○　飛驒　南峰子
露白き霧晞むる庭も世にかをりみなぎる白百合の花

○　飛驒　南玉子
谷かげにひとり淋しく咲く百合をきてはうつせる若き畫工

○　靜岡　藤田秀子
野に山に色様々に草むらに清く靜けく咲ける白百合

○　美濃　目島眞砂子
世のちりにそまらでさきぬ天の國の種おろしましゝ白百合の花

○　神戸　足立ゑい子
夏草の中に野百合のけしり咲あな夢しや家土產にせん

○　神戸　井口その子
十勝野の夏は來にけりアイヌ等の髮にかざせる白百合の花

○　近江　柚木はま子
しけ草の中にまじりて一しほにゆかしかりけり姫百合の花

○　東京　鮎澤貞子
苔清水よき音たてゝ紅百合の細き根元を廻りつゝある

甲

○　美濃　長濱蘭子
歌ならずうつらまどろみ夢に見し人の姿に似て百合さきぬ

○　美濃　中村玉子
むらさきのやさしき君がみ衣のみ手ぞと思ふ白百合の花

○　千葉　金子操子
朝見ゆる峠の道に百合つみぬつとまつ宿の稚兒にやるべし

○　東京　小林春子
ゆくりなく今を盛りと咲くゆりの花をとめけり山めぐりつゝ

○　美濃　遠山よし子
黒髮に香の油すなる化粧間の窓美くしき白百合の花

○　東京　鮎澤貞子
旅日記紅百合多き峠路の岩に倚りつゝ文するとかく

○　岩代　岸野まさ子
古郷の庭はあれはてぬ二つ三つかたみの百合は咲き殘れども

○　岩代　岸野常子
神々のみゆるしうけし夢さめて百合の香高き朝風の窓

○　岐阜　中野梅子
折りて來し百合にや居けんおそろしき大き山あり床はひて居ぬ

○　美濃　山田ゑい子
[illegible]のよき旅人が逍遙の傍に開きぬ白百合の花

○　山口　村上操子
かたふきて咲ける姫百合その莖に似つゝかしからぬ花の見えけり

○　東京　青木たま子
夏の野にみたれながらもなよ〱とやさしく匂ふ姫百合の花

○　埼玉　横田秋子
夏深きなすのゝ原を來てみればむかしおほゆる白百合の花

○　近江　柚木音羽子
朝夕にとこにかざしてすがた香を師ともあふがん姫百合の花

○　伯耆　紬織さち子
うなたるゝ姿にたえぬ露なりやかをりふくみて白ゆりが下

○　東京　金子逸子
生茂るみどりもふるき夏くさのなかにめにたつひめゆりの花

○　東京　原三幸子
夏草のしげきおもひのありけにも見ゆるも庭の姫ゆりの花

○　東京　西村直子
色もかもたくひ夏のし竹むらにゑみこほれたるひめゆりの花

○ 静岡　中村しか子
なみなへしあたな感にさくなかにたくひなく見ろ姫ゆりの花

○ 名古屋　木下鶴子
あはれとやさすかにしつも姫ゆりのこの一本はかすにのこしけむ

○ 美濃　酒向ますゑ子
吾が家は前は曠野よ裏小川岸に咲きたる草百合の花

○ 美濃　松田君子
ほとゝきす啼きて過ぎゆく谷合に月に香高し白百合の花

○ 美濃　松田文子
熱病みて美人と評る美くしき夢覚めし夜の床の白百合

○ 美濃　松田信子
夏園に露も香ひてあけぼのゝ美くしやさしき姫百合の花

○ 東京　高橋珍子
妹の歌かとぞ見ろをくつきにうなたれてさくひめゆりの花

○ 富山　夏子
河岸に彼方此方に舞ふ蝶の日あしは向ふの白百合の花

○ 富山　なつ子
螢よと近寄り見れば白ら露に月をやどして笑める百合かな

○ 能登　栗原一子
とりとりの花にもまさる姿なれど上にはむかぬ百合の花かな

○ 美濃　若園清子
紅の百合一もと手折りて瓶にいけて文讀みをれはたのしきよ畫

○ 陸前　山形さち子
月の夜のもの蒼ざめし小草野にぺにゆりひとつ頬染めてゐぬ

○ 美濃　酒向鈴枝子
夏草の繁みの中に姫百合の姿やさしく我をむかへぬ

○ 美濃　酒向幸子
露ながら籠に白百合折り取りてやさしの君に送りてけりな

○ 後藤より子

○ 美濃　酒向百子
しら露に月をやどせる垣もとの夕栄かなる白百合の花

○ 埼玉　金子律子
人も無き峠の茶屋の寂として荒れたる垣に百合の咲花く

○ 北海道　佐藤央子
さらさらと清水にうつる姫ゆりの腰た手置くまにはやちりにけり

○ 美濃　山邊きり子
文月よせなにおひつゝ山かつは谷の姫ゆり家つとにして

○ 神戸　足立あさ子
遠江の鐘の音低し朝風に露はらはせて百合の花さく

○ 白菊女史
露はしと見らるゝ人目耻らひて面伏せに咲く姫百合の花

○ 兵庫　古東森美子
亡き妹とのかたみの白百合咲きにけり母とじ手折て霊前にと押す

○ 兵庫　古東よし子
初吹の百合二本を送らんに消き色かぞよはをたもふな

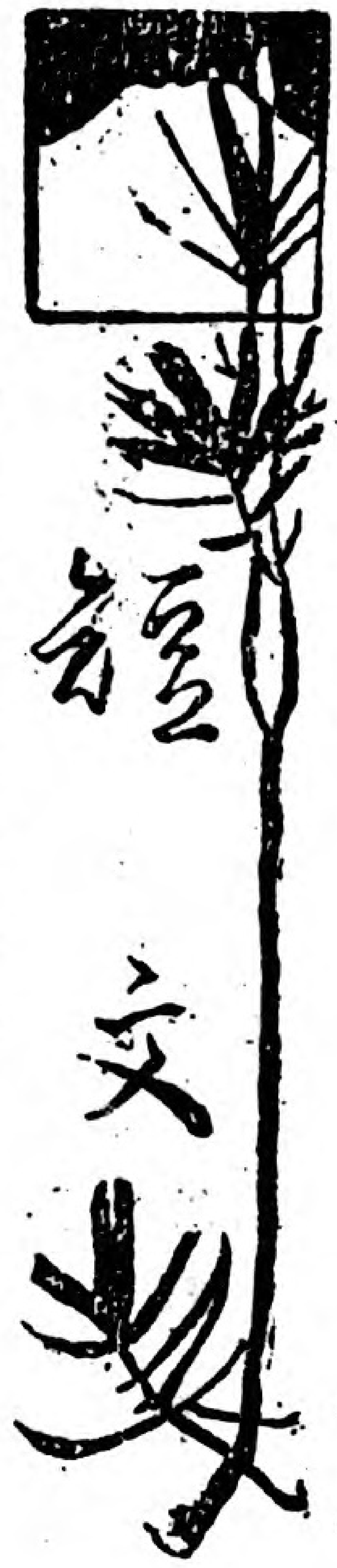
○ 東京　石田りつ子
笠さして百合にあこかる君達をいつこの誰と我は思ひぬ

○ 德島　平岡ひせ子
南部なる友のおこせし百合の根のたうべしあとぞ今しにほへろ

○ 東京　堤いく子
奥深き谷間に吹ける姫百合は虚榮を知らぬ乙女にも似て

○ 相模　中島類子
姫君があしたの園のさすらひや姿ろうたし白百合の花

夏の野にしける青葉にかくれ咲く露をもけなる姫百合の花



文學士鹽井雨江先生選

無果花

天

三河　橋多賀子

皐月の風に無花果の新芽が伸び、差し交はす疎な枝には、鮮な新綠の若葉が、淸新な夏の裝ひに香立つて來た。私は、うつら〳〵と夢のやうに過す夏の日を、その幽邃な綠葉の蔭に身を凭せて、葉洩れに動く白雲の姿や、梢に搖ぐ鳥影を眺めながら、病める心の淋しさを慰めたが……あゝ、今は昔の樂しき三年を花やかな希望に笑んだ學舍の庭の無花果は、今年はどんな嫩葉の香にかをつてをるであらう。

飴屋の唐人笛や、物賣の呼鈴や、喧しい市の轟が枝透に響いて來るのを聞きながら、愛子樣と共に詩集に興じたその蔭。秋雨の淋しう注ぐ夜を。故鄕を想うて淚に顫へた窓の枯葉病葉。それらは皆古い記憶に殘つて居る。まして、黃昏の微光仄に無花果の茂みを洩れて、乳色のカーテンを黃く染めた夏の夕を、愛子樣と合奏したる哀別離の一曲は、何して忘られやう。

夫は人の離別を神の心とあきらめた古い獨逸の歐曲、歌も調も優しう今樣にくづされたもの、悲しき別離の心は長く殘つて、調ぶる人の胸深う響いては、君はオルガンにおく指を、吾はバイヲリンの弓の手を、亂るゝ儘に任せて、互に淚の顔を見合せた事もあつたが、好んで調べた曲の詞は、吾身の上に眞となつて　私は重い病に、馴染みし學舍や睦んだ愛子樣とも、長い別れをしたのである。

『もう明日の晩からは、二十里離れて月を見るのよ。あゝ、私の事を想出して下さつたら、あの哀別離を彈いて下さい。』私は故鄕の無花果のもとで毎晩バイヲリンの音に、別れた貴女を思つて泣き

ますわ。』と限りなく涙を流した夜の悲しさ。さては、裸木となつた無花果の木陰に見送つて下さる愛子様と、顔を見合せながら、「今日よりは裸木の蔭に、淋しい古里に獨り彈くべき哀別離に、別れて泣かん互の身」と胸から胸へ稲妻のやうに閃き渡る想に打たれて、只半巾を嚙み占めた儘、言ふにまさる悲しみをなめた別れの朝は、どんなに長き愁と殘つたであらう。山蔭添ひの痩村なれば、唐人笛や呼鈴や市の轟は聞えぬけれど、茂り合ふ無花果の葉蔭よりは、愛子様がお調べの昔懐しいオルガンの音が、幽に響くやうに思はれて、私は嬉しい悲しい追想が、胸に湧き上がる時は、四すぢの絃に昔の日の夢を歌つて、限りなき慰藉を、この葉蔭にもとめるのである。



（雨評）懷舊や慰藉の料たる哀別離の一曲は、また此の抒情文を新しくしたる材料となつて居るは面白い。すべて意匠に辭に苦心の作と見えて、ゆかしい。

地

『廢　宅』　岩　代　樹　口　節　子

頭領がチョイ〳〵尺金で指圖をしますと。半被が屋根石を下したり、壁を破つたり、それは大かせ

ぎです、大きな槌で一擊を加へると、漆喰を塗つた白い色が、バラリと剝げて、中から、赭色の土が出て來ます、大きな罅が、横にも縱にも走るかと思ふと、ドッと烟をあげて落ちます、接木をはづす音、大いまんりきの響、その響。その音毎に、此家は壞されるのです、此家を建てた人は、こんな悲慘な運命に出逢ふのを豫期して居なかつたでしよう。幾多の人が住まつたのだから、喜び怒り、哭き、などが、皆此中に隱れて居るでしよう。祖父の聲や伯母の聲が、この破碎の音の中に交つて居はしまいかと思ふと、土煙の中に何者かが潜んで居るやうに思はれてきます。杜の兩關と呼んだ槻の巨木も、西と東に伐り倒されて居ます。人足が蟻の樣に集まつて、枝を下したり、挽いたりしてます。幹からは白い水が出てきますわ、これが冷たい槻の血潮でしよう。昨日迄は虛空の中に枝をのばして、その綠葉の蔭には小鳥の巢もありましたらう、蟬の古巢もありましたらう。この家の歷史を知つて居るのは、この槻ばかりでしよう。廣葉を風に煽らせてゐる朴も、紫の實を垂れてゐる葡萄も、黃な實をつけて村の子を呼び寄せた枳殼垣も、私が植えた山吹も牡丹も、今數秒の中に、同じ運命に會するのかと思ふと、悲しくなつて見てられません。

日のさした事がなかつた杜も、今は夕日が眞紅にさして、伐り倒された槻の綠葉が、今にも動き出しさうです、槻はきられて、家は破されて、人は死んでも、この土が昔を語るでしよう。廣い麥畑になつて、雲雀が上つたり下つたりする數年の後のことを考へると、荒凉の氣が急に胸に迫つて來て人生は淋しいものだと、シミ／＼と私は。

（雨評）意匠が面白い。筆もきつぱりとして氣持がよい唯だますといふ會話體のところは老へものである。

人

島なる友へ

下野　井上尚子

小田の蛙のなく音しげく、雨はれて月冴えし宵は南に流るゝ雲に思をよせ遠き小島の君をのみしの

ばれて候ふよ、椿の花かげに島人の俗歌眺めやる海上になきわたる雁がね、いかにきかせたまひし暖き潮のめぐる小島の人と君成りましてより、四月の日記さぞや美しく寂しく候はん。月きよき今宵、君は何をかしたまふ。月影ただよふ浪の上に果てもなき思を故山に走せつゝ寂しき歌や作らせらるゝ。はた想にや耽らせらるゝ、さては、さゝ波よする磯に立ちて美しきみ聲に、ハイネの詩をや誦したまふ。磯松かげに、好みの、ハモニカ出は「離れ小島」にや候ふ。妙なるしらべきかまほしう候ふ。ともあれ、かゝる宵は夢やすらかに床にいます夜にはあらずと推し候。河鹿なく湯の宿の夜半忍ばるゝは小島の君磯打つ浪にゆめ破られてねもやらず、友よぶ千鳥のなく音さびしくふけゆく夜半燈下に筆とりて國への文をやしたゝめらるゝかうつくしき磯の石に歌かきていますか。うたかきし石のあらば、たまはれな。そはいくとせの後に君と妾と昔語としてほゝ笑まん種と爲したく候へば。

巻きこめしわかもみぢば、この色づく頃には、是非御かへりをこそ待たるれ。椿油にことさら黒くながき髪、あたゝかき潮かぜに染みしみ顔、はや目の前に浮び懐しさにうつしゑ取出でて候。かき添へし歌君が今の境を慰めんは難けれど、そぞろありきの折にても誦されなば歌も妾も滿足にて候。島よりの美しき委しき御かへしを、指折りて待ち居候。かしこ、

（雨評）優美なる御消息に候かな

秀逸

◎◎日誌の一節　埼玉　高橋とよ子

待ちに待つた暑中休暇は來て、温い家庭の愛の泉に浴つて、笑の中に包まれたのは昨日の夕、就褥はおそかつたが、今朝は意外に早く目がさめて、どうしても寢てをられないので、早速起きて、自分から雨戸を繰ると、露に濕つた隣家の屋根には、朝炊の烟が這うてゐる。門外へ出ると、方四町ばかりの滿池の紅蓮、オレンジ色の空に映えて、久遠の寂靜に回つた天地の間に、時々蓮の蕾を破

る音、花粉を運ぶ微風の身にしむなど、印度太古の曙も斯くやと思はれた。池の彼方、靄に包まれた林の端れ、チラと顔をだした朝日に照されて、白く眠つて居るやうなのは小學校で、窓の扉が恰度眼瞼を閉ぢたやう。

その午後、宿題の寫生をして、繪筆を洗つて居ると、垣根の外から、家の妹と共に「松風清き夕渚に、月もよせくる須磨の浦………」と、美しい聲で歌ひ乍ら、門を入つてきたのは、美ちやんだ

その美ちやんの可愛らしいこと。艶々とした黑髮を、濃茶のリボンで結んで、冷しげな單衣の背中へ、ザラリと垂し、愛くるしい二重眼線の圓な小羊の眸のやうに、露を含んだ眼元、色の白い頰はまるでミルクに秋海棠の紅を溶かし込んだやう。

小さい口元に、言ひしらぬ悧發さを含ませて居る美ちやんは、今年尋常四年生で、最愛の妹と、仲よしの友である。自分は修學旅行の折、鎌倉で求めて來た貝細工と、寫眞數枚とを、美ちやんに贈つた。

夕方、妹をつれて、利根川堤を散歩した。遠く望めば、綠に包まれた武藏野の、森も林も山も川も懷しく眼に映つてくる。薔薇の紅を溶して染めたやうな雲が、目も遙かな新綠越に、地平線の上に流れてゐる淡い化粧の富士の姿は、帷幌の奧に籠りかねたる美姫の風情で、木の間に額を見せたり隱したりする。さうかと思へば、東の空には薄眉の一刷毛の新月の影が微茫として、其の光を便りに蛙が歌をよみ交す。黃昏の暗は犇々と迫つて、新月の影は細く〳〵なつて、星の露でも飾ひ落しさうな空である。

（雨評）筆よく整ひ、殊に末段の叙景の筆は想像の花もかをりてゆかしい。たゞ中段の美ちやんの事をいへるところが、ありふれて居つてしかも長すぎる。

◎◎　　越後　水野屋すゑ

人戀し灯ともし頃を櫻ちる、何ともいへぬよい句嗚呼人を戀しと思ふ自分がわるいのか、人なつかしと思はせる人がわるいか、昨日今日の堪へがたき思ひに、そつと取り出す寫眞を、弟に見られて

これは、それそこの人よ、活潑なとつけ加へて、私も知つてゐるわと、さつさと行く無邪氣さ、お、胸には潮のさし來しを、彼は知らんのだ、親類へ行かれるともうかへられた筈、手紙、手紙、その手紙は今日も來ぬ。一日の務めを終つて歸つて來て待つた手紙の來ない時、力を落さぬには、我が心は弱すぎる、邪情あらばありてもよけれど、きゝたし、見たし、唯だ面影でも。夕日は直江の町の方に殘紅を殘して、蛙がしきりに鳴く五月雨後の晴れた景色、オリーブ色の濃かなところは、誠にえも言はれないけれども、今の自分には何の感興も浮ばない。一時間二時間、筆もとつた、本も見た。しかし、しかし、……何でかうなんだらう、分つてゐるやうで、分らぬやうで嗚呼決して譯をきゝたいのではない、情！情！

（雨評）發哀に一種の趣きがある。

◎◎越路の春　越後　星野きよ

花なき三つきの冬籠り、いかに永いことであらう。くる日も來る日も小暗くて、晝なほ燈火ほしいこともあれば、木立ちの叫びに、夢やぶらる、夜半もある。殊に折々の大吹雪は、家も垣もとばしさうな勢で、なれし身にも悽い。もし突然に此冬にあつたならば、魂も身にそはぬであらう。けれ共、一つきに二三日は必ず晴れて、實に崇高な雪景色に接することができる上に、やがて尤も神の御惠みこもれる善美の春がくるのである。ああ春、つきぬ希望にいきてをるのは、これあるが爲である。雲井をわたる厂のもる聲に、庭の梅、座禪榭山の椿はまづ微笑み、雪はむらぎえ、都には花吹雪のあともなく、ゆかりの色の池水にうつらふころ、こゝの野山は、白衣をぬぎて霞にかへ、一齊に紅に白に黄に綠に紫と綾錦の粧ひ、げに目もさむるばかり。長閑な鳥の歌にも躍りだしたくなる。あゝ、歡樂鄕。花に順序ある都の春もいゝが、忘れられないのは越ぢの春である。いつ思ひだしても、嬉しい、樂しい、懷しい。

（雨評）あつさりとして、しかも情のきこえたるところがよい。

◎雨の日記　　大阪　辻村花子

小歇みなくシトシトと降る雨は、少女の忍び泣きにも似てしをらしく、俄かに降り出して俄かに降り止む雨は、小供の心に任せぬ事ありて泣き叫ぶが如く、罪なくてをかし、春の雨は、悔やしき心を袖になくやうなれば、哀れ深しと雖も、夏の雨は、むか腹を立てたるが如くにて、憎くらし、秋の雨は訴ふるに似て淋みしく、冬の雨はあてつけがましくて浅墓なり。凡そ心に愁ひあり思ひに沈める夜半などに、雨のしめやかに降る音を聞く時は。胸の中千々に掻き亂さるゝが如くにて、悲しさ一入なり

殊更物憂きは、旅の空に雨に逢ひたる折にて、陰欝なる俥の布呂に閉ぢ込められて用を便じ折角憧がれし周圍の光景を見る事さへ叶はずして、宛ら闇の夜を行くに異ならず。されど、昨夜の中に降りし雨の曉に至りて霽れ上がり、庭の草木の葉末に朝日のかゞやけるは心地善き眺めにして、或は久しく逢はざりし人の訪ひ來り懐つかしかりし思

ひを終日語り合へる時、窓の外にて糸の如き細雨の南天の葉に囁ける響きのするは、人の心を落ち付かすものにて又一段の風情を添ふべし。ゆくりなく雨ふる休日に會して、外出する事もならず、徒然のあまり　想ひ浮びし事を、斯くしたゝめてけふの日記の白きをふさぎぬ。

（雨評）前段の雨の批評は、一寸觀察想像が面白い。併し詞と文とは、なほ一層の熟練を要する文である。

◎夏を迎ふ　　美濃　若園照子

桃散りて、櫻散りて、春暮れし青葉の岡に、老鶯の鳴く。

そぼ降る朝雨も、いつしか霽れ渡りて、青葉姫が朝の逍遥に御園歩きます折しもあれ、日頃めでいつくしみ給ひし鶯の一聲ホヽ……あはれ其こゑ今は澁りて、清らけかりし名殘も止めず。

風一陣、はら／＼と降り落つる水玉は、皆五彩を放ちて、あたり眩ゆし。いまや春の數多き花鳥は己が花瓣を收め、羽衣を整へて、別れ去らんとするに、獨り庭を繞りて流るゝいさゝ小川の水面に

薫ずる早百合、此れを送るが如し。

なよ〳〵と川の岸邊に咲ける花早百合の君よ、戀ふる人。

一年の後には又廻り來るべけれど、春それの今去らんとする門出のいとも悲しき事に、早百合は泣きたるが……。

さはれこは浮世の常なり、君よ嘆き給ひそとばかり、春の花鳥は慰めしなるべし。

瞽ふれば眞砂に書きし君が名の、やがては浪に奪はれん世や。

・　・　・　・

春の花鳥は去りて、春の俤は失せにき、あゝ夏は……。

・　・　・　・

紫の黄金の雲低う垂れて、野も山も一面に夕映の彩色美はしう。白鷺の一聲につれて、池の對岸濃き綠の森より、微動き浪に傳ふる鐘の音、數六つ月は山の端に出でぬ。

早百合は如何にせしならんか………。

小琴抱きて月に對へば。興そゞろ、驕れる舞に、夜の更けて行く。

早百合はよろこびもて其夜を過しぬ。

・　・　・　・

春を送りて二日、夏は來りぬ。

新綠いや増せし雜木の中、日三竿にして百合咲く淵、綠垂るゝ人や床し、そも誰ぞ、そは夏の兒なりき。

若葉せし雜木の中の流れにも魚や住むらん綠垂るゝ人。その宵。木の暮れて暫し蝿去りし時、團扇片手に釣床に眠る人は床し、そは夏の兒なりき。

繙ける歌集夢に入りて木影涼風釣床をめぐる。

・　・　・　＊

春を戀ひて、春にあくがれし妾等も、其の愛の懷に入りては、夢と樂しき日を送り過し、今や更に樂しき夏を迎ふるに至りぬ。夏、あゝ夏は來りぬ早百合はわれを迎へ、螢はわれを導き、涼風はわれを慰むるが如し。夏來、いざ夏を迎ふるの歌誦さん哉。

（雨評）工夫のあとは見ゆるが。少し氣取りすぎたる筆の嫌ひがある。

◉眞夏日　　茨城　今泉磯千鳥

「オ、暑い………」

今し停車場へ小荷物取りに行つて歸つて來た弟は、荷物も帽子も疊の上へ投げ出して、汗を拭きながら井戸端の方へ走つて行つた。間もなく、ギイーとツルベの音、ザアと水の音、多分水でもあびたのであろう？

私は縫物の手を止め、縫ひかけた單衣物を、向うへ押しやり、膝の上に宜い心持に寢て居た三毛（猫の名）を、ソツト降ろして裏へ行つて見ると弟は眞裸體になつて水をあびて居る。其の向うの畑には、とうみぎが丈高う微風にそよいで居て、紫溜たらむ許りの茄子は、其の下に七ッ八ッ首を出して居る。いんげんや胡瓜等のつるは長う延びて、地低う飛ぶ蜻蛉をとらふかの樣。時折、小さい黄ろい虫が、胡瓜畑より胡瓜畑へと飛んで行つて、太陽は大空に赫灼と照り輝いて、釜で蒸されるかの樣です。井戸端で水をあびて居た弟は、手拭で體を拭きながら、誰やらと話して居る。話し相手は、たしかにお母樣だ。ハテ何所にいらつしやるのかと四邊を見廻すと、あゝ此の暑いのに……今迄氣が付かなかつたが、胡瓜畑に手拭を姐樣冠にして、あの黄ろい虫を取つていらつしやる……胡瓜の葉を皆んな食つてしまふから………と言つて。私は何だかお母樣に對して濟ない樣な氣がしましたので、急いで家に入つて、縫物に取りかゝらうとしますと入口にあつた蟀蟋籠でキリーッタッタと、さも暑苦しそうな重たるい聲で。すると、弟は思ひ出した樣に「お母樣、今日蟖に餌を入れて呉れて………」「アヽ上げたよ………」と畑より遠い返事。三時が鳴る。ぎりぎりすは又鳴き初めた。オ、暑い、トットッと汗が出る。あゝ畑にいらつしやるお母樣は、どんなかしら！

（雨評）一寸面白い可憐な情景をうつされたが、雖がまだ推敲が足らぬ。

○鎭守の杜　岩代　木内しのぶ

夏つ日の影も得さゝぬばかり、中空高くそゝり立ちて、いや茂りに茂り積りたる鎭守の森ばかり、靜けきものは他にあらじ。春なれば、咲き盛りたる梅の林に、月の光は限なく冴えて、さながら氷にも似たり。誰が家の兒ぞ、玉笛嚠喨として或は高く或は低く、夜の空氣を渡つて、絶えては續く妙音幽韻、浮世の塵もしばしは清め靜めらるゝぞかし。いやが上にもひろごれる葎の、踏

みえる丶一足ごとに、はら〳〵と朝露こほる丶あした、宮守がやぴらでの音を聞くは、分けてすが〳〵しき極みなりや。

今は眞白に咲きみだれたる卯の花に、月はなくて、杉漏る月の光の匂ふばかりなる、何所の小田に鳴く蛙の聲ならむ、かすかにゆるやかに、からころと玉を轉はすが如き、あはれにもいみじきその音色は、げにや天にもかよひ地にもとほるらむ。日ざかりは、杜に湧く涼風の身にしむばかり涼しくて、蜩の聲さへ打ちまじる、ことに靜けく、この世をはなれて、無念無想の界に遊ぶ心地す。

（雨評）併はやさしくすなほにはあるが、少しく新しいところが欠けて居る。

〵〵〇酒宴　　翠柳女史

赤蠟の灯影、祝歌に揺れて、緋牡丹をあざむき、瑠璃色の新疊は春の海原にさも似たり、

と見る彼方、孔雀を染めし袂の、さと開きて、胡蝶の姿したる乙女の舞ふや、丈長き友染の袖いともしなやかに、清韻朱盃の甘露に刻まれて、金屏に揺らく蘭麝の香。

（雨評）詞に花はあるが、これだけでは、一篇の文としてはものたらぬ。

〵〵〇（岐阜提灯）　横須賀　渡邊比佐子

浦賀へ通ふ辻馬車の礙むさうな喇叭の音も、暑い路傍の埃も、何時しか消えて、四面は靜かに朧の幕の中に包まれて行く、衣笠山から滑つた夕風は、彼方此方を漂うて、近く軒から軒を傳つては行く、何共言ひ樣のない物うい心地が、頻りに其れからそれへと湧いて、自分で自分を襲ふ樣である、弟が打つてくれた水の雫は、低くからぬ夕顏棚の葉裏まで濕うて、殘んの暑さを庭に落して居る。

今しも捲き上げた青簾を結んで、そして恍惚りと其庭の面を見守つた姿は、聞くともなく耳を傾けると、村外れの方から、盆踊りの聲が手に取る樣に聞える、其聲は段々近寄つて來る。嬉しい樣な樂しい樣な唄ひ振り。うら若き男の子女の子ら、戀の暗路にあこがれて、數多の輪を作つて、共に唄ふのであらう。

嗚呼!!!されど〳〵、自分ばかりは嬉しくもない、樂しくもない、却て其れを聞く度に、過ぎ去つた悲しの〳〵運命を呼び起す樣。人の心も知らないでと腹を立つる事もならず、さりとて、餘り無情なのは人の心かなと、恨めし氣に一人淋しく椽の柱にもたれて軒を仰ぐと、風も消えたのに徒に岐阜提灯の揺り初めて、自分の傍近く迫つて來る樣。何んとなく悲しさの增して來て、思はず聲を上げて、

「御姉樣!!さぞ御一人で御淋しう御座いましやう、出來得る事ならば、妾もせめて御傍にまゐりたう御座いますが、其れもならず、唯々日毎御慕ひ申すばかりで。けれ共〳〵、决して御心配なさらない樣に、何卒心おきなく極樂とやらに御座あらせらる丶樣、御父樣や御母樣は及ばずながら妾が……」と我を忘れて人なき折りを椽に崩れて忍び泣く他、何事も知るを得ないのでありました。

踊の聲は何時しか我家の前を過ぎて、亦もや一段高く唄ひ出して、村中を徐ろに練つて行く。

誠や、歳月は水の流る丶が如きとか……………

軒端に釣られて夜もすがら風に揺らる丶岐阜提灯は、はや三度年を重ぬれ共、一度だに便りのなき御姉樣の旅路の長き哉。長きもことわり、歸らぬも無理ならず、丁度都ほとりでは、今日は上野明日は向島と、花咲く春の眞盛りを、ふとした風の心地を假初め

の枕に置いてより、日一日と重りつゝ、終に〳〵卯の花下る其夕「靜さん左様なら……」の一言を浮世の名殘にて、黄泉の客とはなられたのである。

其れからと言ふものは、四の方に星の數一つを增して夜每〳〵を輝いで、一夜とて沒した事はない見受けない事はない。わけて今宵は一入高く、異に閃いて見える。

仰げば仰ぐ程、大きく、高く、殊に輝いて、數萬の星の中に圍まれて、村外れの常林寺の森の上あたりに彩しく迫つて來る様……。迫つて來るもことわりならん、御姉様の御魂は、三年が前彼處に深く眠られたのである。かゝる夜などは、一入迫つて來る様に見受ける。

其れに付けても思ひ出すのは、自分の身上、若しや亦御姉様と同じ様な運命に終りはしまいかと、何時になく弱き心の一入胸に亂れて考へ沈む。

折柄生溫い風は、亦もや常林寺の墓地を廻つて、スツト其所の提灯を掠つて、自分の衿頸を撫でた。ハツと思つて見直すと、何時舞つて來たか螢の一つが哀れにも岐阜提灯を滑つて椽の上に落ちた。モー四方は寂として、虫の鳴く聲だに聞えない、遙に垣根を漏れて、とぎれ〳〵に聞ゆるは其寺の讀經の一節二節。

（雨評）敍景の筆は見るべきものあれど、抒情の筆は未だし〳〵。

〇短文　東京　平塚白百合

今日もまた、わたしは美ちやんを誘うて、主人の家の裏口を抜けて、椿のほろ〳〵と散る戯そひの小徑を二丁ばかり、桃の木の立ちならんだ大銀杏の半ばこげた、廣い〳〵昔の家のあとにくるのである、なぜかなつかしい父母にでもあふやうな、きつと悲しい時苦しい時、暇ある毎に、此處にくるのである

世の人は誰一人暖かい同情の目をむけるものはない私、却てあさけりの色をもつて擯斥される境遇のわたしには、こゝは實に樂園とでもいふのである、今やしなはれゐるうちとても、二言目にはがりの子だからと、きくもつらいそのこと葉、けれど〳〵、私には耳に入らぬ。私にはそれは〳〵やさしい兩親であつた。それがどうして人につらかつたのか、お金のない時、かしてやる、かへつて情ふかいのではあるまいか。それがどうして人にうらまれて、母さまは正氣を失うたのであらう。遂にあんどをけつたとかで、家も父母も何も灰としてしまつたけれど、此處には父さま母さまの靈がのこつてゐると、人々がいうてゐる、それ故、いまだ家もたゝぬ私は、每日此處に來て、あのやさしい父母にあふつもりなの。

なゝ、美ちやんがなき出した。お乳がほしいのかしらむ。またあすもなつかしい此處にきませう。

〇妾の思出　大分　賤の女

妾が父は、今より十餘年前牧畜事業の志を抱ひて、母と二人、數千町の原野ばく〳〵たる此處九重の山の裾野に、居を移したのである、それで、妾は、二人の弟と共に祖母の許で地方の小學校に通うてゐる内、首尾よく試驗もすんだので、祖母と共に姉弟打揃うて、明暮なつかしく思うてゐた父母の許に引越したのは、青葉がくれに郭公なのゐる頃であつたが、其時はもー新しい妹が二人も出來て居た。父母の住家は、とある溪流のほとりに新らしきかやぶきの家。谷をへたてた向ひの牧場には、いく百の牛が群れてゐるなど、まるで西洋の畫を見る様、妾は父と二人ある時は、（蕨採りて畑に出で、ある時は牧場の見廻りに日を暮してかへつて見れば、母は毎度（ふろ）をたいて待つてゐるので、一日のつかれもどこかにきえて、一家團欒破窓の下に歡ばなしてたのしく暮らすのが、常であつたが、此のたのしみ待も夢の間、丁度其秋半、牧

塲の草もうら枯れて紅葉散る頃、おそろしい病魔は遠慮なく姿の母を奪うた。實に〱昨日まで笑顔うつくしかりし母が、今日は彼の世の人とならんとは、いかに前世の約束事とは云へ、天もあんまり御無理ではあるまいかと、心の底から悲しかつた。ことに年老いし祖母の歎、事業中の父の落膽、ああ今でも目について居る。最早其悲しみも、四年の昔の夢となつて、父が永年の辛酸に、目的の事業も大部成功して、一人の弟も來春は業卒へて、學校を出る。母の顔も見知らぬ一番末の妹も、早や小學校に入學するやうに成つた、今日明暮事業の成功子供の生立ちをのみ樂しみにして居た母が、生きて居たならば、ああ…………。

〇五月雨の一日　富山　夏子

二三日前より瀟々と降り續く五月雨、今日未だ晴れやらず。花もて滿ちたる我庭の、いつしかなりし青葉には、雨しみて露重げにうな垂れてゐるさま、又背戸のふさふさたる藤の花の、ひと雨毎に亂れ散るさま、何れも淋しうてあはれなる景色にこそ。折柄、霽の絶え間より、郭公の一こゑの聞ゆるもまたあはれなり。獨澄み渡りたる池の隅に、今を盛りと咲き匂ふ菖蒲の花を五月雨の晴れ間に眺むるは、いとおもしろし。緋鯉の浮きつ沈みつ、なげやりし麩を掠めとり、急ぎ沈むも又をかし。……雨蛙の呼ぶ聲に、またも降り出しぬ。

さみだれの頃とて訪づる人もなく、獨り小暗き室に閉ぢ籠れば心何となう晴れやらで、物憂し。頭のみ重りて、書物を繙く氣にもならねば、一奏慰みみんものと、箱中よりバイオリンを取り出し、先づ君が代を奏じつ、曲の將に終らんとする刹那、郵便のどなり聲。取る手おそしと打見るに、なつかしき百合子の君よりのお玉章いとゞうれしくおもしろく拜し、さて返しの言葉にと筆を染めぬ。

軒の玉水の音しばし絶えて、微かに聞ゆる蜻蛉ツリの歌のこゑ定めし一日の課業ををへて嬉しく歸る弟の歌ごゑならん。………雨歇みたれど、空はれず。明日の空の色こそはいかに、…………

〇日記の一節　神奈川　飯田榮子

久しぶりにての天氣なり、早川のあたり遊ばむと、光子の君おとづれ玉ふ。さらばとふたりつれ立ちしが、わざとうら道ゆきて、水車まはる小川のほとりに出でつ。露にぬるゝ道芝ふみしだきつゝ麥の穗黄ばみたる田の畔をまがり〱てゆくに、水のせゝらぎゆるくはたはげしき早川の川邊に來りぬ。よほどの水上なるらし、見渡せば人影もあらず。橋はかすかに見ゆれど、つゞきて行かるゝにや知らず。さりながら、ゆかるゝまではと川に添ひてゆかむと、小褄かゝげつ名も知らぬ雜草生しげりたるに、蛇抔の出もやせむとあやうき足もとふみしめゆけば、石にまつはる葛かづらのやら〱芽立ちたるなどのうつくしければ、ふむに惜しくて、ひとつ二つ折りとりぬ、やうやく人影も見えたり、橋も間近くなりたれば、うれしさに先づ一やすみしてと、平らたき石の上しばし休むうちに、ぬば玉の黑かみ背に長く下げて、燃ゆらむ緋の湯卷たゞ一つしたる若きをと女いまし水浴をはりたると見えて、夕日なゝめに背にうけて立ちたる姿の、さても大理石もて刻みたるもかくまでにはと、暫し感に堪へてありしが、ゆるくながるゝ初夏の川淼に水青くして底さへ見ゆる美しさに、全身をひたしての水浴、さすがに田舍なりけりと思ひつゝ、アゝわれに繪ふで持つ才あらば畫にもなさむ、詩作る幸あらば、歌ともなさむをと、いと〱悔みて、さりばゆかむと立らあがる時、彼乙女や心づきし、顔あかめてうつむきたる姿の、また一しほの艶なるに、ます〱ゆかしく覺えつ、いつまでもあかぬうれしき眺めなれど、新月白う山のかなたに香ひそめたれば、おそくならぬうちにとかへり路にむかいぬ。

〇轉學の友に　名古屋　高津桑子

拜啓、御前樣には此度び京都へ御轉學の由、誠に殘念に御座候、こなたに取りては、一月の頃よりして、はらからも啻ならぬ睦み

合ひ足らはぬ姿を何くれとなく、導き給はりし嬉しさ、誠に御前樣のみ杖とも柱とも、賴み參らせて行末永く御敎へを受けんと樂しみ居り候ひしに、如何に御家の御都合とは申せ、今御別れまゐらす、心の程、たとふ可くも候はず候。然れど此折に少々のかなしさを思ひ出づ可き時には無之く、只この上は日頃のさかしき御氣質もて、いそしみ勵み給ひて、とく學びの玉を得給へかし。不一の姿の中上ぐる迄もなく候へ共、人は交も友により善惡をならふとか申せば、かりそめにも、惡しき習ひに染み給ふことなく、又た暑さ寒さのみぎりには、御前樣は御騷き御身なればよく〳〵いとはせ給ひて唯一と條に志す方に御勉められ、三とせの春秋つゝがなく、早やく過ぎてのどけき風に錦の袖輝やかし歸り來まさん事を指折り數へて待ち居り申候たとへ都の友數繁くとも深山の草木捨て給はで、宇治川の淸き流れを汲みとりて、折々は都の樣など御もらし給はゞこよなき幸になん。

これにて御前樣と樂く共にする も終りかと思へば、申上度事山々なれど、なみだにむせびて、申上ぐる事あたはず候まゝ之にて。

追て別封御送附申上候寫眞はこの間撮影いたし候ところ、至つて不出來に候へ共御笑までに御目にかけ參らせ候、全く寫眞師の罪には候はず、生來の見苦しき容貌をそのまゝと御笑ひ下さるべく候。御前樣にも御惠み給はらば、大慶に候。

先づはあら〳〵かしこ



新體詩

文學士塩井雨江先生選

天

綠陰の小川

美濃　松田君子

春は、ぬるめるその水に
裝裾かゝげて君とわれ、
夏は、一葉のさゝ舟に、
遠くはるけき望をば、
秋は、悲しき水の音に、
戀も望も萎れはて、
冬は淋しき村しぐれ、
落葉にうづむも屑とも
あゝ葉は落ちて花咲きて、
今日綠陰のしたがくれ、
夢多かりしそのかみの
復た君がへるすべもなく、
昔を思ひ今を侘び、

ゆるく小草をわらふ時
根芹あさりし所なり、
流るゝ水のゆる〳〵と、
問ひつ語りし所なり、
亡き君忍ぶ枯れを草、
浮世かこちし所なり、
つく〴〵世をば厭ひはて、
ならばと思ひし所なり。
花また散りて葉はさして、
川は昔にかはらぬを。
身は、いつしかに年ふりて、
水のみ淸く流るなり、
獨り岸べに佇めば、

はら〳〵落つる木々の露、わつき涙にまじる哉、

(雨評)思想の構成に、工夫のあとも見え、筆もすなほにおとなしく、よく整ひたり。情もやさしくこもりたり

地

花賣女　美濃　松田きく子

結ふ紅紐は白菅の、笠にかくれて行く町や、
水播く朝の涼しさを、わね樣冠り露濡れた、
肩揚とれぬやさ肩に、かづく花箕は重かろう、
『花よ召しませ花よ花。私が賣る花十二種。
今朝浅茅生のうす月に、水雞が叩く草の戸や、
せかれて起きた短夜の、夢路に結ぶ花束は、
深山白百合、車白合。母が生活の手助と、
花は賣れども、花料に、買はれぬ帶の博多百合、
飴賣る笛の痩村に淋しう咲けど雛芥子の、
紅き白きに取交せた、ふたば葵も時の花。
門の垣根で昨宵折つたうつぎの花に取添へる
沓ばかりの紺菊に、夏の香は若かろが、
今は末なる麥秋に、面影やれた紅粉の花、
これは深山の鹿子百合。父が癒らぬ夏病みに、
兄はお山の石切へ、行かざなるまい朝路の、
別れの澤の白あやめ。撰り分けねども紫の
色はほに出る杜若。引きまどはずと一束は
樣が撰みに任せうを、凋むに早い芍薬の
露の干ぬ間の生命をば、召すも情よ、疾く召せや」
花呼ぶ聲の里訛り、可笑しと笑へば、嬌羞しむ、
お雪、十三、野娘のまだ白粉も慾しからぬ
女氣すてた男髷町に名代の花少女。

(雨評)優美なる花賣女とは誰れの眼にも見え候はむ。

人

雲の峰　東京　鵜澤佐多子

蜥蜴も眠るひる日中綠をわたる風死して、
斃に落つる火のそ矢は、地上の綾を射ぬく哉。
其父の矢のほちからに、涸れし澤沼の水凝りて、
築きあげけむ雲の峰、天の鬼神を招ぜむと。
金色まばゆき笹椽や、火山の石にあらねども。
觸れは爛れん氣色あり、雲云ふこそをかしけれ。
一瞬の後崩るれば、乾坤とゞろの雷の音、
遍く下界に襲ひきて、萬衆にをののき與ふるよ。

有情の沖にうかびでは、人待つらむの處女子の、
瞳に憂わらしめて、白濤遠く頽れ行く。
有情が峰にかゝりては、笠緒のにほひ厭ふ子に、
涼しき風を送りきて、青田に雨をそゝぐ哉、
憂きと喜び脊におひて、翼自在にかけり行く、
雲よ、眞夏の魂ならば、夕べの月を蔽ふなかれ。

(雨評) 少しく歌ひこなせぬところあれど、想像のはたらきたる跡と、意匠をこらしたるふしあるところを見るべし。

秀逸

◎折にふれて　大分　佐藤家子

雲雀なく野に日は落ちぬ、いざとて、父は鋤を肩、
我は牛をば引きつれて、歸へる家路は美しき、
花の小道の幾うねり、さすや若葉の森がくれ
わがやの方を見わたせば、藁の軒ばにうす煙り、
絹子がつみしさはらびに、愛とし次郎が釣の得物、
秋の餠してふろたきて、それよ、母様待ち給ふ。

(雨評) 可憐なる歌に候かな

○◎白蓮花　東京　翠柳女史

琢磨が筆の彩と見し、五彩の雲の色にぢれ、
甚五が鑿の音と聞きし、杜鵑啼して夜の雨、
生爪とぎて驅けめぐる、夜の魔神のうづ黒き、
息吹の中にたゞ獨り、惠の露に生を得つ、
自由の聖歌高らかに、歌ひやいでん白蓮花。

(雨評) 想像の力は見ゆれど、感情の力の足らぬなをしむ。

○◎失題　東京　平塚白百合子

馬子を書にして土手の上、峠の茶やの店さきに、
赤い前掛なげしまた、小手を翳してまぶしさう。
わしが可愛いあの姫小松、
よそにやる氣はさらにない、
霞つたうてひなうたの。
サット紅さすかたほゝに、笑をうかべて更にまた
見入るゞとへ鈴の音が、たッシャン〳〵くる。

(雨評) 浮世節に似たる歌に候かな

○◎(行く春)　相模　春野浪子

春は行きけり春は行きぬ。妹が愛する秘め日記、
殘んの春をしみつゝ、昨日も今日も亦明日も、
筆にまかせて拾ひ行く、されどされ共情なや、
春は妹を見捨てつゝ、若葉の籠にうち乘りて、

御山の奥の雲の陰。　春は行きけり春も行きぬ、

（雨評）意匠は面白し。今少し調に發表に念を入れてよまば。はじめて面白き詩をならむ。

◎郭公　　東京　井上千代子

彩ゆるく帆かげよりして、波寄する磯は暮れけり、
小石にも大き岩にも、寂し音の忍ぶけはひや、
つくづくと故郷を思へば、慈しみいと深かりし、
母君の影、わりわりと　海原の闇にうつりつゝ。
「母君」よ、呼ばんとすれど、夢のごとはた幻のこと、
憧憬のこゝろ殘して、いたづらに影は消えにき。
ふり返へり陸地を見れば、若葉かげ黒き雲かげ、
月かげは燦らと照りて、ほとゝぎす、あゝ一聲。

（雨評）情はきこゆれと、發表の法まだしきふし多し。

◎野にたちて　　下總　秋月廣江子

拾てゝ嬉しき者ならば、月は今宵ぞすむべきに、
泣きてはれゆく物ならば、袂は今ぞ安かるに、
望も戀も葬りて、野邊は昔のまゝなれや。
むかしのまゝの野邊なれば、人のやつれはとふ勿れ
眠るが如き汝なれど、十五の夏をほゝゑみし
わかき姿を思ひ出の　そが胸ふかく刻までや」

くりかへし見る夢心地、夜の色黒うせまりては、
すがる方なき寂寞に、ひとりのかげは細うして
御名よびてもこたへなき、さみしみ強うをのゝかし…

（雨評）言ひまはしを巧みにとのみ心がけ給ふ勿れ。それが爲めに意味のあまりに朦朧になり且つ情のこもらぬふしあり。

〻〻〻〇露と花　　陸前　山形こう子

花に結びて花にきえ、露に匂ひて露にちる、
奇しき物は、世の中の　露と花との契りかな
花な命の露の身は　風なかなしみ、ふく風に、
はなは散らむと心おき、風な吹きそと願ふらむ。
露を力の花の身は、風を悲しみ、吹く風に
露や消えむとかき亂れ、風な吹きそと祈るらむ。

（雨評）發表を今少し工夫あるべし。風といふ調なあまりに亂されたるところ、うるさき心地す。

〻〻〻〇廢園　　飛驒　南みね子

欲の音も絶えはてし、荒れたる園のをちこちは、
たゞいたづらに蜘蛛のいの、枝と枝とにはりかはし、
木々の緑の色ませど、木陰にいこふ人も無く、
訪つるものは、もち竿を　遁れて來鳴く蟬の聲。
河骨はちす枯れはてゝ、池水や、只に濁りて、
落日の光をうけて、ゆたけに咲くや白き蘇の花。
みきはにたてる石燈の、苔を頂き、あはれにも
ちぎれ雲とふ大空を　仰ぎてたつや、淋しけに。

名も知知ぬ白き花びら、
音もなくして苔の上、
物に音なき廢園の、
胸に痛みを覺ゆとき

風なきにちる二つ三つ、
夕べをせまる寂寥に。
境をしめて、只一人
塒定むる小鳥來ぬ。

（雨評）　廢園のさまは見ゆれど、とかく並べたるのみにては、未だし。なほ深く其處に　感情を動かしてよまざるべからず、

○姫百合　河内竹内久子

憂世のちりをよそにして、
咲くや淸けきその姿、
汝れかうなしはひくゝたれ、
なれが色香はきよくして、
汝れが姿のやさしさよ、
名もなき花も誇る世に、

ひとり淋しき谷蔭に、
げに姫白合よ姫ゆりよ。
ほこらぬさまもゆかしげに、
心の底の尊さよ。
なれか心の氣高さよ、
あゝ姫ゆりよ姫ゆりよ、

（雨評）　なほ感情想像を活かす必要あり。

○『朝』　岩代樹口せつ子

天つ使はかへりたり。
朝空指してかけり行く。
紅うすき唇こし
靜かに開く牽牛花の、
盡きぬ泉のおもかげを。
天空に出る星のごと。

草にしたゝる水色の。
光の羽のかろきかな。
若き望は滿ちぬらむ。
花の盃あふれたり。
人の夕にほの見せて。
稚子の瞳かゞやけり。」

（雨評）　一節〳〵の詞には詩味あれど、一篇としてはまとまりわるく、意味やゝ明かならず。

○春の夕川　美濃若園照子

あさみどりなる新草の
そか永劫の囁きは
失意の子らよ、夕まぐれ
汝が精靈に微妙くも

なかを流るゝいさゝ川。
神のみ聲も宿るなり。
この福音に耳をかせ。
希望の光明みとめなむ。

（雨評）　意は聞えたれど、これだけにては說明の如くにて面白からず。

○悲報　茨城今泉磯千鳥

吾夫と呼ぶを指折りつ
未來を確とちぎりしも
かくと知らずやわが君に
かくと知らばやわが君の
誰が傳へしぞ此の悲報……
馬公港の沖風きて
上を翔りゆく松島艦……
戀し故國の富士ヶ嶺を
故國の空を仰ぎつゝ
未來の夫も……われも亦
戰に死すもうらまれど……
四支は碎かれ五體さけ、
藻屑と消えし吾が夫――
あああゝ夢よ夢なれよ、

待ち敷へしも、夢なれや。
あゝそも夢か？幻か？
一度なりとも寄りそひて……
淼下に侍りて死なんもの……
あゝ夢なれや夢なれや。
海ゆ眇渺――白浪の、
海に倦きたる艦員の、
眺むは何日か今日か明日……
胸躍らせしも瞬間よ。
國に殉すをいとはれど、
平時…「火藥の爆發」に、
馬公港の海底に……
あゝいとほしむわれはしも。
馬公沖の此の悲報？。

○折にふれて　横濱鈴木まつ子

とはにいはれぬ我が思ひ
いひにし人の言の葉を、
つゆもたわゝに咲きいでし
いとゝおもひのまさるのみ。
をみなこゝろの淺はかに、
とてもかくても世の中に

いはぬはいふにまさるとや
いまこそおもひあたるなれ、
恒の山吹みるにつけ、
何も運命と思ひても、
心になけることもあり、
ありける折は何事も

うきのたえせぬものぞかし。
身を知る雨のかゝりきて。

○われ病みて

[illegible]間ほのめく月姫の
榮えし思ら一時や、
つと咳き上がるたまゆらに、
嘗ては匂ふ花露に、
甘さに醉ひぬ——、
春を中にはわ病みて、
惜しき心に亂るゝを。
拭ふ袂の濕ければ、
君は恨のとけじとや、
淋しう逝かんおかつきは、
駈け行た月は冴ゆれども、
地に敷く影も淡きかな。
淡きは影よ、まだもゆる、
再び吐きぬ、眞紅の血——

○岸邊

生れしははてなき「時」の
高帆張る船もしづみて、
夕潮に煙るゝ岸邊。
花燒る岸にすわれば、
諸人にひそめる秘密、
生れしも光なき世に、
やさみみの戀にうろほふ、
まぼろしに迷ふすべなし
かはきては火の燃ゆる如
あし孤獨行てなき「時」の

かく雖さへに時ならぬ

大阪　木村春江子

[illegible]し眉にあくがれて、
冷たき内の身にしみて、
あなまた吐きぬ眞江の血。
君が惜の口つけの
夢なりし。
絶ちしよ、きづなしかすがに、
包み締めたる涙ゆゑ、
とけぬ恨を身にうけて、
ゝたてそしらむわが情。
浮世短う生るれば、
思の色はかたとしも、

金澤　佐藤しける

泡だてる流轉の岸邊、
石棺いく世の夢の、
夕闇にせゝらぎ低う、
風わたるし(孤獨の傷は)
とこしへに癒えざるいたみ)。
人知らぬ光としたふ、
淡夢も破らと知れば、
さしぐまる寂の涙のゝ
ほふち膨れ斷はたゞれぬ
うづしほに此身たゞよふ

短歌

貴族院議員
子爵　入江爲守先生選

天

水鶏なく里川堤雨晴れて
涼しく宿る三日月の影

岐阜　露木とし子

地

うきふしもうれしきふしもまたしらで
つのぐみ初し千代の竹の子

東京　吉岡総子

人

何事も遅れ勝なる我が里に
はやなきそむる山子規

横須賀　高橋つね子

秀逸

神戸　今西操子

賤の女かわれをくれしと早苗うゝる
　聲にきわしき畔の千町田
　　　　　　　　　　　　東京　原　三幸子

○

あしたつもしらぬちとせを窓のうちに
　はちのこ松のひとりしめたる
　　　　　　　　　　　　岩代　岸野せい子

○

わすはまた雨にやならん我が宿の
　池のかはつの聲しきるなり
　　　　　　　　　　　　東京　平塚いと子

○

みとりなるつゆのこほるゝ心地して
　青葉にかゝる雨の涼しさ
　　　　　　　　　　　　對島　畑島郁子

○

世の中は花も紅葉もしばしにて
　松そ千年の友にはありける
　　　　　　　　　　　　名古屋　山根しげ子

○

そま人もいるをゆるさぬ御林に
　夕ぐれやすく歸へる群鳥
　　　　　　　　　　　　同　　山根しづ子

○

おそろしき針を持ちたるくま蜂の
　やさしき花をなとこのひらん
　　　　　　　　　　　　美濃　傍島みゆき子

○

軒端なるつはめの雛は巣たちして
　庵はさびしき夏の夕くれ
　　　　　　　　　　　　埼玉　金子律子

○

五月雨や雫の音もせぬ雨は
　道行く人のかさにしらるゝ
　　　　　　　　　　　　東京　牧千春子

○

夕立の名殘りとゞめてくれ竹の
　風にそよぐも涼しかりけり

甲

田家興

桑もよしこかひもよしとほこりかにかたる翁のひげうつくしき　岐阜　傍島曉子

○

更ぬだに旅は物憂き黄昏に驛路遠くかれぞ聞ゆる　磐城　木幡きよ子

○

いかはかり世のなみ風にあふとてもたてし操は千代もかへせし　神戸　梶原京子

○

家のほとり群れて烏のなくからにこゝろにかゝる故郷の母　横須賀　柏原美奈子

○

山をぬくますらたけをも處女子のつくすまことに袖ぬらすらん　名古屋　熊澤かぎ子

○

有明のつきのさしたる柴の戸をたゝくくひなにめはさめにけり　陸前　前田河千年子

〇

ほとゝぎす花橘のかほる夜はむかし忍ぶの音をぞ鳴ける　神戸足立あさ子

〇

蚊やり火の煙りのすゑに亡き人の面影しのぶ夏の夜の月　神戸井口その子

〇

入相のかれも木立にたそかれてすゞしき風の小すに吹き入る　須磨有村とみ子

〇

さらぬだにさびしきものを夜もすがらのきばに通ふまつかぜの音　須磨有村芳子

〇

よもすがらねられぬまゝにまとをせばつきぞさえたり淡路島山　須磨有村繁子

乙

〇

日毎〳〵水やるつとめおこたらず鉢のあさがほ心してさけ　美濃長濵園子

〇

涼しさにかへり路わする橋の上人をへたへて月はのほりぬ　近江柚木音羽子

〇

涼しさにいつか寢入りて山がつの斧のひゞきにゆめ醒めにけり　下野井上俊子

〇

旅人のひるねの夢を結ぶらむ流にそへる松の下かげ　新潟岩本芳子

丙

爽すれの音にかよいてさや〳〵と麥生をわたる風ぞすゞしき　東京神田けい子

水そこにもえ出にしと打見れば川邊になびく柳なりけり　東京小林春子

讀者文壇

百千度いさめは云へと海見えず父がみ墓にぬかづきてなく　美濃平岡かん子

夏　月

みやしろの古松ほりしたまり水たでさく中にすめる月かな　美濃服部せき子

〇

温泉を出て風に吹かるゝ溪川の向の岸の藤波の花　相模藤原下枝子

〇

病める子の逝くを夢みて起き〳〵に御明りともし神に祈りぬ　相模藤原かし子

山家にありて

深山とて篠つく雨に窓たてば峰の松風身にせまりつゝ　相模中島類子

夏日舍

あし引の片山里はにぎはしき蟬とる子らのよびかはしつゝ　東京白井はな子

夏　旅

ふるさとの母にあはんの旅なれば夏の暑さもいとはざりけり　東京白井岑子

〇

何となく物思はしき夕ぐれを雨にちるなり山吹の花　陸前山形こう子

〇

路はん人なきをりのつれ〳〵をたゞ水莖の跡に流して　越後水野やすゑ子

〇

瘦り合てひるもをぐらき神垣にところなしめてふくろふのなく　東京小島榮子

〇

あまつ水くだし給へと神垣にいのるのりとのこゑのはけしさ　靜岡河合泉子

〇

誰かときしひもかと見れば草むらににしきの蛇そはひいてにける　東京西村直子

〇

としふりし大木やふすと見るほとにもこよふをろち動いでたる　靜岡中村しか子

〇

世に出ぬ物とはなれと舞の袖つゆもうごかぬ心なりなり　埼玉横田政子

讀者文壇

○　埼玉　横田やな子

賤のめかがせくりさして機おりていとまなげなる夜半のともしび

○　埼玉　横田稲子

えのしまの岩にたてたる高とのは波うちつけに涼しかりけり

○　東京　富永久代子

夏の日やせき堀の水絶々にもがき死すらし雑魚一ツ飛ぶ

○　神奈川　飯田榮子

鬼あざみやさしき人の手にふれてとけに得たてずしほれはてけり

○　横須賀　渡邊比佐子

松風に涼しき畑の村つゞき村に人なく屋根に網見る

○　横須賀　渡邊ひさ子

弟が切りて捨つる紙屑の蝶々となりし夢を見し哉

○　下野　井上尚子

茂り合ふ木々の若葉にうふすなのやしろの塔もみえずなりけり

○　岩代　岸野菊子

いましめの石は立れといたづらに犯す人おほき彌生のころ

○　岩代　岸野常子

さとの子が川狩すらし松明の影おしはらにみえがくれする

○　兵庫　古東靜子

夕はえの雲くるわしきなちの空老松たかく崖ひとつみゆ

○　兵庫　古東すみ子

夏の夜に船こぎ出でゝ思ふどち硯の海をおさるたのしさ

○　松山　田村多豆子

綱をふきわくる山のうすけふりふかく心にかゝる世ぞかし

○　松山　上原のぶ子

春秋のきりもかすみもよそよりはふかくながるゝ川づらの里

○　埼玉　横田秋子

夏ふかき野寺の門の老榎木古葉こぼれてせみのなくなり

○　下總　秋月廣江子

ながめなき所なれとも一年の日記うつめし土地すてがなき

○　東京　石田りつ子

いとしくもかあいかりけり三人までうせにしあとに残る一人子

○　能登　栗倉一子

人の世のからき情に泣く度に覇き生れのそぞろ悲しも

○　東京　紀澤貞子

洪水あと泥足のこる破れ椽の日向に妹は人形ほして

○　岩代　岸野つれ子

さなきだに廣からぬ庭にさま／＼の草木なうえていやせはめけり

○　美濃　酒向ますえ子

君を思ひ張りさけなんとする胸を押へて立てば時鳥なく

○　美濃　酒向京子

美しの君の彈きます箏の音のたえ／＼聞こゆ五月雨の窓

○　美濃　酒向うた子

廣き葉の葉裏に夏の雨ふりて丸窓ちかくかたつむり這ふ

○　攝津　磯村なほ子

杣人がいかふあたりの焚と見えて美くしにつゝじの花

○　群馬　鶴子

ゆく春を名殘り惜しとや鶯のみどり葉しげる梅の木になく

○　東京　平塚つゆ子

山吹になごりのこして梅雨はれぬ蛙の聲のおちこちにして

○　神戸　千鶴子

墳墓の並へる中に咲き出てゝ淋もつらしき夏草の花

○　東京　倉重千惠子

涼みにも出す終夜賤の女はかやり焚きつゝ夫を待つらむ

○　東京　市川義子

花の露芝生に散りて有明の月かげ匂ふ春のあけぼの

○　名古屋　高津くは子

ありく＼と我が亡き母を偲ぶ夕靜心なく山吹の散る

○　東京　平塚糸子
いその家の貝に火ともす夕ぐれを風に流せて螢よりくる

○　東京　平塚白百合子
椎の葉の朽ちてはしづむ古沼のくしきまぶろなくしき鳥なく

○　横濱　鈴木まつ子
法の師のきやうよむ聲にほとゝぎすあはれをそへてなきにける哉

○　美濃　松田君子
曉の風に思ひはいやまして怨みは深し軒の若竹

○　美濃　松田文子
舟とめてしばしのとけき月や見んこの卯の花の露の岸べに

○　美濃　松田きん子
雨やみし若葉のもとに灯をよびて夕べ美しき初夏の風

○　美濃　松田文子
朝顏の二葉に絲は別れつゝはや鳴り渡る初瀬の音

○　美濃　松田信子
卯の花に心はそはで春逝きぬ病みて雨きく夕ぐれの窓

○　美濃　松田昌子
心まで涼しくなりぬ水うちて植木並ぶる夏の夕ぐれ

○　茨城　今泉千鳥子
わたつみを漂ひてきしわが小舟くが見しときの心うれしも

○　東京　高橋珍子
うつほともなりたる庭の楓さへ若葉しおめりあはれ人の身

○　岐阜　露木とし子
きにぬりのあららき高く見えそめていよゝ高き座主の森

○　東京　中村ちよ子
ともすれば赤き心をよそほへと紙よりうすき今の世の人

○　美濃　若園よし子
朝風に谷の若葉の露ゆらぎに啼く山鳩の聲ほのかなり

○　美濃　若園すみれ子
わが家の門の小川よ絶間なく何の思ひをひとり啼く

○　美濃　若園清子
夕日かげ草の月ほそに消えゆけば愁もつ子の影もきえけり

○　美濃　酒向菊枝子
日は西の山の端に落ちたそがれて鎭守の森に烏村啼く

○　美濃　酒向道子
永き日をあぐみ〱て橋守のむかしの戀を語りける哉

○　美濃　酒向鈴枝子
竹やぶの物靜なる垣根道里の子一人馬ひきて行く

○　美濃　酒向椿子
いさゝ川流も清く音たてゝあゝ春は今暮れんとぞする

○　陸前　前田河千年子
ゆきかへり人をのせこく渡舟うきよのさまをうつしてそみる

○　美濃　酒向せい子
時鳥啼く音を聞きて山門に想にふける僧うらわかき

○　美濃　酒向百子
白帆一つ二つ消えゆく川面はやみに包まれ水雞の叩く

○　旭川　佐藤央子
水上に花やさくらん衣あらふ左手にかゝれる山櫻花

○　美濃　山邊きり子
人に秘めてみくじをひけば再びも吉といでけり幸よわが戀ひ

○　美濃　藤引くわ子
戀ならず戀も叶はず春くれぬ來む夏秋を如何をくらむ

○　神戸　足立あさ子
抑く戸を夜毎水雞はさがしけむ名に戸隔しの山本の里

○　岐阜　森川くわ子
杜若花のむらさき洗はれて池はそみなんつらき雨にも

○　神戸　足立ふい子
花衣やゝ惜みつゝ着かふれと蟬の羽袖は涼しかりけり

○　清國　廣田つる子

讀者文壇

うつくしき花にもまさるみこゝろの移り香うれしきみの玉章

須磨 有村紫芳子

○

すみだ川ふれまつほとを青はこしわかたもと吹く夏の夕風

須磨 有村芳子

○

ひるも猶おくらくしける大原やさか野のあたりほとゝぎすなく

越後 星野きよ子

○

あさかすみ籬はわきて布のき哉ゆたけきけふりたちやそふらむ

美濃 目島眞砂子

○

なか人のをはに心をはげまされかへる川添ひ雨ふりいでぬ

美濃 芳翠敏子

○

道のべに一人なき立つ迷ひ子の家居やいづこ夕ぐれの鐘

飛驒 南みれ子

○

夕月夜み堂をめくる古池に法の蓮花さき匂ふ

岐阜 中村はな子

○

夕月夜馬子のたみ聲聞ゆなり青葉にくらき追分の道

東京 平塚白百合子

○

荒駒子の野走りすがたそのまゝの雲わきたちぬ青桐の風

兼題和歌

八月｛撫子・晝顔｝

九月｛初秋風・月前雁｝

俳句

内藤鳴雪先生選

天

青嵐俯となりたる人戀し　横須賀 齋藤松代子

地

夕顔に水やる姉と妹哉　神奈川 柏原みな子

人

名月に馬の嘶く牧場哉　横須賀 高橋つね子

五月雨や灯火暗きかゞり船　山梨 高瀬靜江子

蛇祭る里の社や桃の花　東京 中川ゑい子

白菊の露を吸はまく思ふ哉　名古屋 高津久和子

下駄はいて女も登る春の山　札幌 佐藤千代子

涼しさや草を道ひ出る螢二ツ　神奈川 鈴木なみ子

涼しさの夢は龍宮に遊びけり

韓ぴ庭の君にさしけり夏の月　横須賀 高橋つね子

紫の咲嬉しき茄子哉

凉し塲やかりそめに賣る蜆貝　美濃 山邊きり子

道端に詩人の家の牡丹かな　同 飾島みゆき子

暖簾は水色にせん夏近し　同 藤引くわ子

夏の月窓に顔出す人は誰れ　横須賀 齋藤松代子

すれ〳〵に君と我とや風薫る
七鳥居くゞれば吹くや青嵐
白妙の袖こそ動け青簾影　岐阜　露木とし子
なつかしき故郷の麥や梨の花
春風にたのしき旅や伊勢詣で　美濃　杉山靜子
青麥や城跡に誰が歌うたふ　岐阜　歌川清子
友禪の裾うつくしき日傘哉　美濃　花園清子
板屋根に松の雫や夏の月　同　若園照子
葉櫻となりて尊き社哉
絵日傘や牡丹見て居る二三人　長崎　秋山虎子
背戸あけて孫追ひ出すや五月雨　紫　汀子
笛の音や若葉にくらき森の中　美濃　酒向道子
雨晴れて傘干す門や燕子花　同　酒向菊枝子
朝風や宮は涼しき青簾　同　酒向椿子
青簾海を見て捲く二階哉　横須賀　渡邊比佐子
短夜の水に船路の明けにけり
竹林に灯のともりけり夏の雨　相模　服部八重子
夏の月金扇淒く光りけり
郭公月に撃して水に影　東京　倉重千惠子
待つ甲斐や卯の花月夜ほとゝぎす
夕里や三日月消えて啼く水鷄
金魚鉢覗く少女や青簾　岐阜　中西よし子
戸一枚明けて雨夜の燈籠かな　陸前　山形幸子
むつましく泳ぐ目高や谷の水　茨城　今西磯千鳥子
風鈴や青葉の風に音高し　能登　栗倉一子
引きあぐる帆に朝の風薫るなり　金澤　佐藤しげる子
樹に草に風の輕さや夕月夜　飛彈　南　峰子
卯の花に君待つ宵の灯かな
紫陽花に蜘蛛の巣つくる夕哉　岐阜　中村華子
若竹や月に浴後の洗ひ髪　神戸　梶原京子



ゆたかさや村に千本鯉のぼり　美濃　芳翠敏子
ものいはで人を惱ます牡丹かな　同　目島眞砂子
寺男掃きも捨てず櫻の實　同　酒向鈴枝子
蚊帳の中に子供は走り廻りけり　臺灣　瀬戸本秀代子
草に消ゆる西山の日や鳴く水鷄　美濃　酒向清子
百合咲いて君の病の癒えにけり　同　酒向ますえ子
丸太橋越へて行く野や雲の峰　同　酒向百子
雷の小百合に震ふ畑哉　同　酒向京子
暑き日の鰻賣一人通りけり　神戸　足立あさ子
虫干や今は昔の戀衣　同　足立ゑい子
憂き戀の瓶の白百合散りにけり　横須賀　柏原みな子
白百合や庭黄昏れて人あらず　岩代　岸野常子
夕顔や椽に絹張る女絵師　岐阜　山田はき子
三願する人の庵や子規　同　後藤英子
將軍のやしきのあとや栗の花　同　中野梅子
夏痩や我れ旅にして感多き　同　山田ゑい子
さびしさに星の數よむ小窗哉　兵庫　古東靜子
夏の日は白帆の陸に入りにけり　同　古東すみ子
灯ともして幽の棚拭く女哉　越後　岩本芳子
夕立や椽に飛び居る草の虫　相模　藤原下枝子
月出て遠くなりたり水鷄哉
炎天を帽大なる小僧哉　東京　富久永氏子

●字數あて披露

先月廿二日午後一時より、本誌本年第五、六月號にて懸賞募集したる官報字數あての審査を、本社重役及編輯局總員立會ひの上行ひたるが

正解七百五十九字

といふは一人もなかりしを以て、其數に近きものより等級を分ちたり、其結果左の如し

第一等　七百五十五字　北海道空知郡落合村　菅井松之進
第二等　七百五十字　東京本郷區春木町一丁目卅一番地　北橋ふさ子
第三等　七百七十四字　仙臺市東二番丁六十六番地　四竈しん子
第四等　七百七十七字　府下豐多摩郡千駄ヶ谷村九百九十八番地　富田萬次郎
第五等　七百八十字　東京市芝區田町九丁目四十番地　櫻井政一
第六等　七百八十二字　千葉縣安房郡長尾村瀧口　福原ひさ子
第七等　七百二十八字　神戸市山本通一丁目二十六番地　足立あさ子
第八等　七百二十五字　富山縣下新川郡大字家庄學校　結城てる子
第九等　七百二十一字　神戸市奥平野二百九十四番地　楠原綾子
第十等　差字數二百字迄　東京　松井亢子外五十一名
第六十一等同　自二百一字至三百五十七字　群馬　小野里鶴子外二百四十名

定價

	定價
一冊	前金 貳拾錢
三冊	前金 五拾七錢
六冊	前金 壹圓拾錢
拾貳冊	前金 貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料

五號活字二行廿三字詰	四半頁十六行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年六月廿六日印刷
明治四十一年七月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　阪本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　守岡功

發行所　株式會社國光社
振替貯金口座番號 壹壹七八番
(電話新橋二六九三番)(電話新橋特八八番)

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

◎第一家庭に於ける德育 ◎第二家庭に於て起り易き弊害 ◎第三兒童の賞罰 ◎第四遊戲の價値
◎第五兒童文學 ◎第六兒童と自立心 ◎第七感情教育 ◎第八家庭と園藝 ◎第九兒童と言語
◎第十兒童と圖書 ◎第十一青年教育の注意 ◎第十二男女の兒童 ◎第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社** ‖ **關西大賣捌** 大阪市南本町 **積文社**

華族女學校御編纂

國語假名遣ひ一覽

折本

壹部　定價　金拾貳錢

郵稅金貳錢

従來國語の假字遣を教ふるに多くはたゞ五十音の順次のみによりてその語を配列するを例とせるが本書はまづその語原近きもの意義通へるものを一括して之を類推せしめむと計り成るべく記憶の勞を省かしめんとせり本社曩に華族女學校の御下付を得て世に公にす國語研修者文學者には座右必携の要書なり

大宮兵馬先生著述

國語譯文假字遣ひ法

全一冊

菊判大和綴

定價金拾八錢

郵稅　金貳錢

本書は、中學校、師範學校、高等女學校生徒の教科用及び參考用に供せんとす。書中の編次は、まづ普通の言文中に屢上るべき、各種の語につきて、其の發音とかなづかひとを教授するに、從來の如く、生徒をして、強ひて之を暗記せしむる方法を採らずして、別に新案を以て、語原により、語意によりて、自ら推理して會得せしむべき方法を用ゐたり。其三の各條下に、更に細字を以て古語若くは常に言文に中古以上を座右にきは自然上らざる語をも叙列し、一切網羅して餘す所なきものは、各學年を通じて、の如何なる言文にも、適用せしめんことを欲してなり。されば學生は常に之を備へ文章を作るとき若しくは讀書の際假名遣ひに疑はしき場合に對照するときは正しき假名遣ひ法に習熟することを得ん

發行所　東京築地　國光社

女鑑

明治四十一年七月一日發行　毎月一回一日發行　第拾八年第七號　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

